平成３０年３月ＮＨＫ中央放送番組審議会

３月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、視聴番組「就活応援ＴＶ～学生と企業のホントの本音～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　大日向雅美（恵泉女学園大学学長）
副委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　　員　石戸奈々子（ＮＰＯ法人ＣＡＮＶＡＳ理事長）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)代表取締役専務執行役員）
大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
鎌田　　實（諏訪中央病院名誉院長）
佐野真理子（主婦連合会参与）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社執行役員論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
西原浩一郎（金属労協顧問）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)執行役員メディア事業開発担当）

（主な発言）

＜視聴番組「就活応援ＴＶ～学生と企業のホントの本音～」
(総合　３月４日(日)後 11:00～５日(月)前 0:00 放送)について＞

○　大変おもしろく見たが、企業側の本音をどこまで引き出せたのかについてはやや疑問に思った。「第１志望でないといけないか」という学生の質問に対し、ほとんどの企業が「第１志望と言わなくてもよい」と言っていたが、正直に第２志望と伝

えたらどうなるのか、など、もう少し企業側の本音を突っ込んで聞いてほしかった。インターネットやＳＮＳとも連携していたことで、放送後に番組の存在に気づく学生もいると思うので１回だけで終わらせずに、１シーズンに２、３回放送し、さらに若者たちを巻き込んでいってもらいたい。

○ 学生側は本音で語っているように見えたが、会社を背負って出演しているせいか、企業の採用担当者が本音で語れていたかは疑問だ。会社名を出して担当者が発言することに意味のある場面もあるとは思うが、匿名にして答えやすい質問を作るなど、企業側の本音を引き出す演出の工夫がもっとあるとよかったのではないか。ただ、それでも企業側の考えがところどころかいま見えた点は興味深く見た。ＳＮＳでは参考になったという反響が散見されたが、学生にとって参考になったのが、企業に合わせた自己ＰＲのしかたなどのハウツーだとしたらさみしい気がする。番組のねらいが本音で双方がぶつかることで、それを就活応援とするのならば、学生は将来の思いや企業への思いなどをどう伝えれば良いのか、企業側も学生の本音をどう引き出すのか、自社の理念をどう伝えるのか、そういった学生と企業双方の就活の本質を追求するような番組であればよかった。そんな番組もぜひ制作してほしい。

○ 就活生目線で考えられ、資料を読んだだけでは得られないような、テレビらしいリアルな就活情報が満載の番組だと思った。就活生にとっては、漠然とした質問にそれぞれの企業が生放送で答えていることがリアルで、大事なことだと思う。中でも、模擬面接が一番参考になったのでないか。ことばに詰まった学生にＭＣが「一生懸命しゃべることが大事」と言って励ましていたのは温かい気持ちになった。また、「なぜ第１志望かどうか聞くのですか」という学生の質問に対し、緊張して真っ赤な顔で答えている方をＭＣの方がうまくまとめていたり、「第２志望でもありがたい」という企業側の発言の後に、就活情報サイトの木之本敬介さんが「学生には第２志望であっても第１志望と言うように勧めます」と言っていたり、それぞれの立場からきちんと番組でのフォローが行き届いていたと思う。カジュアルな雰囲気の番組だったが、生放送のリアルな部分ときちんと伝える部分のバランスがとてもよかった。人事部への取材で「“こいつ、うそだったのか”みたいな採用の失敗はありますか」という質問があったが、懸命に人事の仕事をしている方に対してことば使いが適切だったか疑問に思った。

（ＮＨＫ側）

ＶＴＲのインタビューの「こいつ、うそだったのか」という声について、その表現をそのまま使うかどうかは迷った。自分を偽り、演じ、会社に入ることはどうなのだろうと疑問

に思う学生と、就職した後で話を聞いたら面接で言っていたこととまったく違うではないかと思う企業側との間にすれ違いが実際には多くあるようなので、そういうすれ違いがあるかどうかストレートに聞いたインタビューだったため、あえてそのまま使った。

○　大学３、４年生が最も関心を持つ就活というテーマを生放送の緊張感の中で取り上げたことは挑戦的で、おもしろい試みだったと思うが、メディア、サービス、製造業など業界ごとにまったく違う人材を要求する昨今の就活において、それを一つの番組で取り上げてまとめるのはやや無理があったのではないか。また、実際には就活時期が前倒しになっている状況もあると聞くので、既にノウハウを積み重ねた学生にとっては物足りない部分もあったかもしれない。ＮＨＫは中立的であるべきなので、ＮＨＫの人事担当者が番組に出演する必要があったのかについても疑問に思った。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの人事担当は番組に出る必要があったのかという点はずいぶん議論した。企業の方々に本音で答えていただくことを大命題にしたときに、多くの会社の人事担当者に会社を背負って出て発言してもらう以上、もしＮＨＫに質問が出たらきちんと答えようという姿勢を見せたかった。

○　あれだけ多くの学生と人事担当者の顔を出す企業を集められたことが今回の番組の一番すばらしい点だと思う。せっかく“場”を作ったのであれば、専門家の解説やフォローはいらないので、学生がどんどん質問をし、企業の方が○×形式で答えて生の声をぶつけ合うことで、もっと迫力ある番組になったのではないか。ＮＨＫの人事担当者が企業側で出演したことについては、ＮＨＫも本音をぶつけ合う場の一員として番組を作る姿勢が示されていてよかった。今回の演出は、全体的なバランスはよかったかもしれないが、お笑いの要素は不要だったような気がする。模擬面接は学生にとっても参考になったと思うが、人事部のパートはもう少し短くてもよかった。

○　最近の就職活動においては、マニュアルのようなものが多くあるようだが、そんな時だからこそ、企業と学生、双方から本音で何が大事なのかを引き出そうとしたのはよかった。就活や仕事などＥテレで放送するようなテーマを総合テレビで放送すると必ずバラエティー化するように思う。幅広い年代の人に番組に親しみを持っ

てもらいたいという制作者の気持ちの表れなのだろうが、タレントをたくさん出演させるなどの演出にすると番組全体が騒々しく感じる。

○　リアリティーを感じ、とても興味深い番組だと思った。ＳＮＳやライブストリーミングと連携していたことで、テレビ中心に生活をしている学生にとっても、ネット中心に生活をしている学生にとっても、届きやすい仕組みになっていたと思う。この番組をきっかけに同じ不安や心配事を抱えた就活生同士がＳＮＳでつながれたことはとても価値があったと思う。ただ、多様性についてももっと配慮があるとよかったと思う。例えば、ファッション一つをとっても、企業側もいろいろな考え方があり、学生側も個性を出すという考え方もあれば、無難に求められる服を着る考え方もあれば、服装に規定がある企業は自分には合わないという考え方もあると思う。仕事に就いた後も正解はない、考え方次第だということをより強調できるとメッセージとして伝わりやすかったのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

場づくりが一番大事なので、自由に語り合える空気感をスタジオに作ることが番組の最大の目的だと思って制作した。出演した企業の担当者から「ライブストリーミングでは本音を話せるが、総合テレビの生放送では言いにくいこともある」といった意見もあった。１時間のテレビだけで完結するのでなく、その後のライブストリーミングの１時間も含めて、学生の疑問に答えられる番組になればよいと思った。実際にはテレビの１時間しか見ない学生もいれば、家にテレビがなく、インターネットでライブストリーミングだけを見た学生もいた。どちらかしか見なかった視聴者にどう訴求するのかは今後の課題かと思う。

○　内容自体はそんなに目新しいと思わなかったが、テレビも新聞も見ない若者がたくさんいる中で、若者たちがこの番組を見てよかったと思ってくれていれば成功ではないかと思う。画面下にＳＮＳに投稿された文章が流れていたが、字がかなり小さく感じられたので見やすく工夫してほしかった。

（ＮＨＫ側）

ＳＮＳの出し方についてはずいぶん議論したが、視聴者からの投稿と放送で語られている内容ができるだけ合ったほうがよいということで、投稿を１行でテレビ画面に出した上で、

分量のあるものは番組後半できちんと読み上げ、議論をすることにした。

○　採用活動は今や企業のトップ自らが自社の魅力を学生に伝え、人材を確保しなくてはいけない時代だと思うので企業側の参加者が人事担当者ばかりだったのには違和感を覚えた。大手企業が多かったのでそういった方針の企業がたまたまそろったのかもしれないが、企業側は経営トップ、もしくは経営に携わっている人が会社のビジョンも含め、話をするような形で学生と向き合うほうが番組としては説得力があったのではないか。

○　就職活動がスタートするタイミングで、生放送ならではの臨場感、緊張感の中、学生の不安や率直な疑問、企業側の採用活動に臨む本音を少しかいま見ることができ大変興味深かった。模擬面接を含め、就活生にも気づき、参考になる点があったのでないか。また、ＮＨＫで放送するとなると企業側が本音で語るのが難しいのは当たり前だと思う。そんな中でも事前のインタビュー、アンケート結果等をうまく活用し、できるだけ本音を引き出そうという努力はかいま見えたし、実際に本音がにじみ出ている場面もあったのはよかったと思う。今年は相当な売り手市場という話が強調されていたが、就職しても数年で離職してしまうという問題もある。就活生に寄り添った番組の姿勢は見えたが、就活生が小手先だけのテクニックに頼らず企業を見極める目、企業を選択する際の視点に示唆を与えるような場面があったほうがよかったのでないかと思った。そういった視点があれば番組としての意義はもっと高まったのでないだろうか。

○　生放送後に続きをライブストリーミングで配信することは大変先進的な取り組みだと思った。ただ、就活生の真剣さは理解しているが、番組自体は冗長に感じられた。昨今の就活事情はどうなっているのか、企業はどんな工夫をして学生を獲得しようとしているのか、学生はどんな活動をして何社くらい回るのかなど、就活生以外の人が見ても関心が持てるような工夫がほしかった。学生と企業のやりとりも表層的なものが多く、本音を引き出すまでには至らなかったと思う。事前にアンケートをとっていたのなら、内容を整理した上で表層的なやりとりはなるべく時間を取らないようにし、その奥にある本音を引き出すところに時間を使ったほうがよかったと思う。模擬面接で肉が好きではない人に肉の魅力を伝えるにはどうするか、といった質問をした担当者がいたが、企業側がその質問で学生の何を見ようとしたのかもっと突っ込んで聞いてほしかった。

（ＮＨＫ側）

模擬面接は企業の採用担当者の質問の意図を読み解くための企画だった。肉の話は延長戦のライブストリーミングで面接をした社長が意味を答えており、なぜ嫌いなのか、なぜ好きなのか、お互いが違うことから歩み寄るコミュニケーションが始まることを大事にし、あえて「私はお肉が嫌いですけれども」と話をすることで、違う価値観を持った者同士がどう歩み寄れるのかという人間力を見たかったとおっしゃっていた。１時間の番組の中ではそのことを伝えきれなかったという反省はある。

○　興味深く拝見した。生放送後にライブストリーミングで配信していて、学生や若い人を意識したものだと思ったので、特にターゲットである就活生に届くようなＰＲをもっとしたほうがよかったと思う。模擬面接は、生放送ならではの緊張感のなか、他の就活生がどう対応しているのかがかいま見えて、学生にはとても参考なったのではないか。大学で何をしたかをただ聞きたいのではなく、そこでの自分の経験値を今後にどう役立てていくのかを面接官も引き出したかったというのが伝わってきた。番組では、高校卒業後、あえて大学で４年間勉強してから就職する意義のようなものを面接官は見たいのではないかと思うのだが、その掘り下げは少し足りなかったかと思う。また、ＭＣは、皆さんの意見を引き出すような役割に徹したほうがよかったと思う。

○　現在の学生の就活の様子がわかっておもしろかった。番組進行と同時にＳＮＳの投稿が紹介される演出もよかった。番組を見ながら、投稿を見るのは結構忙しいので、１行というのは適度だと思うし、意見に率直さが表れていてよかった。学生たちの演技、テクニックに流されないようにありのままの姿を見ようとしている企業側のコメントがすごくよかった。学生たちにも参考になるはずなので、模擬面接後に面接官たちからの講評があったほうがよかったと思った。一方で、企業の方が「第２志望なら第２志望と言ってもらって構わない」と言っているのに、「第１志望と言ったほうがいい」というゲストの方のコメントには違和感を覚えた。相手にいい印象を与えるためには、その場をうまく切り抜けられればいいといった誤った印象を与えかねないと思う。

○　オープニングを見て、またバラエティーかと引いて見ていたが、若者たちから「この番組はためになる」「必死でメモを取っている」というＳＮＳの投稿がたくさん届いているのを見て、若者の心をつかんでいてよかったと思った。どこの大学でも

就職支援には力を入れているはずなので、番組でなぜ学生たちがあんな初歩的なことを聞くのだろうかと疑問に思ったが、学生たちは大学のキャリアセンターなどで教えられていることが本当に正しいのか疑問を感じていてその思いを企業の人事担当者にぶつけているのだと思った。学生たちは就活に恐れを持っているので、番組を見たことで「企業の人はこんなにやさしいのか」と伝わったとしたらよかったと思う。ＮＨＫがそういった場を提供したことは評価したい。ただ、企業側の方々の答えはきれいごとすぎた気がする。今後は、学生が司会をして企業の担当者と本音をぶつけあうような番組ができるとよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

番組を作るにあたり、バラエティー番組なのか、徹底討論番組なのかずいぶんと議論した。その中で私たちがこのタイトルを付けたのは、バラエティーでも徹底討論してきちんとした答えを出す番組でもなく、カジュアルな空気の中で本音をぶつけ合う場を作ろうということからだ。どこまでくだけるか議論する中で今回はこのような着地点になったが、ご意見は今後に生かしたい。

就活生でない視聴者にどれだけ響いたのかというご指摘はその通りかと思う。番組を企画するにあたり、今回は実際に就活する学生に響く番組にすることを最優先に考えた。さまざま課題はあるが、今後は働くとはどういうことなのかという深いところまで取り上げる番組など、複数の番組で就活生に応えることが必要かと思っている。

（ＮＨＫ側）

“場”を提供し、視聴者にテレビをうまく使ってもらうことがこれからどんどん必要になるだろうと思った。テレビとネットでは役割が違うが、両者の特徴を議論し、次の新しいテレビの形を探れればと思う。

＜放送番組一般について＞

○　３月４日(日)のＮＨＫスペシャル「“河川津波”～震災７年　知られざる脅威～」を見た。東日本大震災７年目にして初めて、河川の津波の怖さを見た気がする。１０キロ以上も河川をさかのぼってくる津波があることは震災前にはほとんど知ら

れていなかったと思うが、震災の脅威を改めて感じた衝撃的な番組だった。今後起きるといわれている南海トラフ地震が発生した場合の教訓としてもとても参考になった。地震発生時点での対応や日ごろからの備えを考える際に、地方都市と東京のようにビルが建ち並んでいる場所ではまったく違うと思うので、ポイントをもう少し説明してもらえるとなおよかったのでないかと思った。

○　３月６日(火)のクローズアップ現代＋「原発事故　“英雄たち”はいま　被ばく調査拒否の実態」はとても考えさせられる番組だった。原発事故の収束作業にあたった作業員の健康調査の動向を莫大な資料をもとに明らかにしていたが、２万人の作業員のうち１万 2,000 人がその後の健康調査に応じていないということには驚かされた。国や電力会社、研究機関に対しての不信感から応じない人もいるが、中には「健康調査のために仕事を休むと元請けから仕事をもらえない」と述べる作業員も紹介されていた。作業員自らが「捨て駒だった」と言わざるをえない状況に追い込まれている現状について国は誠意を持って説明し、対応する義務があると感じた。番組の中で監督官庁のコメントがないのは残念だった。

○　３月６日(火)のクローズアップ現代＋「原発事故　“英雄たち”はいま」を見た。出演した教授は環境医学が専門のため、調査全体についての解説が多かったと思うが、番組では調査に応じていない作業員たちの個々の声にも向き合っていて、その部分ではいささか食い違いがあるように感じた。

○　３月７日(水)のＮＨＫスペシャル「被曝(ばく)の森２０１８～見えてきた“汚染循環”～」(総合 後 10:25～11:15)を見た。植物、虫、鳥、サルなどを対象に、被ばくの現状を分析し、汚染された環境の実態についてはいろいろと分かったが、人間に対してはどのような影響があり、どう対応したらいいのかというところまで突っ込んで伝えてほしかった。

○　３月１０日(土)のＮＨＫスペシャル「誰にも言えなかった～震災の心の傷　母と子の対話～」を見た。東日本大震災で家族を亡くした、当時３歳の女の子がトラウマとして抱えた恐怖や悲しみと向き合い、心の傷を徐々に癒やしていく様子を丁寧に取材しており、心に迫る番組だった。非常に重いテーマではあるが、最後は希望につなげるような示唆もあり、被災者に寄り添った番組だったと思う。震災で心のダメージを負った子どもたちの現実をしっかりと伝える秀逸なドキュメンタリー番組だった。

○　３月１０日(土)のＥＴＶ特集「忘却にあらがう～福島原発裁判・原告たちの記録

～」は大変心に残る番組だった。原告一人一人の声をなるべく多く拾っていたことがよかったのでないかと思う。

○　３月１１日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ東日本大震災「めざした“復興”はいま…　～震災７年　被災地からの問いかけ～」を見た。空き地の問題、災害公営住宅の高齢者の問題、子育て世代の帰還の問題など、当初の復興の理想と復興が進む中で見えてきた現実とのはざまで、被災地や被災者が直面しているさまざまな問題を浮き彫りにしていた。当初の思いや制度、見えてきた現実や被災者の気持ちの変化などを行政や被災者への取材・アンケートで分かりやすく整理しており、事態の深刻さが非常によくわかる番組だったと思う。番組の最後の大越健介キャスターの「復興とは何か」という問いが、政治、行政だけでなく、日本国民全体に向けられたことばであることが伝わる意義深い番組だった。

○　３月１１日の前後には、ＮＨＫスペシャル　シリーズ東日本大震災「めざした“復興”はいま…　～震災７年　被災地からの問いかけ～」など多くの東日本大震災の関連番組を放送していて、絶対に風化させないというＮＨＫの執念を感じた。センセーショナルに取り上げようとすると、うまくいっていないことだけをクローズアップしたり、誰が悪いのか糾弾する作りになったりしがちだ。ＮＨＫスペシャル「めざした“復興”はいま…」は、課題はあるものの、関係者の皆が努力しており、個々の努力には頭が下がるのだが、それでもやはり課題は残る、という解決策が見いだせない難しい問題であることがよく伝わってくる番組になっていた。

○　３月１２日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「どんな時も、そばにいる～地域医療医師・長純一～」は石巻で地域包括ケアをしている長純一先生のことを取り上げていた。長期に渡って密着し、多くの患者に寄り添ってきた長先生の日々がつづられており大変すばらしい番組だったと思う。ただ、制作者が在宅診療の様子を番組で伝えたい気持ちは分かるが、壊れたコミュニティーの再生に懸命に取り組む長先生にももう少し寄り添った内容にしたほうがよかった。また、在宅ケアで亡くなった方が撮られているが、第三者として見る限りでは皆さんが納得しており、感動的に撮られていたが、ご家族はどんな思いだったのか気になった。いつでも撮る側がステレオタイプに「こうすればきっとよい番組になる」と思い込みすぎずに、撮られる側の気持ちにもきちんと寄り添って番組を制作してほしいと思った。

○　３月１７日(土)のＮＨＫスペシャル　メルトダウンＦｉｌｅ．７「そして冷却水は絞られた～原発事故　迷走の２日間～」を見たが、よく検証されており意義深い番組だった。７年前の３月１７日に注水量を減らしたことがきっかけで１８日、１

９日、２０日と放射性物質が放出され、一部は関東地方にも届いたが、なぜ放出は止まらなかったのか、当時の現場の混乱した様子をドラマで再現していた。リスク管理の観点からも何かが起きたときに１人だけで全部の事態に対応することが不可能なのは当然だが、誰かが注水がちゃんとされているかを確認していれば被害はもっと小さくできたのかもしれないということで、さまざまな課題を投げかけられた気がした。

○　３月は東日本大震災から７年ということで、多角的な視点から関連番組が放送され、それぞれに見応えがあった。時がたつ中で東日本大震災の被災地に対する関心が薄れてきているのが現実だと思う。原発問題も含め総合的な観点で追い続けるのはＮＨＫにしかできないことなので、公共放送の役割としてこの時期に限らず通年でしっかりと社会に問うような番組を続けていただきたい。

○　３月は「ＮＨＫスペシャル」をはじめ、総合テレビ、Ｅテレでもたくさんの東日本大震災に関する番組が放送されたが、いずれも津波被害、復興、原発のその後、環境、住民裁判の現状など、さまざまなテーマを広く深く、視聴者に分かりやすくまとめていた。どの番組も被災者の目線で取材されていたことは評価できると思った。風化させてほしくないという被災者の叫びを制作者がきちんと受け止めていることが番組に反映されていた。これからも震災や原発について番組を作り続けてほしい。

○　東日本大震災を風化させてはいけないというのはその通りかと思う。ただ、丁寧に追い続けることが大事だと思う一方で、すべての物事は風化するという現実を受け止めることも社会で生きる上ではすごく大事なのではないかと思った。

○　「ＮＨＫスペシャル」をはじめ、今年も３月１１日前後に、綿密な取材を重ね、手厚くさまざまな番組で東日本大震災を取り上げていただけたことに深く感謝したい。年月が経過すればどうしても風化していくことは避けられないが、だからこそ別の視点で新しい番組もできるのでないかと期待している。

○　１月２７日(土)のＮＨＫスペシャル　未解決事件Ｆｉｌｅ．０６「赤報隊事件」(総合 後 7:30～8:43)と２８日(日)の同番組「赤報隊事件　戦慄の銃弾　知られざる闇」を見た。当時を覚えている者も舌を巻くような細部まで再現されており、綿密に取材されたことが伺われる番組だった。事件を紹介した部分はもちろん見応えがあったが、言論の自由について事件が持つ今日的な意味を現代に問いかけ、異論を持つ者を「反日」ということばで封じ込めようという現代の風潮にまで踏み込んで

コメントしている番組の作りに感銘を受けた。取材スタッフの姿が少し映像に映っていたが、かなり若く見えた。おそらくあの事件当時はまだ記者ではなかったと思う。そういった世代の人たちが言論の自由について思いを込めてこの番組の制作に携わっていることはとても意義深いことだと思う。メディアに限らず、一般の人も「物言えば唇寒し」といえるような状況があちこちで生まれているようにも思うが、ＮＨＫには引き続き社会の情勢を敏感にすくい取って番組で取り上げていってもらいたい。

○　３月１８日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ人体　神秘の巨大ネットワーク第６集「“生命誕生”　見えた！母と子　ミクロの会話」を見たが、今まで分からなかった最新の科学技術も取り上げており、大変勉強になった。セットにも圧倒されたが、音楽などすべてが調和していてすばらしい番組だった。最後に木村佳乃さんが生命誕生の神秘に触れて「もしも生まれ変わっても女性になりたい」と言っていたが、私も同じ気持ちだった。

一点お願いがある。番組に関連した特別展をやっているとのことだが、全く知らなかった。番組を見た人の中には展示に行きたいと思う人もいると思うので「ＮＨＫスペシャル」のホームページに掲載するなどしてもっと広くＰＲしてほしい。番組といろいろとコラボレーションし、展開することは大事なことだと思っている。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「シリーズ人体　神秘の巨大ネットワーク」と連動して特別展「人体　神秘への挑戦」を開催している。機会を捉えてお知らせしているつもりだが、よりわかりやすく工夫していきたい。

○　３月１８日(日)の「サンデースポーツ」を見たが、出演していたお笑い芸人が、番組をもり立てようとしていたのだろうが、うるさく感じられた。以前はマンスリーキャスターとしてアスリートの方が出演していたが、そのほうが落ち着いて番組を見ることができてよかった。

○　３月１９日(月)の「あさイチ」では受動喫煙を取り上げ、マンションの隣人がベランダで吸ったタバコによって健康被害を受けて警察に相談した女性のケースを紹介しており、紹介する事例がやや極端に感じられた。他の日の放送でも同じように感じたことがある。１つのテーマを取り上げる場合、きちんとバランスを勘案して伝えるべきではないか。

（ＮＨＫ側）

「あさイチ」は視聴者からの声で、違う意見にはこういうものがあったとファックスで紹介することも含め、バランスを取ろうとしている。指摘があったことは現場に伝える。

○　３月１２日(月)のテストの花道　ニューベンゼミ「ムダをなくして成績アップ！勉強のダンドリ術」を見た。学習アドバイザーの清水章弘先生が勉強の無駄をなくすという内容で英語を記憶する方法を分かりやすく伝えていた。ホームページで日ごろの勉強やテスト前の対策に役立つ便利なツールが「ニューベンツール」として紹介されているが、終了する番組なのでいつまで見られるのか気になった。

（ＮＨＫ側）

「テストの花道　ニューベンゼミ」は３月で終了するが、少なくとも１か月は番組ホームページを残す。

○　３月１７日(土)のスペシャル番組「１００分ｄｅメディア論」(Ｅテレ 後 11:00～18 日(日)前 0:40)を見た。メディアについて論じられた数冊の名著が紹介され、最初にウォルター・リップマンの「世論」が取り上げられた。リップマンは、ステレオタイプという有名な概念を初めて用いた人物だ。人々がステレオタイプのような「視点」や「バイアス」を抱いてしまうことに対してメディアはどうあるべきなのか。今あらためて、リップマン、あるいはステレオタイプと戦うメディアを振り返らなければならない時代だと強く思った。こういう番組を作っていただき、たいへん心強かった。

○　２月２６日(月) のシリーズ“脱炭素革命” 第１回「激変する金融ビジネス　“石炭”からの投資撤退」、３月５日(月) の第２回「激変する電力ビジネス　再生可能エネルギーへのシフト」、１２日(月)の第３回「激変する世界ビジネス　グローバル企業の挑戦」(ＢＳ１　後 11:00～11:49)を見た。この手の番組は１時間位の単発特集で終わってしまうことが多いが、今回は３回連続で内容も幅広く網羅しており、大変勉強になった。パリ協定を契機に、世界の機関投資家の間で化石燃料産業への投資を引き揚げる動きが加速していることや、再生可能エネルギーへシフトしている電力ビジネスの最前線について、また、企業が考える新しいビジネスモデなどを紹介していた。３回シリーズを通して、幅広く企業として注視する部分と社会が注力・注視しなければいけない部分を分かりやすく示していたと思う。コストやさまざまな制約の中で日本がなかなか世界の動きに追いつけない原因がどこにあるのか、ある程度分かったが、うまくいっていない原因をもっと明確にし、社会に対してメッセージを発信できるような番組であれば、私たち自身がやらなければいけな

いという自覚を持ててなおよかった。

○　３月１７日(土)のシリーズ深読み読書会「小松左京“日本沈没”～戦後最大の問題作！？」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10:00～10:59)を見た。小松左京さんが阪神・淡路大震災の被災者を訪ね歩き「日本沈没」の続編を書こうとする中で心身を患ってしまったとい話を聞き、震災や被災者と本当に向き合うというのはそれぐらい重い話だということが心に残った。

○　ＮＨＫの教育番組は質の高さはもちろんのこと、この国の社会基盤の１つとさえと思っている。親子で「Ｅテレ０６５５」を毎朝見ているが、この番組のよいところは６時５５分にテレビで見ることの価値が最大限生かされていることだと思う。メディアやライフスタイルが多様化し、視聴スタイルも多様化するなか、コンテンツがいつでもどこでも見られることが当たり前になりつつある今でも、毎朝６時５５分に見たくなる番組だ。そろそろ目を覚まし、支度をしなければいけないときに生活リズムを刻んでくれ、５分という短い時間の中にも、季節の変化を感じさせるようなコーナーやスマートフォンを使って参加できるコーナーなど多様な企画が織り込まれている。ＮＨＫオンデマンドでは朝の幼児向け番組がないが、配信してもいいのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

「Ｅテレ０６５５」について、生活習慣を身につけていただくためにテレビでやっているところもあるので、子ども向けのデジタルコンテンツとしてネットで配信するかどうかについては慎重に議論している。

○　ピョンチャンオリンピック、パラリンピックはとても感動的だった。改めてテレビはスポーツと相性のよいツールであると思った。

○　ピョンチャンパラリンピックをしっかり放送していて、大変すばらしかった。スキーをやったことのある人であれば、座った姿勢で１本の板に対して左右にエッジを利かせることは神業に近いことがよくわかる。パラリンピック選手がいかに努力をしているか、映像からも伝わってきた。私たちはアスリートから多くの感動をもらったが、パラリンピックの選手の活躍する姿からも感動をもらった。ＮＨＫには今後もオリンピックだけでなくパラリンピックも放送し続けてほしい。

○　文部科学省が前川喜平前事務次官の名古屋市の中学校での講演に事実上干渉し

たことについて、ＮＨＫがしっかりと報道していたのはよかったと思う。こんなことがまかり通ると教育現場は萎縮してしまうので、今後も事実をしっかり伝えていってほしい。

○　今年の冬はすごく寒かったが、なぜこんなに寒かったのか気になっている視聴者も多いと思うので分析した番組を放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

今年は日本海側で大雪が降るなど、例年より寒かったという印象が確かにある。地球温暖化など大きなテーマについては、ＮＨＫスペシャル「シリーズＭＥＧＡ　ＣＲＩＳＩＳ　巨大危機」などでタイミングを見て取り上げているので、引き続き期待していただきたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年２月ＮＨＫ中央放送番組審議会

２月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（平成２９年度第３四半期・１０～１２月）について説明があり、続いて、「平成３０年度国内放送番組編成計画」および「インターネットサービス実施計画」について説明があった。その後、シリーズ欲望の経済史～ルールが変わる時～　第１回「時が富を生む魔術～利子の誕生～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　大日向雅美（恵泉女学園大学学長）
副委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　　員　今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)代表取締役専務執行役員）
大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
鎌田　　實（諏訪中央病院名誉院長）
佐野真理子（主婦連合会参与）
田中　隆之（読売新聞東京本社執行役員論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
仲道　郁代（ピアニスト）
西原浩一郎（金属労協顧問）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)執行役員メディア事業開発担当）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（平成２９年度第３四半期・１０～１２月）について＞

○　前年同期と比べ、「ＮＨＫニュース７」、午後７時半から８時台の多くの番組で総合

視聴率がやや減少するとともに、高齢層のリアルタイム視聴も落ち込みがあり、また、午後１０時台の「ファミリーヒストリー」などでは高齢層の視聴が増加したとのことだった。高齢層が離れた分、午後７時半から８時台には、若い視聴者層に見られている番組もあるとのことだったので、ゴールデンタイムの視聴率だけをみると一見苦戦しているように見えるが、「所さん！大変ですよ」などの番組は新しく若い層に見てもらえているのだからいいのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫニュース７」は高齢層の視聴率が減少していることが気になっている。さまざまな調査を行い、分析しているところだ。一方で見てほしい視聴者層にしっかり届いている番組もある。多角的な分析をし、それぞれの番組のよさを生かしてより多くの人に見てもらえるよう努めていきたい。

○　ＮＨＫの総合テレビの総合視聴率がやや減少しており、民放は総合視聴率が減少している局もあれば減少していない局もあるとのことだが、テレビ離れが進んでその影響をＮＨＫも受けているという評価なのか。ＮＨＫの視聴者層を民放にやや取られたという評価なのか。

（ＮＨＫ側）

今回は第３四半期の３か月分を示しているが、月ごとにも分析している。昨年１０月は総合テレビで衆議院選挙の政見放送を放送した。政見放送から通常番組に戻っても視聴習慣が戻らないことがあり、少なからずその影響もあったのではないか。１１月にもまだ戻らず、１２月になってやや回復した。ＮＨＫにとって第３四半期はやや特別な時期だったと受け止めている。次の第４四半期の推移に注目しようと思っている。

○　ＮＨＫは、テレビで４波をもっていることから、放送の質的評価については、それぞれの波の特徴が明確に出ているかどうかについて、分析をより深めてほしい。評価指標のどの項目も高い状態をめざすのではなく、波によって違いがあっても、４波全体を総合的に見たときに、視聴者の多様な期待に応えられていることが望ましい。今後も波の役割や個性を意識した編成を心掛け、視聴者に満足していただけるような放送・サービスの充実に努めてほしい。

（ＮＨＫ側）

テレビ４波については、総合的に捉えたときに多様性を確保したいと考えている。それぞれの波の特徴が明確になるように一層工夫していきたい。

○　ＮＨＫにはいろいろな番組があるので、ＮＨＫ全体として見たときに、それぞれの評価指標の数値が高くなっていればいいのであって、すべての番組がすべての項目でいい評価を求めると、ありきたりで平板な番組ばかりになってしまう懸念がある。知的好奇心が強い人に向けた難しい番組だと割り切ったようなとがった番組があってもいいのではないか。

＜「平成３０年度国内放送番組編成計画」
および「インターネットサービス実施計画」について＞

○　この審議会でもいろいろと意見を申し上げた「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画」は、文章だけで見るとどこか総花的に感じていたが、ことばの一つ一つが具体的に番組改定という形で今回の編成計画にしっかり反映されていることがよく分かった。その姿勢は大変評価できる。一方で、ＮＨＫを含めたマスコミ各社には、長時間労働が生まれやすい環境があるのではないか。働く人たちの心身の健康への対応をできるだけきちんとして、引き続きよい番組を作っていただければと思う。

（ＮＨＫ側）

「働き方改革推進委員会」などを設置し、ＮＨＫグループ全体の働き方を抜本的に見直しているところだ。働き方改革を進めて、放送業界が魅力ある業界だと思ってもらえるようにしていきたい。

＜シリーズ　欲望の経済史～ルールが変わる時～
第１回「時が富を生む魔術～利子の誕生～」について＞

○　「時間と空間の差異が富を生む」などさまざまな切り口で、経済史を読み解いていておもしろかった。ただ、富をため込むことは罪だと信じられていた時代に、巨万の富を得た罪の意識から、メディチ家が教会に寄付をしたり、多くの芸術家たち

の活動を支援したりしたことが併せて紹介されたが、捨て子の養育を支援していたという話も聞くので、そういった社会保障の面で人々に貢献していたことも紹介したほうがよかったのではないか。また、キリスト教社会についてはわかったが、イスラム社会についても触れてほしかった。

○ 歴史や宗教などさまざまな観点から経済を多角的にとらえており、興味深かった。タイトルの「欲望」ということばは、時に強欲というネガティブな意味に捉えられることもあるのだが、番組自体にも「資本主義は悪である」というようなニュアンスが含まれているように感じられ、そこは少し残念だった。欲望を喚起することは文化の発展につながっているという肯定的な側面もあると思うので、ＮＨＫは両面を客観的に見つめる必要があると思った。

○ 経済史を振り返ることで、現代におけるさまざまな問題について考えさせられる意欲的な番組だった。今話題となっている仮想通貨の問題などについても考えさせられた。どの国にも人に迷惑をかけず、見返りを求めないことが人としてのあり方であるという考えがあると思う。一方で、経済の分野では、利益が優先され、その過程では見返りを求める行動が前提となっている。「見返りを求めない」のか「利益優先で見返りを求める」のか、その人の立ち位置によって、冒頭で紹介された世界の３６億人分の資産がわずか８人の資産と同額という現実についても、受け止め方が変わるのではないかと思った。現代の日本には消費者金融による多重債務の問題など、利潤を追求しすぎた結果生じた問題が数多くあるので、番組では欲望をキーワードに利子が誕生する過程が紹介されたが、利益追求に伴う欲望の規制は経済史の中でどう展開されてきたのか、欲望をコントロールする知恵も紹介してもらいたいと思った。

○ 「歴史は繰り返す。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として。」というカール・マルクスのことばを冒頭で引用していたが、これは政治クーデターの話についてではなかったかと違和感を覚えた。よく取材し、国際的な視点が盛り込まれていた点は評価するが、「利子は悪」、「資本主義は悪」と捉えているように思えてやや心配になった。経済成長のプラス面にも触れてはいたが、経済の問題はイデオロギーが絡むので、バランス良く配慮し、取り上げ方には十分に注意してほしい。

（ＮＨＫ側）

資本主義を否定したいというようなことではない。例えばアメリカでは、貧富の格差への不満や社会主義的なものに対する期待が主に若者の間で広がっており、今改めてニュート

ラルな視点で資本主義を見つめ直してみようという趣旨で番組を制作した。今後も倫理の問題なども含めて考えるなど、経済現象を経済学の学問の中だけで終わらせない多角的な視点で議論できる番組作りを心がけ、公共放送としての使命を果たしていきたい。

○　興味深く拝見した。１月３日(水)のＢＳ１スペシャル「欲望の資本主義２０１８～闇の力が目覚める時～」(ＢＳ１　後 9:00～9:50、10:00～10:49)を偶然見てから、１月５日(金)からの新シリーズを見た。再放送を含めて関連番組を編成することで、次のシリーズの視聴につなげることも多くの人に見てもらうためには大切だと思う。シリーズ６回を通して見て、マイナス金利となっている現代の日本は、資本主義の歴史のなかで、どう位置づけられるのかが分からなかった。経済に詳しくない人でも分かるように、今の日本が見えてくるような番組を期待したい。

○　音楽がとてもうまく使われている番組だと思った。ドラマチックで、視聴者が興味を持続させるのにとても効果的だった。ドキュメンタリーでは、状況を整理するために使われる音楽は有効だと思うが、感情に訴える音楽を入れると一編の映画を見たような全く違う印象を抱かせてしまうこともある。番組ごとにどういった音楽をどの程度入れるのが効果的か、その選択がおもしろくもあり、難しいと思った。例えば音楽の使い方について、海外のドキュメンタリーと比較した違いも気になった。

○　2016 年に「協同組合の思想と実践」がユネスコの無形文化遺産に登録されるなど、特にリーマン・ショック以降、協同組合の考え方が見直されているように感じている。この番組は、その協同組合のあり方についても考えさせられる内容だった。協同組合は利潤を追求しないものだが、その理念は、資本主義にはよい面もあるが悪い面もあるという見方、競争や自由な取引は否定しないが、そこには制御があるべきだという考え方から生まれたものだと思う。この番組を見てキリスト教が最初は利子を禁止していたことを初めて知り、ヨーロッパには協同組合が生まれる文化的な土壌がもともとあったように思った。同時に、資本主義社会を肯定的に捉えながらも、利潤追求が行き過ぎないように歯止めをかけるような役割を、協同組合は果たす必要があるのではないかと考えさせられた。とても勉強になる内容だった。

○　タイトルに「経済史」と付いているだけで敬遠してしまい、今回は構えて番組を見たが、音楽や映像、アニメーションが芸術的で引き込まれた。また、「利子が禁断の果実であった」「欲望は増殖することを望む」など、分かりやすく印象的なフ

レーズが随所にちりばめられていたので、視聴者を引きつける演出になっていたと思う。経済に興味がない視聴者にとっても分かりやすく、ドキドキ、わくわくするような発見があり、興味を持つきっかけとなる番組としてよかった。

○　「欲望」というテーマで経済を扱うのはとても興味深く、宗教を含めて文化的に、経済の歴史を見ていくところがおもしろかった。利子だけでなく、為替にも言及しながら、メディチ家がそこから生み出した富で芸術家を支援し、ルネサンスにつながった過程を示していたが、結局文化的な側面が多い印象を受けた。第１回だけ見ると、タイトルの「経済史」にやや疑問を感じた。

○　経済学の巨匠たちの刺激的なことばがおもしろく、今を考えるヒントになる番組だと思った。もともと知的好奇心が強い人を対象にした番組に思えたが、そうでない人にもわかりやすく伝える工夫がもっとあってもよかった。オリンピックなどのスポーツ中継のように、見て楽しめるのがテレビの強みだが、こういった学術的な内容についても映像の強みをうまく使って、テレビが知的活動のために貢献できるということを今後も示してほしい。

○　資本主義という経済システムのあり方そのものに正面から向き合っている点は高く評価したい。格差拡大などさまざまな社会的課題が改めて注目されている今の時代だからこそ、必要な番組だと強く感じた。「欲望」をテーマにしたことで、宗教的な問題も含めて、人がどういう歩みの中で今に至るのか、経済史のみならず、人の歴史そのものを問うような番組になっていたと思う。ただ、知的好奇心を喚起する意味ではよかったが、ことばの説明や切り口にはもう少し工夫があってもよかった。「シリーズ　欲望の経済史　～日本戦後編～」も始まったが、財政や企業のあり方など、今の時代につながる課題がすべて入っているので、引き続き深く掘り下げた番組を制作してほしい。ＮＨＫにしかできないことだと思うので、期待している。

○　「欲望」ということばや資本主義についてネガティブに捉えているような印象も確かにあったが、シリーズを最後まで見たときに、最終回で「物質的な欲求が満たされると、よい生き方とはどんなものか考えられる」というコメントがあった。人間には善悪の二面性がある中で、正しくありたい、正しく見られたいと思うのもまた「欲望」と言えると思う。その意味で、タイトルの「欲望」はとてもポジティブな人間の本質だと感じられた。「利子とは忌むべきもの」から始まり、最後はよい生き方とは何か、生き方を考えることの大切さを伝えて締めくくったこのシリーズは、混とんとした現代において、人間の本質に立ち返ることの重要性を改めて感じ

させてくれた。

＜放送番組一般について＞

○　１月２７日(土)のＮＨＫスペシャル　未解決事件　Ｆｉｌｅ．０６「赤報隊事件」(総合 後 7:30～8:43)、２８日(日)の同番組「赤報隊事件　戦慄の銃弾　知られざる闇」を見た。新聞社の支局が襲撃され、社会に大きな衝撃を与えた赤報隊事件の真相に、ドラマとドキュメンタリーで迫っていた。実録ドラマは、仲間を失った新聞社の同僚たちが事件の真相に迫り、犯人を追い詰めるために懸命に苦闘する姿や、被害者や遺族の無念の思いが迫力ある映像をもって描かれていた。ドキュメンタリーは、ＮＨＫの取材力により、独自に入手した極秘資料、容疑者に浮上した関係者へのインタビュー、犯行声明文の解析を通して真相に迫っており、大変見応えがあった。二つの番組を通して、事件の核心に迫ろうとする姿勢が強く伝わってきた。特に、自らの主義・主張に反するものを排除しようという風潮があるなかで、民主主義を守るとはどういうことなのか、報道の自由・言論の自由をどう守るのかという問題を現代に強く問いかける内容で、非常によかった。

○　ＮＨＫスペシャル　未解決事件　Ｆｉｌｅ．０６「赤報隊事件」と「赤報隊事件　戦慄の銃弾　知られざる闇」は、ＮＨＫだからこそ制作できる番組で、とても感動した。

○　ＮＨＫスペシャル　未解決事件　Ｆｉｌｅ．０６「赤報隊事件」と「赤報隊事件　戦慄の銃弾　知られざる闇」を見て、事件を生々しく思い出した。今の若い人たちは事件のことを知らない人が多いと思う。３１年がたち、言論の自由について、主張の異なる他者を受け入れるという点で、社会は何が変わり、何が変わっていないのか、そうした視点がもう少しあるとより強く問題提起するような番組になったのではないか。

○　２月１４日(水)のＮＨＫスペシャル「金メダルへの道“一糸乱れぬ”挑戦　女子団体パシュート」(総合 後 10:00～10:49)を見た。日本チームの戦略や滑りをわかりやすく伝えていてとても興味深い内容だった。特に、隊列を組んだときに空気抵抗が小さく、隊列が乱れると空気抵抗が大きくなるということを 360 度カメラなどを活用しながら最先端の分析技術で紹介したのは説得力があり、日本の女子団体パシュートがここまできたのか、ということがよく分かった。

○　１月２４日(水)のクローズアップ現代＋「どう減らす？犬・猫の殺処分」を見た。６年前の動物愛護法改正を受け、殺処分される犬や猫の数は大幅に減少したが、その陰で自治体の収容施設や動物愛護団体が動物を抱えきれなくなり、深刻な事態が進行している現状が紹介されていた。さまざまな実態を取材し、動物愛護団体や行政担当者の話を聞いていて、とても中身の濃い内容だったが、厳しい実情が分かるだけに、殺処分についてあいまいさが残る問題提起だった。どうしたら動物の殺処分が減らせるのか、視聴者にもっと訴えかけるような内容にしてほしかった。また、殺処分対象だった犬・猫を引き取った人たちの声や、どうすれば動物を引き取れるのかなどについても取り上げてほしかった。これからもさらに問題は深刻化する懸念があるので、引き続き取材を続けてほしい。

○　１月２９日(月)のクローズアップ現代＋「“ドラレコ”革命～危険な運転を炙（あぶ）り出せ～」は、ドライブレコーダーが捉えた決定的瞬間が、自動車事故の真相究明につながることや、取り付けることで高齢者ドライバーが増えるなか、安全運転の啓もうになることなどが紹介されて大変よかった。番組内でキャスターがドライブレコーダーのことを“ドラレコ”、ゲストは、ドライブレコーダーと言っていた。例えばコンビニエンスストアは“コンビニ”と日常的に使われているが、ＮＨＫにおける単語の短縮・略称の基準があれば教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

今回の「クローズアップ現代＋」では“ドラレコ”とタイトルにつけている。ドライブレコーダーという単語が長いので短く言ったほうが視聴者にも親しみやすいのではないかと思い、“ドラレコ”を使った。アナウンサーのコメントにおいては、正式なことばと併用していたと思う。

○　２月１日(木)のクローズアップ現代＋「思いがけない退去通知　あなたも住宅を追われる！？」は、賃貸住宅の老朽化、取り壊しにより、居住する方が退去を迫られ、生活困窮状態にある高齢者の方々を追い詰め、結果として行き場を失っている深刻な事態を取り上げていた。専門家から日本の住宅政策に関するさまざまな課題が説得力ある形で解説されて大変興味深かった。前日に札幌市で起きた共同住宅の火災について言及していたこともよかったと思う。高齢化の加速、所得環境や家族環境等の変化を考えると、こうした事態がさらに深刻化するのは明らかだ。番組では、孤立死を防ぐ取り組みを事例として紹介しながら、住宅政策、福祉政策、そして社会保障を一体として考えていく必要性を訴えていたが、むしろ社会保障の中に

住居問題を位置づけるべきだと強く感じた。今後も取材を続けて、課題をより深く掘り下げてほしい。

○　２月３日(土)のＥＴＶ特集「長すぎた入院」を見た。福島の原発事故で、転院を余儀なくされたことで明らかになった、精神科病院の長期入院患者の内実が伝えられ、大きな衝撃を受けた。父親に「帰ってきたら迷惑だ」と言われた患者本人の悲しい顔や、統合失調症で長期入院していた人が「外の生活は自由でいい」としみじみと言う様子など、社会的入院の現実をしっかり映像で捉えており、問題の深刻さがよく伝わってきた。社会問題をきちんと記録した、未来に残すべき番組だと思った。

○　２月１１日(日)のバリバラ「バリバラ×セサミストリート」では、クラスで孤立していた自閉症の小学生の女の子が、セサミストリートのキャラクターの仲立ちによって、他の子どもたちと距離を縮めることができた様子が放送された。前もって仕組んでできることではないので、貴重な場面がよく撮れていたと思う。「バリバラ」の中でも、ホームラン級の回だった。

○　２月１５日(木)のハートネットＴＶ　認知症にやさしいまち（３）「若年性認知症の人が働く子ども食堂」を見た。介護施設が子ども食堂を運営し、そこで若年性認知症の方に働いてもらう取り組みを紹介していた。子どもたちとのふれあいがとても温かく描かれていただけでなく、生きがいを見つけることで、脳も体も活性化することが説明され、多くの若年性認知症の患者とその家族に希望を与える内容だったと思う。他の地域の取り組みの参考になるので、この子ども食堂の運営方法、資金面の課題、展望についてもう少し説明があればなおよかった。

（ＮＨＫ側）

若年性認知症は身体機能に問題がないため、介護サービス自体が不足している状況にある。本来であれば介護サービスを“受ける”はずの彼らが、福祉の現場でサービスを“提供する”側に回ることは、全国初の試みだった。資金や人材など運営面ではいろいろな課題があり、難しいと聞いている。引き続き取材を続け、番組でも取り上げていきたい。

○　野球はあまり詳しくないのだが、「球辞苑～プロ野球が１００倍楽しくなるキーワードたち～」を見て、プロ野球はこんなにもおもしろいのかと思った。野球に関するキーワードについて、いろいろな人がデータとともに分かりやすく説明し、

「だからこの選手は強い」などと結論づけており、今までになかった番組だと思った。プロ野球のオフシーズンだけの番組なので、次回のオフシーズンも楽しみにしている。

○　「大河ファンタジー　精霊の守り人」は、新しい映像技術でファンタジーの世界をあそこまで表現していたことに感心し、もっとファンタジーの番組をみたいと思った。この番組では、ポスターなどを制作して、若年層を狙いたいという話があったと思うが、実際に効果があったのか、そういった検証も報告して審議会の場で議論することで、ＰＤＣＡサイクルが回るかと思う。

（ＮＨＫ側）

ポスターをはじめとした、広告媒体でどのぐらい番組の視聴につながるのか検証するのは難しい部分もあるが、今後、方法も含めて検討したい。

○　ピョンチャンオリンピックは、放送だけでなく、ホームページも含めていろいろな形で楽しんでいる。オリンピック特設サイトは、放送とは違いコンパクトに動画がまとめられており、電車の中などで見るのにも便利だ。また、スーパーハイビジョン試験放送も映像が鮮明でよいし、フィギュアスケートでジャンプの軌跡をたどり、他の選手と比較する見せ方も新しい試みで興味深い。東京オリンピック・パラリンピックに向けて、最先端の映像技術でも盛り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

前回、審議会で大河ドラマ「西郷どん」で西郷さんの家のセットの前にクスノキが生えているが、切って持ってきたのではないかという意見を頂いたが、クスノキはすでに切ることが決まっていたものを持ってきた。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年１月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２２日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、「ＮＨＫ経営計画 2018-2020 年度」の概要について説明および、１２月の審議会に諮問し、可とする答申のあった「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画」が、１月１６日の経営委員会で議決されたことの報告を行った。続いて、最近の番組について報告があり議事に入った。

議事はまず、「事件の涙　Human Crossroads　死刑囚の母　息子の選択 ～和歌山・毒物カレー事件～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出 席 委 員）

委 員 長　　大日向雅美(恵泉女学園大学学長)

委　　員　　今井　　忠(ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長)

大島　まり(東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授)

佐野真理子(主婦連合会参与)

立野　純二(朝日新聞社論説主幹代理)

出口　治明(ライフネット生命保険(株)創業者／立命館アジア太平洋大学学長)

西原浩一郎(金属労協顧問)

比嘉　政浩(全国農業協同組合中央会専務理事)

藤村　厚夫(スマートニュース(株)執行役員メディア事業開発担当)

(主な発言)

＜事件の涙　Human Crossroads　死刑囚の母　息子の選択
～和歌山・毒物カレー事件～（総合　１２月２６日（火）放送）について＞

○　大変感銘を受けた。制作者が死刑囚の息子と強い信頼関係を築けなければ、このような番組は作れないのだろうと思うので、取材プロセスについても興味を持った。本人のプライバシーの配慮は大丈夫なのか少し気になった。

○　加害者家族を取材した番組はあまり記憶にない。母親の罪の重みを背負い、施設で壮絶ないじめに遭うなど過酷な人生を余儀なくされ、苦悩と葛藤の日々を送ってきた息子の人生を鮮明に伝えていて、最後まで目が離せなかった。再審請求棄却後の取材者の「母親を信じるか」という問いかけは、取材を通し息子と強い信頼関係を築いた者でなければ発せられない大変重いことばであったと思う。その質問に対して「母を信じる」という息子の返事には、覚悟がにじみ出ており、強く胸に迫るものがあった。難しい取材だったと思うが、この事件を取り扱うことについての公正な取材姿勢は守られていたと思う。ただ、被害者遺族が番組を見てどのような感情を抱くのかは気になった。事件に関わるさまざまな立場の関係者への配慮が必要な難しい番組かと思う。また、極めて強く視聴者の感情に訴えかけるものがある番組なので、“涙”を強調しすぎないほうがよいと思った。事件の関係者がその後どのような思いを抱え生きてきたのか、生きていこうとしているのか、人を見つめるドキュメンタリーシリーズとして、題材の発掘も取材も難しいと思うが、ぜひ今後も続けていただきたい。

○　よくここまで取材ができたと思う。事件の真相の解明や視聴者の同情を買うような話に持っていかなかったことがよかったと思う。親を選べない子どもが、消すことのできない現実を背負い、生きている姿をありのままに映すことに徹したのがよかった。息子の人生だけでなく、改めて自分の人生も何だったのかと見つめ直す材料を提供してくれる番組だった。

（ＮＨＫ側）

事件の加害者家族を取り上げることについては議論した。被害者の連絡会には事前に思いなどを取材し、表現には細心の注意を払った。放送後に番組に否定的な意見は寄せられていない。周囲に知れてしまうかもしれないというリスクについては息子とかなりじっくり話をした上で、リスクにならないように注意しながら慎重に進めた。番組を見た後に施設でいじめていた人からこの息子におわびがあったとのことで、感謝された。

○　とても心に残る番組だった。死刑囚の母を持つ子どもとして、その後の自分に起きた出来事すべてを受け入れ、生きていく姿勢にいろいろなことを考えさせられた。母親の死刑判決と周囲の自分への反応をどんな思いで受け止めたのか、人生が大きく変わったことを息子自身のことばで説明していたことで強く訴えかける番組

だった。婚約解消や子ども時代の施設のいじめなど、この息子が過酷な状況で懸命に生きてきたことはよく分かったが、全体的にきれいにまとまりすぎていたと思う。居酒屋の友人のように、つらい境遇の中でも支えてくれた人もいたはずだ。そのあたりももう少し知りたかった。また、これだけ密着した映像が流されることで、本人の素性が周りに知られてしまうのでないかという点も気になった。首から上は映さず音声も変えるなど、個人を特定できないような配慮があってもよかったのではないか。放送後に何も悪い反応がなかったということで安心した。こういう重い題材を扱う番組は、取材するのも大変だと思うが今後も続けてもらいたい。

○　子どもの頃に過酷な境遇に置かれたのに、人と誠実に向き合おうとする大人になっているので、きっとこの息子を支えた人がいたと思う。その人についても描いてほしいと思っていたところで、居酒屋の友人のシーンが出てきたのでとてもうれしかった。これを見て彼を支える側に回ろうと思う人も中にはいるかもしれない。もう少し長い時間見せてもよいと思った。「炎上社会」と言われている世の中だが、子どもに罪はないということは、改めて自分自身の行動も含めて肝に銘じなければいけないと思わされた。

（ＮＨＫ側）

友人、職場の方など彼を支えている人はいる。今回は番組時間も限られていたので、あのような形にした。

○　被害者のコメントが全くなかったが、そのことがかえってこの息子の生きてきた過酷な人生を浮き彫りにしていたと思う。彼を支えた人もいると思うが、番組時間も限られているので、登場人物を絞ったことや感情的にならず淡々と描いたことでかえって番組の訴える力が強くなったと思う。事件後に周囲の視線が厳しいのは仕方がないが、ここまで過酷で大変な人生を送らなくてはいけないのだろうか。あくまでも親と子は別の人格なのだということを番組の中でうまく伝えられなかったのかと思った。

○　事件の被害者、加害者がいる中で、加害者の家族、しかも罪のない子どもに焦点を当てたことで、タイトルの“Ｃｒｏｓｓｒｏａｄｓ”の意図がよく表れていた。婚約を解消されたときの話のなかで、「彼女を守ろうとすると母親を見殺しにするようだ」と言っていたが、それがこの息子が置かれている立場を表しているのでないかと思った。自分の家族を撮るために買ったカメラで、昔母親と何度も訪れた神社の写真を撮っているシーンは、彼が置かれたつらい立場が表れていて、見ているだけでつらくなった。家族とは何なのかと考えさせられた。これから先、いろいろ

な不安もあると思うが、番組が社会に対して将来をきちんと見据えた一つのメッセージを伝えていたようにも感じられ、息子に焦点を当てて伝えたことはよかったと思う。

○　これだけの重いテーマを２５分で描くことができること示した大変優れた番組だと思った。作り手としては児童相談所の当時の状況や周りの人たちに話を広げたい気持ちがあったと思うが、それをすべて切り捨てて息子の証言に徹したことが番組の訴える力を強めたのでないかと思った。個人の好みだと思うが、最後の歌はいらないと思った。重い事実を取り上げているなかで、歌が最後にあるといかにも泣かせようと演出している感じがして、安っぽく見えてしまう。ＮＨＫには正面からこの問題を取り上げる番組も制作してほしい。加害者、被害者だけでなく、犯罪は周りの人間の人生を壊してしまう。今の日本の社会を眺めると厳罰化の風潮がより強まっているように見えるが、世界の先進国の中でいまだに死刑制度を廃止していない国として、どう考えたらよいのかという重いテーマについてもぜひ取り上げてもらいたい。

○　胸を打たれる番組だった。施設で壮絶ないじめにあってもなぜ誰も守ってくれなかったのか、放火されても、なぜ犯人は大した罪に問われることもなく見過ごされてしまったのか、番組を見ている私たちの姿勢や生き方が強く問われていると思った。息子のことばそのものは終始淡々として一度も激高することもなく、静かに語ってくれているだけに、彼が生きてきた人生の壮絶さとそれを乗り越える人間の強さを改めて感じ、感動した。当時施設でいじめていた本人からおわびの連絡があったことは何よりも救いだと思った。番組を見た人たちにそういう思いを持たせられたということは、それだけすばらしい番組だったということだ。ＮＨＫでなければこの息子とあそこまで信頼関係を結べなかったのだろうと改めて思った。

（ＮＨＫ側）

　被害者のことばを入れるべきか、もう少し情報を打ち込むべきかなど、いろいろと悩んだが、本人に会って話を聞いたときに「この人だけに収れんした番組にしよう」と決めた。意図が伝わったようなのでよかった。歌についてはいろいろな意見があるので、今後検討したい。

○　とてつもなく優しい心を持った一人の男性の人生ドキュメントとしてこの番組を見た。親を思う子の愛はどこまでも純真であることに胸がいっぱいになった。誰もがたくさん親に守られるはずの子ども時代に自分で自分をしっかり守るしかな

かった彼が「守るものができるってこんなに悩みが増えるのか」と、自分の結婚と母親の人生とを語っていた時に、本当に人生のやりきれなさを知った思いがした。「母親が凶悪犯だったとしても一緒に許しを請う」という彼のことばは、現在希薄になっている家族愛そのものなのではないか。彼が新しい夢を撮ろうとしていたカメラで、母親との思い出の神社の撮影をしているシーンで音楽が流れたのはよかった。彼の人生はとてもすばらしく、崇高なものだと、音楽が救ってくれた気がした。この番組を通して、彼の人生が多くの視聴者に届けばいいと思った。取材は大変だったかと思うが、深く心に響く番組を制作していただいたことに感謝したい。

＜放送番組一般について＞

○　１月１１日(木)のクローズアップ現代＋「認知症でしばられる！？～急増・病院での身体拘束～」を見た。番組を見るまで認知症の患者が身体拘束されることはもはやなくなっていると思っていたが、逆に増えているという実態に驚かされたとともに理由についても考えさせられた。具体的な事例を交えて、医療制度や地域の活動のあり方についてよくまとまっており、今後は高齢者や認知症患者が増える中で、身体拘束が社会問題になるように感じた。治療や入院、地域医療などについて行政側の見解も取材してほしい。また、認知症患者を支えるために、住民向けの講座を開設している自治体などの取り組みも紹介したらよいのではないか。今後も継続的に番組を続けてほしい。

○　認知症患者の身体拘束については、これから団塊世代の高齢化が進み、ますます増えていく問題だと思う。日本では１０年で倍増しているとのことだが、世界的には身体拘束をやっている国はとても少ないという話も聞く。問題を考える上で、ほかの高齢化諸国ではなぜ身体拘束をしなくてもすんでいるのかという視点の取材もあればより内容が深まると思う。

○　１月１日(月)のＮＨＫスペシャル「平成タイムトラベラー～あなたと私の３０年～」を見た。来年幕を閉じる平成という時代について、さまざまなテーマを設定しながら振り返る内容で興味深く見た。「ＮＨＫスペシャル」がこれまで蓄積してきた映像を使い、関係者や有識者のコメントも盛り込みながら端的に振り返る工夫が凝らされていただけでなく、次の時代を見据え、考えるべき課題や視点がいくつか提示されていてよかった。年明けに家族で見られる番組だった。ただ、テーマが盛りだくさんすぎたため、表面的な伝え方にならざるを得ない部分や出演者の人数や人選に疑問を感じた部分もあった。今後、テーマや分野ごとに、きちんと掘り下げ

て平成を振り返る番組を放送してもらいたい。平成は激動の時代だった。その中で日本人が何を感じ、今日に至っているのか。次の時代に何を考えなければならないのか。そうしたことを発信する番組をＮＨＫには期待したい。

○　１月１７日(水)のＮＨＫスペシャル「遺児たちのいま　阪神・淡路大震災２３年」を見た。遺児たちを継続的に取材し、思いを率直に語ってもらう番組を制作したことを高く評価したい。全く異なる人生を歩んできた３人の遺児たちが、人生にしっかりと向き合い懸命に生きている姿に感動した。彼らは成人して家庭を持っている人もいる。その子どもたちにも生きることの大切さが伝わっている様子や、同じような境遇にある東日本大震災の遺児たちとの交流も描かれ、強く胸を打たれた。遺児たちの姿は、生きることの大切さ、命の尊厳、社会的な課題について、さまざまなことを私たちに伝えてくれると思った。阪神・淡路大震災だけでなく、東日本大震災でも取材をしていることと思う。ぜひ継続的な取り組みとして番組を作り、大切なことを伝え続けてもらいたい。

○　１月２１日(日)のニュースで、阪神高速道路を運営する会社が阪神・淡路大震災を教訓に今も人命を守ることのできる高速道路のあり方を研究しているというニュースが報じられた。震災を風化させずにそこから学び、プロとして挑戦している姿勢に感銘を受けた。われわれはプロとして社会で役割を分担して生きている。それぞれがプロとして何かあったときに備える、前の震災から学び、前進する姿勢を見習わなければならないと思わされた。非常によいニュースだった。ＮＨＫはこうしたニュースを伝えることで、阪神・淡路大震災を風化させない取り組みをきちんと行っていると思う。

（ＮＨＫ側）

私たちは命と暮らしを守る報道を公共放送の根幹に位置づけている。阪神・淡路大震災についても、東日本大震災についてもそうだが、これからも粘り強く取材をし、放送を続けていきたい。

○　１２月３１日(日)の第６８回ＮＨＫ紅白歌合戦「夢を歌おう」を見た。昔は歌手は１人がほとんどだったが、最近はほとんどグループで、時代の変化を感じた。採点方法については、見ている人全員が参加できるようにする気持ちも分かるが、魅力的なゲスト審査員を選んでいるのであれば、以前のように彼らだけが採点するほうがおもしろいのではないかと思った。年齢の問題もあるのかもしれないが、放送時間はもう少し短いほうが集中して見られるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

「紅白歌合戦」の審査方法については毎年試行錯誤している。前回は視聴者と会場のお客様の得票数は白組が圧倒的に高かったにもかかわらず、ゲスト審査員とふるさと審査員の投票に加重配分していたので最終的に大逆転する結果になり、いろいろな批判をいただいた。今回は、すべての審査員の得点を同じにした。ゲスト審査員だけの採点でもよいのではないかというのはご意見として承りたい。一方、データ放送などで楽しんで投票してくださる全国の視聴者がたくさんいることも事実で、そこはご理解いただきたい。放送時間については長いという声もあれば、もっとたっぷり聴かせてほしいといった声や、この歌手を出してほしいという声もあるので、さまざま寄せられる声を勘案してよりよい番組の形を検討したいと思う。

○　「紅白歌合戦」を見ていて、ビルの屋上でのあるアーティストのパフォーマンスの際に、渋谷の街にライトを合成した映像が出たが、それが合成映像で生ではなかったと報じられている。今は高度な映像合成の技術があるので、実際の映像なのか合成されたものかの見分けがつかない。技術はここまで来たのかと思ったが、視聴者がだまされてしまうこともあるかもしれないと不安も覚えた。

○　大河ドラマ「西郷どん」は始まったばかりだが、非常におもしろい。１月３日(水)の「もうすぐ！西郷どん」(総合　後　0:15～0:44)で、セットの紹介があり、大きいよい形のクスノキを山梨から持ってきたという説明があった。こだわりを持って、苦労してよいセットを作っているという見方もあるが、あれだけ立派な木をセットのために切ってもよいのだろうかとやや疑問に思った。

○　大河ドラマ「西郷どん」は本当におもしろい。特に子役がすばらしかった。初回世帯視聴率があまりよくなかったという報道を目にして、不思議に思っていたが、ＢＳや録画での視聴率をあわせるとよく見られていると報じられており納得した。総合テレビの放送時の視聴率だけでつまらない番組と思われてしまうのはもったいない。外部への発表の仕方も工夫したほうがよいと思う。今後にも期待している。また、「大河ドラマ」と「紅白歌合戦」どちらにも言えることだが、予告や番組本編以外の企画番組などがたくさんありすぎるのではないかと思う。番組宣伝かもしれないが、純粋に番組本編を見たいと思ったときに、ほかの番組であまりに露出し

てしまっていると新鮮味がなくなってしまい、もったいなく感じている。もう少し関連番組は抑え、「紅白歌合戦」は「紅白歌合戦」として番組本編を楽しませてもらいたい。

○　１月６日(土)に再放送したいじめをノックアウト！「“空気よめ”と言われても…」を見た。６人の中学生のＳＮＳでのやりとりで、一人が会話のスピードについていけなくなって責められる様子が放送され、すごい現実の中で生徒たちは生きているのだと思った。司会の高橋みなみさんも考えるいい材料を与えてくれていた。大人たちは今の子どもたちがどういう環境で過ごしているのか知らないといけないが、それがよく捉えられていた。番組ホームページで内容が見られるようになっている点もよいと思った。

○　１月２０日(土)のＥＴＶ特集「カキと森と長靴と」を見た。映像も音楽もすばらしく、映画のような芸術性の高い作りが印象深い番組だった。

○　１２月２９日(金)の「母たちの祈り～フクシマとチェルノブイリ～」(ＢＳ１　後9:00～9:49)を見た。放射能という見えない恐怖に直面し、さまざまな選択をした３組の母親と子どもが、チェルノブイリの原発事故で大きな被害を受けたベラルーシを訪ねる内容だった。自分たちの選択が正しかったのか、子どもにどういう影響があるのか、といった福島の母親たちが抱えている迷いや不安は同じ母親として共感できるものだった。一方で、事故を経験したベラルーシの人々の姿は勇気を与えてくれるもので、とても感銘を受ける内容だった。災害は時間が経つと取り上げられなくなっていくが、放射能の問題は長期的なものなので、今後も問題を風化させないように継続して取り上げてもらいたい。

○　１月２１日(日)のＢＳ１スペシャル「７３１部隊　人体実験はこうして拡大した／隊員たちの素顔」を見た。昨年、８月１３日(日)のＮＨＫスペシャル「７３１部隊の真実～エリート医学者と人体実験～」の再放送かと思って見ていたが違った。前編と後編に分かれて、内容が以前より深掘りされており、新たな取材内容も取り上げていた。ＮＨＫスペシャルより、さらに一層見応えのある番組になっていてよかった。

○　１月８日(月)に再放送された安室奈美恵「告白」(総合　前0:10～1:09)を見た。デビューして２５年の安室さんの軌跡を丹念に振り返る中で、結婚、出産、休養、復帰などキャリアの上で、さまざまな決断を迫られ、苦悩していたことが語られていて感銘を受けた。「紅白歌合戦」での安室さんの歌った場面はとてもきれいで印象

深いものだった。それだけに、「紅白歌合戦」での安室さんの写真が当日のものではなく、リハーサルのものであるにも関わらず、当日のものとして配布されたという問題が起きたのは残念だ。これから９月の引退に向けて、ＮＨＫでも安室さんを取り上げると思うが、正確な報道や対応をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

安室さんの写真を事実と違う説明で報道各社に提供したことは誠に申し訳なく思っている。再発防止に努めたい。

○　「紅白歌合戦」で安室さんについて、なぜ１つの有料動画配信サービスだけが舞台裏まで取材することができたのか、説明をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

「紅白歌合戦」の舞台裏の映像については、ＮＨＫは毎回、ＮＨＫの関連会社に委託して撮影しており、中にはさらに関連会社から外部の制作会社に発注することもある。今回の安室さんの舞台裏の撮影についても密着ドキュメントを制作している会社があったため、安室さんとの信頼関係を考慮して、この外部の制作会社に撮影を委託したものである。この制作会社はＮＨＫのほかの番組の制作実績もある会社で、今回話題になっている有料動画配信サービス会社の撮影クルーということではない。ＮＨＫは、放送法に基づいて放送事業の成果を社会に還元するために、放送番組やその素材などを外部の放送・通信事業者などへ提供しており、今回も諸規定に則った通常の手続きのもと、提供したものである。

○　正規の手続きに則っているから適正だとのことだが特定の営利企業が独占的に密着ドキュメントを配信していると宣伝し集客している実態は、ＮＨＫが特定企業に便宜を図っていると受け止められても仕方がないのではないか。

○　放送だけでなく、インターネットサービスも意識して見るようにしている。最近はＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢの「特集」に注目している。１月１８日(木)のＷＥＢ特集「泣きたい男　泣けない女」は興味深く見た。放送で紹介したものを「ＷＥＢ特集」として公開したものだが、インターネットならではのさまざまな視点が盛り込まれて立体的に伝えており、よいコンテンツに仕上がっていた。2020 年に向けて最高水準のサービスを実現する中で、インターネットサービスの充実もＮＨＫの

重要な使命だと思っている。今回の特集のようなコンテンツの充実と、より多くの人に届く仕組みが実現できるとよいと思う。今後、さらに充実したサービスに発展させてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

インターネットサービスの充実は意識している。さまざまな制約があるものの、ニュースのほか「ＮＨＫ健康ｃｈ」などのポータルサイトなど、できるだけ見やすく、日常生活で使っていただけるようなサービスを常に考えており、今後も可能な限り充実させていきたい。

○　周囲の中高年の方から「最近自分たちの世代が見られる番組がなくなった」という話をたびたび聞く。もしかすると、視聴率が高くても絶対的な視聴者数は減ってきているのかもしれない。例えば、2020 年に向けてスポーツ関連番組があまりにも多すぎるので、あまりスポーツが好きではない人にとっては選択肢が少なくなっているのかもしれない。また、報道番組は通りいっぺんの説明で、視聴者にとって役に立つという意味での切り込みが足りないと感じることもある。以前、ニュース番組で、公的年金の受給開始年齢を遅らせるという政府案を取り上げていたが、遅らせると毎月の受給額がこれだけ増えるという紹介だけで終わってしまい、これでは政府案の単なる説明でしかない。視聴者側から見た視点が薄れているということもテレビ離れにつながっているのではないかと危惧している。

○　１月８日(月)に再放送された安室奈美恵「告白」(総合　前 0:10～1:09)を見た。普段あまり自分のことを話さない安室さんがこの番組では話そうとしている気持ちが伝わってきた。第一線で活躍してきた彼女も、同世代の働く女性と同じような不安を語っており、母親としての姿もしっかり見ることができたのはＮＨＫだからこそだと思った。最後は、今までありがとう、という感謝の思いがあふれてきて、とてもいい内容だったと思う。今回の番組と、今までＮＨＫが撮った安室さんの映像が全部含まれたＤＶＤが欲しくなった。

○　大河ドラマ「西郷どん」を見た。魅了される第一話と二話だった。鈴木亮平さんの体当たりの演技と体まで西郷どんになっている姿に期待が膨らんだ。町なかでポスターを見かけたが、とても目立っていて印象に残るデザインでよかった。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年１２月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１２月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１８日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、ぼくらはマンガで強くなった「復活」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　大日向雅美（恵泉女学園大学学長）
副委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　　員　有森　裕子（元マラソンランナー）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)代表取締役専務執行役員）
鎌田　　實（諏訪中央病院名誉院長）
佐野真理子（主婦連合会参与）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社執行役員論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
仲道　郁代（ピアニスト）
西原浩一郎（金属労協顧問）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)執行役員メディア事業開発担当）

（主な発言）

＜平成３０年度国内放送番組編集の基本計画(案)について　～諮問～＞

○　「これまでの質的、量的評価の手法に加えて、個々の放送・サービスの『役割』や『到達度』などの視点を取り入れ、適切な評価・管理体制を構築していきます。」とあるが、具体的な評価イメージはあるのか。

（ＮＨＫ側）

これまでの質的指標、量的指標以外に、それぞれの放送が持つ「視聴率にとらわれない役割」やどれだけ知られているかという「到達度」といった要素を盛り込み、評価指標を自分たちで作りたいと考えている。非常に難しい課題だが、既に検討を始めており、どのような指標が適しているか、番組をいくつかピックアップして開発していく予定だ。

○　「放送の自主自律、不偏不党を貫き」とあるが、外部からの干渉を受けないのは当然の話だ。重要なのは編集権がどこにあるかであり、責任を持てるところが持つべきだと考える。責任を持つ人間がＮＨＫの中立性を堅持できるようお願いしたい。

○　各委員の意見を反映し、今回の原案はできている。原案に沿って番組編成が行われるという前提で今回の原案を可とし、答申したいと思う。異議はないか。

○　異議なし。

○　原案を可とし、答申することにする。

（ＮＨＫ側）

答申いただきありがたく思う。中央放送番組審議会の答申をいただいたので、１月の経営委員会に「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画(案)」を提出し、議決を得たい。来年度の具体的な番組編成を記した「編成計画」については、２月に予定している審議会で報告させていただく。

＜ぼくらはマンガで強くなった「復活」(ＢＳ１　１１月１０日(金)放送)について＞

○　ナビゲーターの髙橋大輔さんが初回でいきなり自身のエピソードを紹介したことに違和感があった。全６回の放送を予定しているのであれば、このエピソードは最初ではなく最後に放送した方がよかったのではないか。「復活」というテーマに当てはまる選手は他にも多くいる。最初は他のアスリートについて客観的に伝える立場に徹した方がよかったと思う。今はスポーツマンガが数多くあり、影響を受け

た部分が技術的なものであったり精神的なものであったり、人によってさまざまであることがよくわかり番組自体はおもしろかった。だが、だからこそもっとマンガのストーリーについて時間を割いてしっかりと伝えた方がよかったと思う。アスリートがマンガのどの部分をどのように感じたのかをもっと知りたいと思った。

（ＮＨＫ側）

ナビゲーターについては、まず先に髙橋さんのエピソードを取材しており、その際にご本人が関心を持っていることがわかったため、打診してみたところ実現した。髙橋さんが出演することで、より広い視聴者層に関心を持ってもらえるという期待もあった。マンガの紹介かアスリートの話かということについては、以前特集番組として放送した際に、作品の紹介に重点を置いたこともあった。今回はアスリート寄りに紹介してみたのだが、マンガの説明がやや足りない部分もあったかと思う。各回の制作の中でよりよい伝え方を検討していきたい。

○　マンガが文学や音楽などの芸術と同じように、一人の人間に大きな影響を与えることが改めて実感できた。スポーツをテーマに伝えていることが新鮮で、マンガとアスリートの関係を相互の観点から紹介していたことが非常によかったと思う。元車いすバスケットボール選手の京谷和幸さんのエピソードは、まさに番組タイトルどおりの内容で、「スラムダンク」という作品に本当に大きな影響を受けていることが伝わってきて感動した。一方で髙橋さんのエピソードは、彼がマンガで強くなったのではなく、むしろ漫画家の槇村さとるさんがアスリートに刺激を受けたような内容で、この番組の中で紹介されることにやや違和感があった。髙橋選手復活の部分はよくできていたので、別の番組として伝えた方がよかったのではないか。槇村さんの作品「モーメント　永遠の一瞬」は女子フィギュアスケートのマンガなので、女子選手のエピソードがあればその話を伝え、髙橋さんがナビゲートする、という形が番組として適していたと思う。番組の趣旨と内容のズレはやや残念だったが、内容はおもしろかった。

○　髙橋さんのエピソードは、番組タイトルや趣旨に合っていなかったと思う。そのエピソードがレギュラー放送の第１回に放送されるのは、彼がテレビで初司会をするという話題性が影響しているという印象を強く受けた。その気持ちはわからなくはないが、初回には京谷さんのエピソードのように、マンガとアスリートが深くかかわりあった話を持ってきてほしかった。日本のマンガは海外では非常に高く評価

されているが、国内ではいまだに文化的に低いものとして扱われていると思う。その中で、マンガが人生にどのような影響を与えているかを取り上げ、マンガの価値を改めて見つめ直すという番組の着眼点はよいと思う。スポーツと密接に関わっている漫画家は数多くいると思うので、今後にとても期待している。

○　個人的にはマンガにもスポーツにも関心は高くないのだが、とても楽しめる番組だった。「スラムダンク」は私たちの世代では男女問わず多くの人が読んでいて自分も知っていただけに、京谷さんのことばの一つ一つがよく理解できた。スポーツをしない人間にとってアスリートは超人のように見えてしまうものだが、番組では試合の映像だけではなく、車を自分で運転し自分で乗降するなど日常の姿を見せていたことも印象的だった。車いすバスケットボールのマンガ「リアル」が京谷さんをモチーフに描かれていることも含めて、多くの人に夢を与える内容でよかった。マンガのセリフに大きな影響を受けた経験がある人は多いと思う。そのようなセリフを紹介する短い番組が深夜にあってもよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

マンガのセリフに影響を受けている人は非常に多く、そうした本も出版されている。スポーツ選手以外でもマンガに影響されて社会で活躍している人は大勢いる。検討したい。

○　京谷さんのエピソードは心に迫るものがあり、マンガのストーリーやセリフの影響力を実感させられた。トップアスリートの想像を絶する困難、競技を超えた人生そのものの軌跡がマンガのストーリーと交差して、魅力的な番組に仕上がっていた。アスリート自身の魅力だけではなく、競技の奥深さ、マンガの力と作者の思いなど、スポーツとマンガそれぞれについてさまざまな要素を盛り込み、印象的に伝えていて幅広い世代に受け入れられる番組だと思った。ただ、京谷さんのエピソードでは、マンガ「リアル」執筆に至る漫画家の思いなど、マンガの側面から伝えるものがもっとあればよりよかったのではないか。また髙橋さんのエピソードは、この回に盛り込むのではなく、別の番組で膨らませて伝えたほうがより魅力的になったと思う。日本のマンガ文化は海外で高く評価されている。東京オリンピック・パラリンピックを控える中、マンガとスポーツとが交差するエピソードを発信できれば、世界に日本がより魅力的に伝わるのではないか。国内放送だけではもったいない。海外でも十分受け入れられる番組だと思うので、そうした展開にも期待したい。

○　髙橋さんと槇村さんの話は、髙橋さんとマンガとの関係が深すぎないからこそ、槇村さんの作家としてのエピソードから作品の魅力がよく伝わってくるものに

なっていてよかった。マンガという静止画でありながらダイナミックな描写での見せ方も非常にうまいと思う。充実した作品論になっていた。

○　スポーツとマンガというのは、非常にぜいたくでおもしろい切り口だと思った。それだけに、アスリートとマンガを結び付けたさまざまなことを見せられただけのような印象があり、それぞれのエピソードの着地点がややわかりにくかったと思う。個々のエピソードはさまざまな掘り下げ方ができると思うが、最終的には彼らの心が動いた何かがあるとより味わい深い番組になったのではないか。また、アスリートではない人がマンガにどう影響を受けたか、あるいは、アスリートがマンガではなく絵画などの芸術にどう影響を受けたか、といった番組があってもよいと思う。そうした広がりに期待を感じた。

○　とてもよい番組だった。京谷さんのエピソードは番組タイトルにぴったりで、二本立てにせず、このエピソードだけでも十分見応えのある番組になったのではないか。京谷さんが涙を流したシーンは印象的だった。車いすバスケットボールを始めてすぐに強くなったわけではなく、リハビリや練習をものすごく重ねたと思う。そうした部分も盛り込んでこのエピソードだけに絞って伝えれば、より印象深い番組になったように思えて少し残念だった。こうした番組はよいと思うのだが、その一方で、マンガや本、コーチなどとの出会いやきっかけがないとうまくいかないのではないかと思ってしまう人もいると思う。若い人と話していると、そうした出会いやきっかけに関心が高いと感じることも多い。しかし、人は地道に頑張っていればさまざまな展望が開けてくる。劇的な出会いやきっかけがなくても大丈夫、というメッセージも必要かと思った。

○　人物の描き方が非常によかった。数多くある過去の映像の中からエピソードに合ったものを盛り込んでいたことも功を奏していたと思う。非常によい番組だったが、一方で世の中には挫折を引きずっている人もいる。そういう人がこの番組を見てどう思うか、そのことも常に気に留めておく必要はあると思った。

○　京谷さんのエピソードは番組のテーマに合致していてとてもわかりやすかったのだが、髙橋さんのエピソードは少しずれがあったように思う。髙橋さんと槇村さんの会話で一致していたのは、極限まで集中力が高まった状態「ゾーン」についてだった。演技の最中に「ゾーン」に入って、肉体を極限まで酷使しているにもかかわらず、それを全く感じずに演技が驚くほどうまくいく状態を経験したのだという。この「ゾーン」の話は個人的には非常に興味深いものだったが、「復活」というテーマとは異なる話で違和感があった。違うテーマで取り上げたほうがよかった

と思う。

○　マンガは誰もが親しめる身近なものでありながら、人生をも変えうる力があると改めて感じ、日本が世界に誇るすばらしい文化だと思った。そのことが京谷さんのことばからも実感できた。京谷さんのエピソードは、マンガに影響を受け、どんな思いで人生を切り開いていったかという内容が非常によく伝わってきたが、後半の髙橋さんと槇村さんのエピソードは消化不良な印象を受けた。漫画家が作品を描く思いに迫ることで、日本のマンガ文化のレベルの高さを感じさせるような内容になっていれば、番組の趣旨に合ったものになっていたと思う。

○　マンガとスポーツの組み合わせは挑戦的な取り組みだと思った。ただ、アスリートのようなドラマチックな人生を送る人はそうはいない。個人的には、むしろ漫画家がなぜあれほどまでに長い間創作活動を続けられるのか、挫折しない心に興味をひかれた。そうしたことに焦点を当てた番組があっても面白いと思った。

（ＮＨＫ側）

ふだんＢＳ１を見ない人に見てもらうことも番組の狙いの一つだ。この回は、普段ＢＳ１を見ない若い層の男女が見てくれたというデータが出ている。皆さんが違和感を指摘した番組後半のほうが見られたというデータも出ており、難しい部分もあるが、厳しい指摘も含めていただいたご意見を参考に、今後も多くの方に見ていただける番組を作っていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２６日(日)のＮＨＫスペシャル「あなたの家電が狙われている～インターネットの新たな脅威～」を見た。ＩｏＴ機器が急速に普及し、暮らしがより便利で快適なものになる一方で、その裏に潜む人の安全やプライバシーにかかわるリスク、企業や国家といった社会システム全体への脅威の実態を、国内外の取材を通して浮き彫りにする衝撃的な内容だった。サイバーテロなどのもたらす脅威とその対策の重要性、緊急性が説得力を持って伝えられており、ＮＨＫの高い取材力が感じられて見応えがあった。番組でも言及していたように、東京オリンピック・パラリンピックに向けて警戒の必要性は高まる思う。継続的な報道をお願いしたい。

○　ＮＨＫスペシャル「あなたの家電が狙われている」は、インターネット社会の新

たな脅威を警告した番組として評価したい。ＩｏＴ機器の普及で生活が便利になる一方で、インターネットは闇の部分も大きい。私たちが日常的に使っているパスワードが、ハッカーたちにいとも簡単に解読されてしまうことには、驚きと危機感を感じた。そうしたリスクの部分が、海外の実態も交えて多角的に取材されて伝えられており、非常にわかりやすかった。ただ、今後ますますＩｏＴ機器が普及していく中で、消費者は一体どうすればよいのか、具体的なアドバイスがあればなおよかった。そうした視点も持ちながら、今後も報道を続けてもらいたい。

○　１１月２８日(火)のＮＨＫスペシャル「スクープ　日米首脳会談の内幕―対北朝鮮戦略―」を見た。首脳会談について表に出ていない内容が伝えられ、スクープという名にふさわしい番組で、ＮＨＫの取材力の高さを感じた。ただ、日本とアメリカの北朝鮮問題への対応は必ずしも方向が定まっているわけではなく、幅がある。トランプ大統領のこれまでの側近の中には「北朝鮮は攻撃すべきではない」という人もおり、そうしたところが取り上げれていなかったことは気になった。番組の流れが一方向に偏ることのないよう、もっと幅広い発言を捉えながら伝えたほうがよかったのではないか。また、事前の番組告知が少なかったように思う。重要なテーマなので、きちんと告知してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

番組では、対話よりも圧力とする現在のアメリカの外交姿勢に批判的な、オバマ前大統領の側近の発言や、有事に至った際のリスクなども具体的に紹介した。視聴者の判断のよりどころとなる情報を多角的に伝えられたと思っているが、指摘は十分参考にし、今後の番組づくりに生かしたい。

○　１２月３日(日)のＮＨＫスペシャル「皇位継承へ　素顔の“新天皇”」は、両陛下のすばらしい人柄を改めて感じられる内容で非常によかった。現在の憲法の中で即位した初めての天皇として、日本の象徴であることを体現されてきた中で、多くのご苦労もあったことと頭が下がる思いがした。再来年の退位の日までさまざまな手続きが進行していくことになると思うが、この期間は日本人が象徴天皇制について考えるのに非常によい機会だと思う。機会を捉えて象徴天皇制を取り上げた番組を期待したい。

○　１２月１０日(日)のＮＨＫスペシャル「追跡　東大研究不正～ゆらぐ科学立国ニッポン～」は、東京大学で研究予算をめぐる競争が激化する中で研究不正が行われた背景が克明に伝えられていて非常によかった。「ネイチャー」など評価の高い

学術雑誌に論文が掲載されることがインパクトファクターとして高い点数が付けられ、研究資金獲得に大きく影響するため、掲載を目的に不正が起きる構造がよくわかった。科学や医療の分野でインパクトファクターを盲信することの危険性を警告する内容で非常によかった。

○　このＮＨＫスペシャルは非常によかった。これまで研究不正についての報道は、個人に責任を負わせることが多かった。しかし、本来は研究者がなぜ研究不正に走るのか、構造的な問題を解き明かすことが重要なのではないかと感じていた。その意味で今回の番組は、研究者の置かれた状況、インパクトファクターの高い学術雑誌に論文掲載しなければならない状況、研究予算獲得の現状などを克明に伝え、構造的な問題を明らかにしていた。ＮＨＫらしい番組で感心した。

（ＮＨＫ側）

研究不正が起きる背景を見極めたいという問題意識で取材した。研究者たちが置かれた困難な状況、日本の科学振興政策の課題など、構造的な問題がある程度浮き彫りに出来たと思う。大きなテーマなので継続して取材を深めていきたい。

○　１２月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「激変する世界ビジネス　“脱炭素革命”の衝撃」は、再生可能エネルギーへの劇的な転換が起きている現状を伝えており、非常によかった。最近は民放を含めて日馬富士の問題ばかりがニュースで取り上げられ、それ以外の報道が少ないことに危機感を覚えていた。この番組は、われわれが気付かないところで起きていることを伝えたことが何よりよかったと思う。

○　１２月５日(火)のクローズアップ現代＋「追い詰められる留学生～ベトナム人犯罪“急増”の裏側で～」を見た。ベトナムから来日する留学生の数が急増する中、ベトナム人による犯罪件数が急増している実態を明らかにする調査報道で見応えがあった。多額の借金を負わせるベトナムの留学あっせん業者、利益を優先する一部の日本語学校、その間で追い詰められていく留学生の姿がまざまざと伝えられていた。関係者の証言を引き出し、問題の深刻さを明らかにする優れた報道だった。１２月９日(土)の「ＮＨＫニュース７」でもこの問題を取り上げていたが、人手不足の中で外国人留学生を活用せざるをえない企業側の実情など新たな視点も加わっていてよかった。外国人留学生の過酷な現実は放置できない状況にある。東京オリンピック・パラリンピックを控え、国際社会からはこうした状況は厳しい非難を受ける可能性が高い。外国人留学生だけでなく、外国人技能実習生も含めた外国人受け入れの現状と課題を、総合的に取り上げる番組を検討してもらいたい。一方

で、この報道により、ベトナム人留学生への社会的な偏見が生じないか心配になった。番組でも一定の配慮は感じられたが、こうした報道では特段の配慮が必要だと思う。継続的な報道と配慮で公共放送としての役割を果たしてもらいたい。

○　「平成３０年度国内放送番組編集の基本計画(案)」でも言及されたように人口減少の問題は非常に大きな問題だが、その大きな波の中で外国人留学生の問題も考えていかなければならないと思う。大きなテーマを長期的に取り上げていくのはＮＨＫの重要な役割だ。学びに来ているにもかかわらず週２８時間も働けてしまう制度の問題や、外国人に対し精神的バリアを持ってしまいがちな国民の傾向など、日本側の課題などにも焦点を当てつつ、構造的な問題として今後も丁寧に追い続けてほしい。

○　１２月１３日(水)のクローズアップ現代＋「夫婦げんかで子どもの脳が危ない！？」は、子どもの脳の発達に夫婦げんかが大きく影響しているという内容で驚かされた。夫婦げんかが子どもに影響することは理解できるのだが、脳が萎縮するのは本当なのか。統計的なデータも示し、暴力を伴うけんかよりもことばによるけんかのほうが萎縮率は６倍も高いと伝えていたが、にわかには信じがたかった。夫婦げんかはしないに越したことはないが、夫婦げんかで子どもの脳が危ないと言い切ってしまってよいものか気になった。もう少し詳しい説明をしたほうがよかったのではないか。脳の萎縮は、本当だとすれば大きな問題だと思う。発達障害などとの違いも含めて、もっとさまざまな角度から伝えてもらいたい。

○　夫婦げんかが子どもの脳の発達に影響するというのは、大きな問題だと思った。子どもの発達と脳科学を関連させる研究は、今さかんに行われる傾向があるが、この研究はデータの妥当性、信頼性はどうだったのか。親に対する影響も非常に大きい内容だっただけに気になった。

（ＮＨＫ側）

最新科学の知見を伝えることには常に難しさがあるのだが、論文が学会である程度支持を得ているものかどうかを確認して放送するように努めている。今回の研究は福井大学とハーバード大学によるものだが、私たちも最初に聞いたときはにわかには信じがたかった。番組で取り上げてよいものかどうか、論文として査読を受けているか、学会の中で支持を受けているかなどを確認したうえで放送した。

○　夫婦げんかで子どもの脳が危ないという話と生まれつきの発達障害とは別の話だが、一般の視聴者は専門家ではないため、その区別がつかずに考えやすい方向で捉えてしまう場合があるから配慮が必要だ。今回のような内容を伝えると「あの母親の子どもだから、父親がああいうことをやっているから、こんな子になった」と安易に結びつけて考えてしまう懸念がある。こうした問題を伝える際は、そのことも十分注意してもらいたい。

○　１１月２２日(水)のハートネットＴＶ「食い物にされる“福祉”～障害者の大量解雇問題を追う～」を見た。今この問題を取り上げたこと、そして一面的な伝え方にならないように多方面への取材を重ねた努力は評価したい。だが、多角的であろうとすることとわかりやすさは両立が難しいとも感じた。番組では、行政からの給付費を目当てに悪質な経営をする福祉事業者の存在だけはなく、使途に制限がある給付費を障害者の賃金にあてざるを得ない事業者や、支給に関する規制を強化した行政の実情なども伝えられた。「食い物にされる」実態だけではなくさまざまな事情や価値観が混在していて、問題は非常に複雑だと思う。そうした中で問題の本質が視聴者にわかりやすく伝わらないと、「障害者の大量解雇はかわいそう」というわかりやすい印象だけが残る情緒的な報道に陥ってしまう危険性があると感じた。多角的な取材を一つのまとまった番組としてどのように伝えるのか。ＮＨＫはこれまでも本質を捉えたよい番組が数多くあった。多角的でありながら本質を外さずに伝えるのは難しいことだと思うが、常に心がけてもらいたい。

○　１２月１０日(日)のバリバラ「ＬＧＢＴ温泉旅」は、レズビアン・ゲイ・トランスジェンダーの方たちが温泉で男湯と女湯のどちらに入るのかというテーマで、刺激的な内容だった。番組では実験的に、温泉の接客係が見た目で男湯と女湯に分ける、戸籍上の性別で分ける、好きな異性の性別が同じ人で分ける、といったさまざまな分け方で入っていたが、その様子を見ながら、今までの常識は現実に対応しきれていないこと、今でも既にあちこちの温泉で起きている問題であろうことに自然と気付かされた。映像が私には衝撃的だったのだが、一緒に番組を見ていた子どもは平然としており、いつの間にかそういう目で見てしまっている自分に気付かされた。そのことへの反省と同時に、多様な人がいることが当たり前の環境で育つことの可能性も感じ、さまざまなことに気付かされる良質な番組だと思った。

○　１１月２６日(日)のＢＳ１スペシャル「原発事故７年目　甲状腺検査はいま」は、福島県の小児甲状腺がんというデリケートな問題を取り上げた、勇気ある内容だったと思う。甲状腺がんやがんの疑いがあると診断された子どもが 194 人もいる深刻な実態の一方で、「過剰診断をしている」「死ぬ危険性もないものをわざわざ見つ

けて不要な手術が行われる恐れがあるのではないか」という声があがっていること、双方をうまくバランスを取りながら伝えていたと思う。ただ、本当に検査をしなくてもよいのか、もう少し明確にできたのではないか。チェルノブイリ原発事故におけるウクライナやベラルーシなどの実態を克明に取材し、国内の事例も積み重ねながら、検査をしなくなった場合に、福島の子どもが甲状腺がんで死ぬことは本当にないのか、というところまで突っ込めば、検査をやめてもよいのかどうか、見えてくると思う。双方の意見を伝えてバランスを取ることはとても大事なことだが、もう一歩踏み込んでもらいたかった。

○　１２月１０日(日)の世界はＴｏｋｙｏをめざす「五輪の厨房(ちゅうぼう)　２０２０おもてなしの舞台裏」を見た。東京大会で選手村の厨房に立つことを夢見る料理人や、選手たちに自慢の食材を食べてほしいと願う農家たちなどが登場し、“おもてなし”の中心となるであろう「食」の舞台裏を追う内容だったが、その中で、食の品質や安全への意識と取り組みについて、調達コードの国際基準や他国の事例を紹介しながら今の日本の水準を伝えていたことがとても興味深かった。登場した農家の方々は、日本にこうした考え方が広まっていない中で意識をそろえていくことの困難さと、2020 年以降もグローバルな問題として継続的に取り組むべき課題であることを訴えていた。その意識を日本全体のものとしていくことが、国際社会の一員として重要なことだと感じた。番組の本筋ではない中でこの課題に触れたことは、認識の入り口としてよかったと思う。今後は報道番組なども含めて、継続的に取り上げてもらいたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年１１月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２０日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（平成２９年度第２四半期・７～９月）について説明があった。続いて、放送番組の種別および種別ごとの放送時間（平成２９年４～９月分）について、平成３０年度国内放送番組編集の基本計画（案）について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　大日向雅美（恵泉女学園大学学長）
副委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　　員　有森　裕子（元マラソンランナー）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)代表取締役専務執行役員）
大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
佐野真理子（主婦連合会参与）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社執行役員論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
仲道　郁代（ピアニスト）
西原浩一郎（金属労協顧問）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（平成２９年度第２四半期・７～９月）について＞

○　量的指標についての説明があったが、ＢＳプレミアム以外のリーチが昨年同時期と比較して低下しており、リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックの影響とのことだが、一昨年と比べた場合、どのような状況になっているのか。

（ＮＨＫ側）

一昨年と比較した場合、総合テレビは、視聴率はほとんど変わらないが、リーチが少し低下した。視聴層が少し狭まったと考えられる。リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック以外の要因もあるかもしれないが、分析中だ。ＢＳ１は一昨年とほとんど変わらず、リオデジャネイロオリンピックの影響だと捉えている。

＜平成３０年度国内放送番組編集の基本計画（案）について　～予備審議～＞

○　方向性が簡潔にまとめられており、基本的にはよいと思う。ただ「安全で安心な暮らしに貢献」「命と暮らしを守る情報を提供」ということが、全体の基本方針や重点事項には書かれているが、各波の編集方針に書かれていないことが気になった。総合テレビの編集方針にもこのことばを取り入れていただきたい。

また、消費者問題について記載してほしいと思った。消費者問題は、国民生活センターへの苦情件数や被害推定額などの規模が大きいだけでなく、特に高齢者と若者が被害に遭っており、深刻化している。ＮＨＫも詐欺被害などについて継続的に取り組んでいるので、例えば総合テレビの「編集のポイント」などに、取り組むべき題材として記載してもよいのではないか。

国内外の課題の一つとして「社会保障費の増大」が記載されているが、少子高齢化の中で社会保障費が増大することは自然なことだ。増大だけでなく適切な配分の在り方が課題なのではないか。

また、Ｅテレの編集方針にある「参加・体験できる番組・サービスを充実」については、どういうサービスなのかがわかりにくい。もう少し詳しい説明が必要だと思う。

○　全体的に十分考えられており、バランスが取れていて大変よいと思う。それを前提に言えば、冒頭に「大切なことをより深く、より身近に」と記載しているが、公共放送の“伝える”という使命を考えると、まず「よりわかりやすく」ということが必要なのではないか。

「社会保障費の増大」については、配分だけではなく負担のあり方も重要な課題であり、負担と配分をセットで考える必要があると思う。

幅広い視聴者に「感動した」「役に立った」「楽しめる」と言ってもらえるＮＨＫを目指すとあるが、「役に立つ」ということばは、ＮＨＫの役割がわい小化して受け止められてしまう可能性があると感じた。メディアの役割は視聴者に気づきを与

え、自分自身で考えるきっかけになる、勉強になることだと思う。多彩なコンテンツでＮＨＫのファンを増やすのであれば、その役割が伝わるような表現にしたほうがよいのではないか。Ｅテレの編集のポイントにも「役に立つ」という表現が使われているが、Ｅテレであればなおさら“気づき”や“勉強になる”という意味合いのことばを入れてほしい。

「世界との相互理解を促進」とあるが、日本の魅力を広く世界に発信することばかりが書かれている。発信するだけでなく、世界のいろいろな姿、いろいろな取り組みを視聴者に伝えることも表現し、世界から率直に学ぶという視点を加えたほうが、相互理解を促進するという方針に適した内容になるのでないか。

「多様な価値を認め合い、ともに生きる社会を実現する放送・サービス」では障害者や子どもたちのことが書かれているが、男女格差の問題についても盛り込んだ方がよいのではないか。世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数で、日本の順位が昨年から後退したのは大きな問題だ。男女の格差は重要なテーマだと思う。

○　全体としては重要なポイントをきちんと網羅し、バランスのとれた構成になっていると思うが、まず自主・自律、不偏不党の精神を明記し、ＮＨＫの基本的なスタンスを明確にする必要があるのではないか。

重点事項に「少子高齢化」とあるが、少子高齢化の前に人口減少なのではないかと思う。ＮＨＫは人口減少が社会に与える影響についても放送で取り上げており、人口減少について明記することを検討してほしい。

「３０～５０代を中心とした現役層」という表現は、「中心」と言っているとはいえ、「現役」を年齢でとらえることに違和感を覚えた。６５歳までの雇用確保が義務化されているだけでなく、年金支給年齢のさらなる引き上げやそこまでの就労が議論されている状況もある。また、「現役」を働くことだけでなく社会参加という意味で考えると、共生社会、全員参加型の社会を目指すのであれば、この表現はいま一度検討した方がよいと思う。

少子高齢化や過疎化の進行など各地共通の課題について、ＮＨＫの全国ネットワークを生かして取り上げることが書かれているが、それぞれの放送局で地域ごとの課題を深掘りし、そこから地域を越えた共通の課題を見出すという観点も重要だと思う。その意味で、全国の放送局が取り組む内容について、暮らしに役立つ情報や関心の高いテーマだけでなく、地域に寄り添った「その地域固有の課題」「地域ごとの課題」を追加したほうがよいのでないか。

ＢＳプレミアムの編集方針に「ゴージャスで多彩な番組」とあるが、「ゴージャス」ということばに違和感があった。「豪華・華美」というイメージがあり、肯定的なニュアンスだけでとらえられるのかどうか疑問に思う。質に重点を置いた記述のほうがＢＳプレミアムにふさわしいと思った。

○　ラジオ第１放送について、部門別編成比率で「報道番組３５％以上」となっているが、個人的にはほとんど報道分野で放送してもいいとさえ感じている。今年度４～９月の実績では５４．３％が報道番組だったとのことで、５０％以上でもよいのではないか。

地域社会への貢献については、地域放送局でそれぞれの地域の課題を取り上げることはぜひお願いしたい。そのうえで地域の課題を全国に発信していただきたい。既にそうしていると思うが、来年もお願いしたい。

日本の農業は生産量が絶対的に落ちており、２、３年のうちに大きな転換期が来ると思う。数年ぶりに生産額は伸びたが、品薄で単価が高くなっているという実情があってのことだ。当面は落ち着いた状況が続くと思うが、食料・農業・農村基本計画が更新される 2020 年頃に大きな転換の時が来ると思う。農業の問題についても長期的に伝えてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

部門別編成比率で「報道番組３５％以上」「娯楽番組２０％以上」としているのは、最低限達成したい目標値として記載している。実際の定時番組の編成では、ラジオ第１はだいたい報道番組５割程度となる予定である。

○　2020 年の東京オリンピック・パラリンピックはとても重要なものになると思う。オリンピック・パラリンピックはスポーツと文化の祭典と言われている。ロンドン大会が成功したのは、ダイバーシティ、障害者との共生、文化とスポーツの融合など、大会で何を目指しているのかを明確に打ち出し、イギリスの文化水準の高さを世界に知らしめたからだと思う。そこで大きな役割を果たしたのが映像でありＢＢＣで、イギリスは世界からの賞賛を集めた。日本でその役割が果たせるのはＮＨＫだと思う。重点事項の「“公共メディア”にふさわしい挑戦を」という項目の中で、最新技術の活用や人と人とをつなぐことをうたうのは重要なことだ。だが、オリンピック・パラリンピックを契機として共生社会の実現に向けた具体的な動きがあるときに、文化芸術に何ができるのかも重要なテーマだと思う。そういうことをしっかり取り上げていくことも盛り込んでもらいたい。

○　地域の問題を地域放送局が取り上げるだけでは十分ではないと思う。そのよさもあるが、地方の魅力を全国放送で発信する番組があるように、地域の問題を全国に伝える番組も必要だ。地域放送局と東京という形で二分して考えているように見えるが、そう考える必要はないのではないか。

インターネットの普及で、マスメディアが情報を発信し視聴者がそれを受け取る、という形ではなくなっている。視聴者は大きな一つの集団ではなくなり、何となく文化を共有する集団が存在し、人々は自分に合った情報だけを取りに行くようになっている。そういう時代になり、“公共”の意味を捉え直さなければならないと思う。「知りたい」と思っている人はさまざまにいる。ＮＨＫの数多くあるコンテンツを放送という時間枠の中だけで活用していてはもったいない。世論を分断しない慎重さは必要だが、コンテンツを幅広く届けることを考えた方がよいと思う。視聴者が一つの集団でなくなった時代の“公共”のあり方についてもそろそろ考えてもらいたい。

○　全体的に残念な印象が強い。通信技術が発達し、多様なメディアが存在する中で、ＮＨＫが何を目指し、何をするのかがこの文面からは伝わらず、ＮＨＫの役割は何なのかと感じさせられた。

東京オリンピック・パラリンピックに過剰なまでに触れていることも気になる。東京大会が重要なテーマであることはわかるが、一方で、政治に対して切り込む覚悟は読み取れない。憲法、安全保障政策、エネルギー政策など、国論を二分するようなテーマについて、多様な意見を伝え、議論するような場を提供することも公共メディアが果たすべき重要な役割だと思う。「東京オリンピック・パラリンピックによって世界の関心が日本に向けられる中、国際発信を拡充する」とあるが、世界に日本を発信するだけでなく、またオリンピック・パラリンピックに関係なく、世界が日本をどう見ているのかをしっかりと報じるという視点を持ってもらいたい。また、ＢＳ１の編集方針でも、オリンピック・パラリンピックが大きく取り上げられており、スポーツチャンネルかのような印象だ。ＮＨＫにはすでに４つのテレビ波とラジオがある上に、さらに４Ｋ・８Ｋにも取り組もうとしている。適正な規模とは何なのかという視点を持って、各波の役割も考えるべきだと感じた。

動画コンテンツを配信するメディアが多々生まれ、多くの娯楽コンテンツが提供されているなかで、ＮＨＫはどのようなメディアであるべきか、民放やインターネットメディアとどう共生し、公共メディアとしてどのような役割を果たすのか、もっと考える必要があるのではないか。

○　冒頭で「インターネットを活用した新しいサービスを充実させます」と書いてあるが、通読してもインターネットを活用したサービスが具体的に何なのかがわからなかったのが残念だ。だがサービスの充実はぜひ検討してもらいたい。充実のポイントはＮＨＫの強みをコンテンツにどう生かすかだと思う。特にオリンピック・パラリンピックでは競技を見せるだけではない、新しいサービスを検討していただく必要がある。一方で、アーカイブスは強力なコンテンツとなりうると思う。長年

蓄積してきたコンテンツはＮＨＫの強みなので、うまく利用することでほかのインターネットサービスとの違いを打ち出せるはずだ。こうしたことを具体的に本文に盛り込むのは難しいと思うが、ＮＨＫならではのインターネットサービスを検討してもらいたい。

○　「ゴージャス」ということばについては、私も気になったが、ＢＳプレミアムなのでよいのではないかとも思う。ことばの意味をきちんと確認して判断してもらえればよいのではないか。

○　バランスが良くとれた内容だと受け止めた。その上で注文を申し上げると、そもそも「国民全体に対してバランスをとる」という視点が優先されるために、１０～３０代の若年層のテレビ離れへの対策に重点を置く意識が感じられなかった。とりわけ「インターネット」という文言がちりばめられてはいるものの、災害、国際発信、若者の視聴などへのアプローチとして、テレビやラジオでなく、モバイルの時代に入っていることに対する認識が薄いという印象を持った。インターネットおよびモバイルでの技術や経験値を磨いてほしい。ネット視聴者へＮＨＫが受信料の負担を求めることの是非が取りざたされているが、堂々と行えばいいと思う。民放各社にもそのノウハウやインフラを提供すればよいのではないか。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２４日(火)のクローズアップ現代＋「家電が突然発火する！？～知られざる“サイレントチェンジ”～」を見た。メーカーが気づかぬうちに下請け企業が部品の材料や仕様を変えてしまう“サイレントチェンジ”ということばを初めて知り、勉強になった。経済のグローバル化が進む中で、今後もサイレントチェンジによる事故が発生する可能性があることを指摘する重要な報道だったと思う。企業の対応にも限界があり、消費者が身を守る手だてが無い中でどうすればよいのか考えさせられた。番組では、メーカーや消費者センターに情報を伝えることが重要だと言っていたが、それだけではなく、国境を越えた製品事故の防止には各国の行政機関の連携も重要だと思う。その意味で、対策についての行政側のコメントを伝える必要があったのではないか。今後取り上げる際は、その視点での取材もお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

この番組では“サイレントチェンジ”という新たな事態の知られざる実態と背景を強調して伝えた。こうした番組では、

実態を告発し、問題点を整理し、対策まで踏み込んで言及することが求められているかと思う。今回のケースに限らず、対策まで視野に入れて伝えることを心がけたい。

○　１１月９日(木)のクローズアップ現代＋「内部証言で迫る“不正の深層”～神戸製鋼・日産で何が～」を見た。日本を代表するメーカーの不祥事をきちんと取り上げていたのはよかった。ただ、神戸製鋼と日産・ＳＵＢＡＲＵの問題は不正といってもレベルが違うのでないか。同列に議論されているようなところがあって気になった。

（ＮＨＫ側）

神戸製鋼と日産・ＳＵＢＡＲＵの不祥事が同じレベルのものでないことは理解している。番組の中でも二つの問題のレベルの違いは意識して伝えたつもりだ。一方で、立て続けに不祥事が起きており、日本の製造業のあり方が問われているのでないかと考えて、スタジオ部分で共通点を見いだすことも試みたが、その部分がそうした印象を与えてしまったかもしれない。引き続き取材を深めていきたい。

○　１１月１３日(月)のクローズアップ現代＋「突然あなたも被害者に！？“ネットリンチ”の恐怖」を見た。芸能人・一般人の被害者だけでなく、情報を拡散するまとめサイトの実態や個人情報を特定していたことのある人物なども取材しており、多角的に実態を伝えるバランスの取れた内容だった。まとめサイトの収入源は広告で、アクセスが増えるほど多くの収入が得られるとのことだったが、こうした仕組みにもネットリンチを加熱させる一因が潜んでいると思う。スポンサーや代理店などは、デマを拡散するようなサイトにはお金は払わないといった対策をとるべきだが、現状はその責任を放棄しているに等しいと思う。そうした背景の問題にまで踏み込んでいたらなおよかった。ＮＨＫについても考えさせられた。ＮＨＫは公共メディアを目指しているというが、現在は放送法上、公共の福祉のための基幹放送、公共放送だ。公共メディアは公共放送と何が違うのか、それは放送法の中でどう位置づけられているのか、ＮＨＫは示す必要があるのではないか。能力的にも財政的にも公共メディアになることが可能な組織なだけに、何らかの仕組みがなければどこまでも守備範囲を拡大していくことになる。ＮＨＫを律するものが必要なのではないか。この番組を見ながらそんなことを考えさせられた。

○　１１月４日(土)のＮＨＫスペシャル　シリーズ古代遺跡透視「大ピラミッド　発

見！謎の巨大空間」を見た。巨大空間を発見した論文の発表に合わせて、ニュースで報道し、番組を放送するという極めてよい連携だった。ミューオンという素粒子でピラミッドの中を透視するという、最先端の研究を紹介したという点がとてもよかった。ミューオン透視は福島第一原発で注目されているが、火山の火道の透視などでも利用されている技術なので、そうしたことも取り上げたらよかったと思う。また、ＢＳプレミアムでもツタンカーメン王墓を取り上げた番組があったので、うまく連動して放送できればなおよかったのではないか。

○　１１月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「追跡　パラダイスペーパー　疑惑の資産隠しを暴け」は衝撃的だった。普通に生活していては見えない問題を人々に伝えることが報道の役割だと思うが、その役割をしっかり果たした番組だと思う。国際調査報道ジャーナリスト連合が情報を入手したとのことで、ジャーナリストも国際的に協力して取材が必要な時代なのかと思った。

○　１１月１０日(金)のドキュメント７２時間「英会話教室でシーユーアゲイン」は、英語をコミュニケーションの手段としてとらえるだけではなく、学ぶことを通じて自分らしい生き方を模索する姿を描く、といった番組の趣旨をテレビ情報誌で読み、興味を持ったので見た。確かにインタビューでそういった話も聞かれたが、一方で、英語への苦手意識や学校教育での課題などの方が気になってしまい、趣旨に沿った見方はできなかった。当初の趣旨で伝えるには厳しい部分もあったように感じた。

○　「週刊　ニュース深読み」は、子育て世代にも見やすいニュース番組で、ほぼ毎週見ている。１１月１８日(土)の「ＳＮＳにあふれる“悲鳴”若者の心にどう向き合う？」は、座間市の死体遺棄事件を受けて、すぐにその背景について取り上げたことを評価したい。ＳＮＳで生きづらさを訴える若者たちの実態が、非常にわかりやすく解説されていてとてもよかった。現実の世界では気持ちをわかってもらえないから、闇アカウントを作って「＃死にたい」とつぶやき、理解してくれる人を探して安心感を得ていることもよくわかった。ＳＮＳについて自分ではわかっているつもりだったが、若者がＳＮＳでいろいろなアカウントを使い分けていることや、闇アカウントの存在など、知らないことも多かった。「ＳＮＳはやらないからわからない」という親は意外と多いが、子どもたちが使いこなしている以上、知っておかなければならないと思う。引き続きさまざまな番組で取り上げ、この現実を伝え続けてほしい。

○　１０月２４日(火)、２５日(水)、２６日(木)のハートネットＴＶ「シリーズ　１０００日前　東京大会へ！」を見た。第１回「パラリンピックが日本を変える!?」で

は、障害者リポーターが車いす陸上の選手をインタビューしていたが、障害者同士だからこその素直な会話が和やかで印象的だった。第２回「パラ新競技を広瀬アリスが体験」では、家族に支えられながら新競技、パラテコンドーとパラバドミントンに臨む選手の非常に前向きな姿に心を打たれた。第３回「パラ陸上・短距離ホープに密着」では知的障害のある陸上短距離選手が監督とのコミュニケーションの中で成長する姿を描いていた。毎回テーマは異なっていたが、どの回もコンパクトにまとまっており、それぞれに感動があった。このように幅広い内容で多くの感動を取り上げることで、パラスポーツをより身近に感じ、多くの人が興味を持つきっかけになると思う。これからも継続的に取り上げてもらいたい。

○　１０月３１日(火)のハートネットＴＶ　シリーズ　依存症　第１回「ギャンブル依存症　孤立する当事者と家族」、１１月１日(水)の第２回「クレプトマニア～罰だけでなく治療を～」、１１月２日(木)のＷＥＢ連動企画“チエノバ”「“依存症”～家族はどうすればいい？～」を見た。医療機関の具体的な対応を紹介しており、わかりやすくて大変よかった。病気であるにも関わらず、今の日本には既存ギャンブルも含め依存症対策法がないという。これからカジノが解禁となり、ギャンブル依存症の問題がもっと大きくなるのではないかと心配になった。継続的な番組制作を期待する。

○　トランプ大統領来日の一連のニュース報道については違和感があった。政治家にはメディアを利用しようとする側面もあると思うので、公共放送として政治家をどのように取り上げるのかは大変難しい問題だと思う。その中で、政治的な背景や意図など多面的な報道を期待していたが、どの時間帯のニュース番組も同様に歓迎ムードでそのときの状況を伝えるだけだったので残念だった。

（ＮＨＫ側）

トランプ大統領来日については北朝鮮情勢が厳しい中、日米の連携なども含めて伝える必要があり、かなりの時間を取って放送した。常に冷静な姿勢で報道したつもりでいるが、トランプ外交については取材を続けているので、いただいた意見は参考にしたい。

○　大河ドラマ「おんな城主　直虎」や「ＴＨＩＳ　ＩＳ　ＵＳ　３６歳、これから」など、ドラマのホームページは出演者のインタビューなど多彩な情報が掲載されており、番組では得られない情報をきっかけに番組をさらに見たくなるなど、よい循環が生まれると思う。ログ解析なども行い、番組とホームページが一層連携した

サービスを充実するとよいのではないか。

○　「ＮＨＫサイエンススタジアム２０１７」に子どもと行ってきた。「ＮＨＫスペシャル　シリーズ人体　神秘の巨大ネットワーク」の「ＶＲおしっこの冒険」など、番組のいろいろなブースがあって楽しめた。番組や科学の世界が身近に感じられた。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年１０月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１０月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１６日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　神秘の巨大ネットワーク第１集「“腎臓”が寿命を決める」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　大日向雅美（恵泉女学園大学学長）
副委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　　員　今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)代表取締役専務執行役員）
大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
鎌田　　實（諏訪中央病院名誉院長）
佐野真理子（主婦連合会参与）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社執行役員論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
西原浩一郎（金属労協顧問）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース(株)執行役員メディア事業開発担当）

（主な発言）

＜ＮＨＫスペシャル　シリーズ　人体　神秘の巨大ネットワーク
第１集「“腎臓”が寿命を決める」（総合　１０月１日(日)放送）について＞

○　腎臓がおしっこをつくるだけではなく、血圧や赤血球の調整という重要な役割を果たしていることが、非常にわかりやすく解説されていてすばらしかった。これまで模式図でしか見られなかった糸球体などの高精細なＣＧやミクロの映像がとて

も新鮮で、子どもでも引き付けられたのではないだろうか。映像の力を感じた。難治性の高血圧に対する最新の手術法として紹介された腎デナベーションについては、もう少し詳しく説明してもらいたかった。番組の本題が腎臓の機能についてなので、治療法にどれくらいの時間を割くのか難しさはあると思うが、視聴者の関心は高いと思うのでうまく時間内で伝えられていればなおよかった。今回は、腎臓が一番重要な役割を果たしているような表現だったが、腎臓以外も重要なはず。シリーズ残りの６回はどのような見せ方をしてくれるのか楽しみだ。

（ＮＨＫ側）

腎デナベーションをどう説明するかは試行錯誤を重ねた。腎臓が発するメッセージ物質や人体ネットワークという大きな脈絡の中で説明する難しさは指摘のとおりで、視聴者からも問い合わせをいただいている。内容を補完する意味でホームページで詳しい情報を紹介しており、また他の番組で詳しく伝えることができないかも検討している。

○　「寿命を決める」というタイトルに、見るしかないという気持ちになった。つかみとしては最高のタイトルだと思ったが、一方で腎臓の本質的な機能を言い表すタイトルの方がよかったのではないかとも思う。内容はとても勉強になるもので、ミクロの世界が高精細なＣＧなどでわかりやすく説明されていてすばらしかった。実際に映像として見せられると本当によくわかる。それだけでなくワクワクする部分もあって映像の力が存分に発揮された番組だった。こんなに次が早く見たいと思った番組はない。残り６回が楽しみだ。ただ最後の方で薬が腎臓の負担になるというコメントがあったが、どう負担になるのかもう少し詳しい説明があればなおよかったと思う。

○　最新技術で撮影されたミクロの映像や高精細なＣＧ、最新のデータをうまく使って、科学的にわかりやすく説明されていてすばらしかった。実際の医療現場の様子も織り交ぜ、多角的に伝えられていて興味深く、ためになる番組だった。また、音楽もすばらしく、アナウンサーの声と音楽、そして映像がとてもよく合っていてテレビならではの番組だと感じた。第２回以降もとても楽しみだ。ＣＧを作るのは非常に難しいので、番組のために制作したＣＧを授業や研究の現場でも活用できるようにしてはどうだろうか。

（ＮＨＫ側）

映像は番組のホームページで公開しており、誰でも見てい

ただくことができる。今後も回を重ねるごとに増やしていく予定だ。研究者をはじめ多くの方にご協力いただいて制作したものは、放送だけでなくさまざまな形で届けていきたい。多くの若い人たちにも触れてもらい、科学の世界をワクワクするものとして紹介できればと思っている。

○　脳と心臓が他の部位や臓器を動かしているという、かつての人体についての考え方が、ここ２０～３０年の間で大きく変わったことをまざまざと見せつけられた。腎臓の機能だけでなく、そうした医療、医学の進歩が非常にわかりやすく伝わる内容だったと思う。とても勉強になった。

○　誰もが関心のある人体について、最新の科学的知見を非常にわかりやすく伝えていた。次回が楽しみになるすばらしい内容だった。病気に苦しんでいる人は特に正確な情報を求めている。そのため人体を扱う番組には、研究成果がすぐ治療につながると受け止められかねない難しさがあると思う。実際には、研究がある水準に達したことと医療で活用できるようになることの間にはいくつもの段階があり時間がかかる。前日に放送したシリーズ　のプロローグ「神秘の巨大ネットワーク」でリウマチのことを取り上げた際、劇的に症状が改善する最新治療を紹介しながらも、現状に至るまでに長い道のりがあったことにきちんと言及していて感心した。ＮＨＫはホームページ「ＮＨＫ健康ｃｈ」にきちんとＱ＆Ａの仕組みを作り、また関連番組を作る姿勢も見受けられる。人体や健康というテーマで視聴者と向き合う体制を局全体で作っていることがすばらしいと思う。

○　これまで体の中心は脳だと思ってきたが、腎臓の機能とその重要性について認識を新たにした。臓器が会話しながら共同作業によって生命を維持している構図がよく理解できた。高精細なＣＧや司会の山中伸弥教授の説明がわかりやすかったが、特に腎臓と酸素の関係の説明に水泳の高地練習を用いたことが非常にわかりやすくてよかった。ただ、全ての臓器の働きをコントロールしている重要な器官として腎臓を紹介していただけに、腎臓に病気を抱えている方がどう感じたかは気になった。その方たちに向けて、治療や日ごろのケアなど少しでもいいので情報があった方がよかったのではないか。

○　すばらしい番組で、飽きずに一気に見た。山中教授の説明がとても丁寧でわかりやすく、落ち着いて見ることができてよかった。腎臓のメカニズムが可視化されることでより深い理解につながったので、人体はまさにテレビの力が発揮されるテーマだと思う。

○　研究だけではなく、医療現場にも目を向けた内容に好感が持てた。専門家やタレント、女優、スポーツ選手というスタジオ出演者の組み合わせに最初はどうなるかと思ったが、バランスがうまく取れていてよかった。人体のネットワークを読み解くシリーズとのことだが、ネットワークの話になると双方向性の話になり、結局腎臓だけでなく全てが大事というワンパターンに陥りそうな懸念はあるが、今後の展開を期待したい。

○　難しくなりがちなテーマだが、山中教授とタモリさんのやりとりがとてもわかりやすく、見始めてすぐに引き込まれて最後まで興味深く見ることができた。心臓が司令塔という考え方から人体ネットワークという考え方に変わってきていることがよくわかり、医学の進歩とはこういうことなのかと思った。日常の生活に生かせるような情報などがあるとより興味深く見ることできたと思う。楽しみながら見られる番組なので、若い人に理系の分野に興味を持ってもらうきっかけになるのではないか。このすばらしいＣＧや映像は、ぜひ学校教育をはじめ一般的に活用できるようにしたほうがよいと思う。

○　これまでの腎臓の役割や人体への理解が覆され、新たな学びにつながる大変優れた番組だった。最新医学の到達点として明らかにされた人体、腎臓の精密なメカニズムが、鮮明なＣＧやミクロの映像を交えて紹介され、非常にわかりやすかった。先進的な医療現場の臨床で効果を上げつつあることも紹介され、期待を感じさせる内容でもあった。山中教授のコメントは医学に真摯（し）に向き合う姿勢が伝わってきて好感が持てたし、タモリさんやゲストのコメントもユーモアをまじえながらも落ち着いていて、番組の雰囲気に合っていた。ただ、腎臓の重要性を強調する内容だったたけに、腎臓に病気を抱えている方にとっては、不安に思う点や疑問点もあったのでないかと思う。ＮＨＫが「ＮＨＫ健康ｃｈ」などインターネット上で視聴者の不安や疑問に答える努力をしていることは理解しているが、番組でもそうした方に向けたメッセージを伝えた方がよかったと思う。今後の番組では意識してほしい。

（ＮＨＫ側）

確かに、病気を抱えた方に向けてひと言添えることで番組をもっと楽しんでもらえるようになると思う。今後の番組では十分に議論し、検討していきたい。

○　ＣＧがとてもわかりやすく、おしっこが出るまでの体内を冒険するシーンは映像

と音に臨場感があって、腎臓を体感しているような感覚になった。スタジオの床に映像を映しながら腎臓のメカニズムを説明していたこともわかりやすくてよかった。専門的な知識がない人にも伝わるようなやさしいことばで説明していたことも印象的だった。テレビで新しいことを知ると誰かに話したくなるものだが、ホームページにＣＧや映像が掲載されていて話題を共有しやすかった。腎臓をどのように大事にすればよいのかまで伝えていれば、なおよかったと思う。続きを楽しみにしている。

○　完成度の高い番組で大変勉強になった。とりわけＣＧについては、国内最高峰とも思えるほどすばらしい精密さだった。あえて言えば、ナレーションで、「絶妙」や「神業」といった修飾語句が何度も出てきて過剰な印象を受けた。過剰な修飾語はかえって安っぽく感じる。科学的な番組では修飾語句よりも事実で迫った方が完成度はより高まると思う。

○　ナレーションにおける修飾語句が過剰との指摘については同感だ。出演者は進行もコメントも非常によかった。山中教授の補足情報を画面上に「山中メモ」として表示したのもとてもわかりやすかった。かつてのＮＨＫスペシャル「驚異の小宇宙人体」も見たが、それを超える出来だったのではないか。このレベルを落とさずに残り６回を制作するのは大変だと思うが頑張ってもらいたい。シリーズ最後のテーマが謎とのことだが、とても大事なことだ。どんなに研究が進んでも謎があることを見せて、シリーズを見続けた若い人たちの中からその謎にチャレンジする人が出てくることを期待したい。

○　この番組はＮＨＫの真骨頂だと思う。出演者を見て、バラエティー的にやるのかと少し心配だったが、無理に盛り上げるようなところがなく、人選もトーク内容もすばらしかった。病気を抱えている方への配慮については、この後どの回にも当てはまることだと思うので、ぜひ検討してもらいたい。すばらしい番組だった。次回以降も期待している。

＜放送番組一般について＞

○　９月１８日(月)の特集ドラマ「眩（くらら）～北斎の娘～」(総合 後 7:30～8:43)を見た。葛飾北斎の娘であり、独自の美と画風を切り開いた女絵師・お栄の生き様を見事に描き切っていた。臨場感を持って再現された江戸の情景、出演者の圧倒的な演技力、映像の美しさ、音楽との調和、どれもすばらしく芸術性の高いドラマで、

最後まで目が離せなかった。ＮＨＫのドラマ制作力の高さを実感した。

○　特集ドラマ「眩（くらら）～北斎の娘～」を見た。原作があるドラマや映画は、原作を読んだときの感動に及ばないことが多いのだが、このドラマは同じくらい感動した。そこまでの作品に作り上げたことがすごいことだと思う。

○　９月２３日(土)のＮＨＫスペシャル「総書記　遺（のこ）された声～日中国交４５年目の秘史～」では、国交正常化以降４５年間の日中関係を、新たに発掘された資料も交えながら、時代ごとに振り返っていた。日中関係は今なお深い溝が残っている。両国の今後を考える上で、その歩みを今振り返る意義は大きく、公共放送としての役割を果たす内容だった。

○　９月２４日(日)のＮＨＫスペシャル「亜由未が教えてくれたこと～障害者の妹を撮る～」を見た。障害がある方をあれだけ長時間撮影することは通常難しいと思うが、ディレクターが自分の家族を撮影したことで、喜怒哀楽が間近で感じられるような番組になっていた。その場で向き合っているような感覚でわがこととしてとらえることができ、真の意味で障害者の理解につながる番組だったのではないか。

○　１０月１４日(土)のＮＨＫスペシャル「巨龍中国　一帯一路～“西へ”　１４億人の奔流～」はおもしろかった。このシリーズはこれまでも大気汚染や消費革命などを取り上げてきており、どれも興味深かったのだが、一方で、取り上げたのはどの国にもある問題だと思う。中国が本当に独特なのは、こうした問題ではなく、例えば少数民族の弾圧や過酷な権力闘争、徹底した言論統制など、共産党一党体制によって起きるひずみのようなところにあるのではないか。容易でないことは承知の上で、「巨龍中国」には、ぜひＮＨＫの取材力で政権内部に食い込み、中国の本質的な問題に迫るような番組を期待したい。

○　９月２５日(月)のクローズアップ現代＋「障害者と恋とセックスと」を見た。障害者の恋愛やセックスを描いた映画の出演者とそのモデルとなった障害者本人が出演し、障害者の性がタブー視され、話すことすらできない状況や福祉現場での戸惑いなどが伝えられた。話ができる環境が必要なこと、当たり前の感情を理解してほしいことが訴えられたが、その通りだと思う。タブー視されているような、普段あまり取り上げられないテーマはＮＨＫにしか取り上げることができない。引き続き取材してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

障害者の性の問題については、Ｅテレでは何回も取り上げてきたが、総合テレビではこれまでなかなか放送するタイミングがなかった。今回、映画が話題になっていることもあって取り上げたところ、さまざまな反響をいただいた。機会を見つけてフォローしていきたい。

○　９月２７日(水)のクローズアップ現代＋「２５００兆円超え！？世界で急拡大“ＥＳＧ投資”とは」を見た。地球規模の環境問題や労働者の人権問題に配慮した企業のあり方を迫る“ＥＳＧ投資”の実態を、具体的事例も取り上げながら伝えていた。持続可能な社会を築くために、企業努力が求められていることを啓蒙（もう）する内容は、2020 年に向け世界から注目を集める今にふさわしい内容だった。日本は欧米と比べて進展が遅いとのことだが、放送は気運を盛り上げる役割もあると思うので、こうした番組をもっと放送してもらいたい。

○　１０月１０日(火)のクローズアップ現代＋「テロ組織が難民支援をねらう！？～世界最大キャンプ閉鎖の裏で～」では、爆発的に難民が増加しているアフリカで、支援物資がテロリストたちに狙われケニアの難民キャンプが閉鎖され始めた現状が伝えられた。多くの難民が行き場を失い、内戦が続く祖国に戻っているだけでなく、テロリストが普通の町なかに出てくる可能性もあり、これらの問題にどう向き合うのかは深刻な課題で、難民支援の現状をよい視点でとらえていた。そんなアフリカから見て日本は、中立性と戦後復興で劇的な成功を果たした国として希望の存在だという。それに対して日本政府はどのような支援をしているのかについても、深く掘り下げて取材してほしかった。

（ＮＨＫ側）

ケニアの難民キャンプの問題については、ＩＳの活動が世界に拡散する中でいろいろなことが起きる危険性や、日本政府の対応についても課題意識を持っている。引き続き取材を続けていきたい。

○　９月２４日(日)の「あの日　あのとき　あの番組　百歳の笑顔　百歳の執念～きんさん・ぎんさんと奥村土牛～」は、100 歳で富士を描き続けようという奥村さんの執念を映し出していた。「完成はない、どれだけ大きい未完成で終わるかだ」と残された体力で声を絞るように言っていたのが印象的だった。こうしたことばを引き出せるのは、ＮＨＫの地道で丹念な取材ならではだと思う。テレビがつまらなくなったとい

われるが、ＮＨＫはドラマでもドキュメンタリーでも文化を創るようなすばらしい番組を放送していると思う。これからも期待している。

○　９月２４日(日)の深夜の保護者会「発達障害　子育ての悩みＳＰ」(総合 後 11:00～11:50)を見た。発達障害の子どもへの向き合い方の話を聞いて、人との触れ合い、コミュニケーションがいかに大切かを改めて感じた。「発達障害とわがままのとの違いがわかりにくい」という意見があったが、その点は最後までわからないままだった。何らかの医学的な解説があれば、なおよかった。

○　１０月７日(土)の「逆転人生」(総合 後 9:00～9:49)を見た。父親の急逝により４０億円の借金を背負うことになった人の逆転劇をドラマとスタジオで紹介するのだが、スタジオの弁護士が「払わなくてもよかった」とコメントしていたことには驚いた。ただドラマで再現するのではなく、弁護士の意見が聞けることで納得する部分も多く、とてもおもしろかった。

○　１０月１１日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で“孫ターン”について取り上げていた。こうしたことば、概念ができることでその動きが広まるということは往々にしてあると思う。地方を元気にしたいと思っている人間として、ＮＨＫが取り上げてくれたこと自体がとてもうれしかった。

○　１０月１２日(木)の人名探究バラエティー　日本人のおなまえっ！「【わたなべ】～伝説のスターと水軍で、全国展開～」は楽しめた。番組自体がよくなってきていると思う。今後も楽しみにしている。

○　９月１９日(火)のハートネットＴＶ　メンタルヘルス入門（１）「痴漢を治す条件反射制御法」は、まず題名が気になって見たが、痴漢がアルコールやギャンブルなどの依存症と同様、病気と診断されることに驚いた。それが条件反射制御法という治療法で治せることがわかりやすく解説され、ためになる番組だった。ただ、痴漢をする動物的な脳とそれを抑制する人間的な脳の話があったが、どうすれば人間的な脳を発達させることができるのか、もう一歩踏み込んだ説明がほしかった。また、番組冒頭で痴漢の説明に女性タレントを起用した演出には疑問を感じた。

（ＮＨＫ側）

ハートネットＴＶ　メンタルヘルス入門（１）で女性タレントに出演してもらったのは、少しでも多くの人に関心を持ってもらいたいとの思いからだが、伝え方については今後も十

分検討し、適切な演出を心がけたい。

○　９月２６日(火)のハートネットＴＶ　自閉症アバターの世界　第一夜「脳内への旅」、９月２７日(水)の第二夜「仮想と現実を生きる」を見た。あえて今までにない切り口で自閉症を取り上げようとした意欲は評価したい。現実世界でコミュニケーションに困っている人たちが仮想空間でアバターを介して会話を楽しんでいるのを見て、彼らが人間やコミュニケーションが嫌いな訳ではないことはよくわかった。ただ、仮想世界と現実世界、自閉症の人の認識と普通の人の認識などを映像化することの難しさを感じた。すっきりしなかった視聴者もいたのではないか。自閉症の人とのコミュニケーションのヒントなどがもう少し示されればよかったのではないかと思う。

○　９月２７日(水)のあさイチ「シリーズ発達障害３　どう乗り越える？コミュニケーションの困りごと」でも同様の問題を取り上げていたが、この番組は、問題の核心をよく捉えていたと思う。発達障害の方はコミュニケーションが取れないのではなく、普通の人と少し違うだけ。その独特さだけを強調するのではなく、誰であれ意思疎通を円滑に行うためにはある種の工夫を行っていることに気付かせてくれている点がとてもよかった。司会の２人はこの分野にずいぶん慣れていると思った。今後も継続的に取り組んでほしい。

○　９月３０日(土)のＥＴＶ特集「ウナギを追いつづけた男～塚本博士の大冒険～」を見た。有名なウナギの研究者への長期にわたる密着取材を通して、科学者が一つの研究対象にどれだけ精力を費やしているかがよく伝わってきて見応えがあった。時間をかけた密着取材はＮＨＫならではのものだと思う。

○　９月２４日(日)のＢＳ１スペシャル「日中“密使外交”の全貌～佐藤栄作の極秘交渉～」(ＢＳ１　後 10:00～10:50、11:00～11:50)を見た。歴史の表舞台に出てこなかった人をよくここまで掘り起こしたと思う。丹念な取材に感嘆した。中国の外交の巧妙さや、政治家の心理、密使外交のスリリングさなど、ミステリーのような内容で非常におもしろかった。地上波で放送した方がよいと思ったが、一方でＢＳだからこそここまで十分な放送時間が確保できたとも思う。日中国交正常化は田中角栄から始まるという一般的な認識に一石を投じる内容で、ぜひ書籍化なども検討してもらいたい。

○　１０月１５日(日)のＢＳ１スペシャル「サハリン残留　家族の歳月」は、時間をかけて丁寧に一人一人の証言を引き出しており、１時間４０分もある長時間の番組だっ

たが、見始めたら止まらなかった。元ソ連共産党員が当時を振り返って「非人道的だった」と述べるなど、心に刺さる証言を引き出しており、印象に残る番組だった。時間をかけて丁寧に取材を積み重ね、本質的な問題点や世界の矛盾を明らかにするような、こうした番組にこそＮＨＫの真価はあると思う。

○　１０月１２日(木)のＢＳ世界のドキュメンタリー「オーダーメイド・ベビー」は、生殖医療を応用して親が望む特徴を持った赤ちゃんを作り出す最先端医療について伝えていた。性別や目の色などを選ぶことができ、生殖産業と呼ばれる産業も出てきているという。ＳＦ映画の世界が現実にも起こりつつあるような衝撃を受けた。フランスのドキュメンタリーで、日本ではまだこうした動きは起きていないと思うが、将来起こりうる話として日本ではこの問題がどう受け止められるのか気になった。最先端の科学の問題であると同時に倫理の問題でもあり、多角的な問題意識でこのテーマを取り上げてもらいたい。

○　９月２０日(水)の「絶景にっぽん月の夜」(ＢＳプレミアム 後 10:00～10:59)は、銀閣など各地のさまざまな月の催しを民俗学的な側面からとらえたすばらしい番組だった。星ではなく月の文化だった日本独特の風土を伝えるものとして海外発信できる内容だと思う。ただ、昨年収録したものだったので、今年の旧暦の日付と合っていないなど、視聴者が少し混乱するところがあったのでその辺りは工夫が必要だったのではないか。

○　９月３０日(土)の「京都人の密（ひそ）かな愉（たの）しみ　Ｂｌｕｅ　修業中／送る夏」(ＢＳプレミアム 後 9:00～10:59)を見た。京都の伝統的な文化を継承し、自分なりの生き方を見いだそうとする若者たちの物語の中に、京都を誇りに思う気持ちが上手く表現されていた。ドラマとドキュメンタリーを織り交ぜた番組の仕立てもよく、２時間非常に楽しく見入ってしまった。2020 年に向けて、日本人自身が日本を誇りに思うことの大切さを感じさせてくれた。

○　９月１６日(土)に再放送された、音の風景「鳴く虫コンクール～東京～」(ラジオ第２ 後 7:25～7:30)について、目が見えない知人から、スズムシの鳴き声がとてもすばらしく、心が洗われて踊り出したくなるような気持ちになった、との感想を聞いた。目の見えない人たちにとってラジオはとても大事なメディアだ。ＮＨＫはそういう人も意識して番組を制作しており、それによって救われている人たちがいることに改めて気付かされた。今後もこうした番組も大切にしてもらいたい。

○　「にっぽん紀行」と「ドキュメント７２時間」が好きでよく見ている。毎回、国

内各地のふだん見聞きしないようなさまざまな日常に触れることができて楽しい。こうした番組が前面にＰＲされることはなかなかないように思うが、地方局制作の温かみあるコンテンツもぜひ大切にしてもらいたい。

○　「アニメ　ピングー　ｉｎ　ザ・シティ」と「ＰＥＡＮＵＴＳ　スヌーピーショートアニメ」が始まった。両方とも自分が子どもの頃にはやったキャラクターで、子ども以上に自分が盛り上がってしまい、あれこれ教えながら楽しみに見ている。また、「ＴＨＩＳ　ＩＳ　ＵＳ　３６歳、これから」は、高橋一生さんの吹き替えがよく、おもしろい。

○　「すイエんサー」を番組開始当初から見ている。例えば割りばしを均等に割るにはどうしたらよいか、カピバラの写真を超かわいく撮影するにはどうしたらよいかなど、身近な科学をエンターテインメントとして見せてくれるのだが、題材設定がユニークでおもしろい。エンターテインメントでありながらもまじめに科学と向き合っており、出演者のすイエんサーガールズが東大・京大の学生と課題を競って勝つという回もあった。科学の分野は女性が敬遠しがちだが、この番組で科学に興味持つ人もいるのではないか。若い人に見てもらえるようもっとＰＲした方がよい。

○　「１００分ｄｅ名著」は、３分や５分といった短尺でさらっと紹介するのではなく、100 分かけて内容をきちんと紹介するという姿勢に名著への敬意が感じられて楽しく拝見している。また紹介する本のコンセプトもすばらしい。９月は「全体主義の起源」、今の時代の流れをとらえたセレクトに敬意を表する。

○　「梅沢富美男と東野幸治のまんぷく農家メシ！」を見た。梅沢富美男さんと東野幸治さんが農家を訪問し、地元の作物を収穫してごはんを食べるだけのシンプルな内容ながら、大変楽しめる番組だった。出演者たちのやり取りには温かみがあり、農業の喜びがよく伝わってきた。人々の生活に密着した飾らない内容にとても親しみが持てた。

○　過剰な修飾の問題は、審議会でたびたび指摘があるバラエティー的な演出の問題にも通じるところがあると思う。高齢者はお笑いも修飾も抑制的なものを好むが、若い人との感覚が違う中で、バランスを取るのは難しいと思う。

○　出版社の社長が図書館に、文庫本の貸し出しをやめるよう要望を出したという報道を目にした。本に代表される人の英知は皆が共有できることが重要だと思うが、一方で作者や出版社はそれを売ることで生活が成立している側面もある。インター

ネットが普及し本の売り上げが減少している今、この社長の要望は、これからの情報社会を考える上での重要な問題をはらんでいると思った。この問題を考えるような番組は公共放送でしか作れない。ぜひ制作してもらいたい。

○　ＮＨＫのニュースでは年を表すのにいつも元号が使われている。西暦を合わせて言うこともあるが、元号しか言わないときもある。西暦のほうが視聴者にとってわかりやすいと思うのだが、元号を使う根拠やルールはあるのか。

（ＮＨＫ側）

明確な基準はないが、どちらがわかりやすいかということで元号を使うことが多い。国際ニュースや長期的な統計、2000年をまたぐ場合などで西暦を使うこともある。わかりやすさという意味では元号が変わるタイミングなども影響することだと思うので慎重に検討したい。

○　突然の解散総選挙、公示日直前の野党体制の激変など、政治的に混とんとした状況の中でも、ＮＨＫの報道はできるだけ丁寧に各党の政策を深掘りして伝える努力をしていると思う。新たに選挙権を得た１８歳の人たちの学校での主権者教育の状況や、親子の会話などもニュースで取り上げていた。初めて投票を行う人への情報発信も公共放送の重要な役割であり、評価したい。国民一人一人が難しい判断を迫られているので、判断のよりどころとなるとなるような報道と投票の呼びかけを最後まで続けてもらいたい。

○　若い記者が過労死した件について、ＮＨＫは既に真摯に向き合っていると思う。しかし過労死は非常に重い問題であり、ＮＨＫは社会に対しての影響力もある。そのことを肝に銘じ、二度とこのようなことが起きないよう、引き続き誠意を持って対応してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

職員の過労死の件については重く受け止めている。今後このようなことが起きないように、しっかりと対応していきたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年９月ＮＨＫ中央放送番組審議会

９月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１１日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成２９年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、平成３０年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。

続いて、くうねるあそぶ　こども応援宣言「ねる子よ育て！」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　大日向雅美（恵泉女学園大学学長）
副委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　　員　今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大川　順子（日本航空(株)代表取締役専務執行役員）
佐野真理子（主婦連合会参与）
田中　隆之（読売新聞東京本社執行役員論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
西原浩一郎（金属労協顧問）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース（株）執行役員メディア事業開発担当）

（主な発言）

＜「平成２９年度後半期の国内放送番組の編成」および
「平成３０年度の番組改定」について＞

○　ＢＳ１は後半期の新設番組がすべてスポーツ番組だが、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、スポーツ番組を増やし、盛り上げようという意図があるのか。それともたまたま重なってしまっただけなのか。意図があるなら説明してほしい。また、人気のないスポーツにも光を当て、バランスよく編成してほしい。

（ＮＨＫ側）

ＢＳ１はスポーツにこだわったチャンネルである。東京オリンピック・パラリンピックに向け、平成２９年度後半期だけでなく、平成３０年度以降の番組改定についてもさまざまに強化しなければいけない。オリンピックだけでなく、パラリンピックにも焦点を当てるなど、できるだけ多くの方々に見ていただける番組編成にしたいと思っている。

○　平成２９年度後半期の国内放送番組の編成で「ねほりんぱほりん」がまた１０月からスタートするということで、大変喜んでいる。昨年１０月からの番組はすべて見た。興味深い職業の方、さまざまな事情を抱えた人たちの本音トークをうまく引き出している。すべて人形におきかえて表現する演出もおもしろい。その一方で、前提として、かなりの取材を重ねているであろう点はＮＨＫらしい番組だと思う。番組では人間の奥深さがかいま見えるところもあり、ある意味で今の時代をしっかりと切り取っている。若者向けの番組と受け止められているようだが、いろんな世代が番組を見ている。秋からの新しいシリーズについても期待している。

○　デジタル分野に新しい試みはあるのか。多くの人々の接点がインターネットにシフトしているので、その部分に力を入れて取り組まれることが重要な時期だと思う。別立てで計画されているのであれば話を伺いたい。

（ＮＨＫ側）

健康のポータルサイトを立ち上げるために準備している。ＮＨＫのさまざまな健康情報やＮＨＫスペシャル「人体」シリーズのＣＧなどを組み合わせ、わかりやすいものにしたい。「ＮＨＫ１．５ｃｈ」、「ＮＨＫ　ｆｏｒ　Ｓｃｈｏｏｌ」など、これまでもさまざまな形でやってきたほか、「クローズアップ現代＋」のサイトもさらに見やすいものにしていく。デジタルの分野は模索しながらやっている。テレビとの接点が少ない３０代、４０代の方々に見ていただくためにも、充実したコンテンツを作りたい。

８月３１日(木)にハートネットＴＶ　生きるためのテレビ「＃８月３１日の夜に。　第１部」と、ハートネットＴＶ＋生きるためのテレビ「＃８月３１日の夜に。　第２部」(Ｅテ

レ 後 10:00～10:45)を放送した。９月１日は１８歳以下の自殺が年間で最も多い日となっており、その前日である８月３１日に放送した。番組を通じて悩んでいる１０代が思っていることをそのまま言える場を作ることにした。特設サイトではライブストリーミング配信を実施し、スマートフォンなどからもアクセス出来るようにした。視聴率はそれほどではなかったが、特設サイトへのアクセス数は非常に多かった。サイトの滞在時間が平均１時間３０分を超え、異例の長さであった。インターネットと連動した番組の可能性が広がったと感じている。どのようなものが若者の心をとらえるのか、今後も検討したい。

○　福島の原発のように、解決まで何十年もかかる問題を取り上げるのは公共放送にしかできないと思っている。また、現代社会において長期的、かつもっとも重要な問題は少子化だと思う。少子化についても長期的に取り上げていただければうれしい。

○　最近の番組を見ていると効果音が気になる。入れたほうが視聴率が上がるのかもしれないが、話を聞いているときに後ろで音楽が入ることがあり、多いと感じる。

（ＮＨＫ側）

ニュース番組等でもよく指摘をいただく。音声の表現についてはさまざまな検討をしており、できるだけナレーションの少ない番組を制作したり、音響効果の入れ方なども部内で議論している。ご意見をいただいたことについては現場にも伝える。

○　ＮＨＫの番組は広範囲にわたりバラエティ豊かに、また、放送の良心に従って、編成されていると思う。必ずしも視聴率の高低にとらわれず、今の時点で仮に反響が少なくても公共放送としての役割を果たせるように、来年度以降もこの方向で進めてほしい。視聴者のニーズに応えるだけでなく、公共放送として、文化、社会のあり方を精査し、ニーズを創る・掘り起こすという視点での番組作りも引き続き検討してほしい。

＜くうねるあそぶ　こども応援宣言「ねる子よ育て！」
(Ｅテレ　８月１９日(土)放送)について＞

○　子育てを応援する意志が明確に伝わる番組だった。必要な睡眠時間の確保が子どもの健全な成長にとっていかに大切なものであるのか、睡眠障害が子どもの成長に与える影響の深刻さについて社会へ課題を投じていてよかった。生活スタイルが多様化している中子どもたちがどういう状況に置かれているのか理解を深め、必要な対策を考える意義のある番組だと思った。さまざまな親子の実態、事例が豊富に紹介されており、特に、子育て世代にとっては共感するところが多かったのでないか。実際に子どもの様子を映像で見ると、想像していた以上に忙しく改めて考えさせられるものがあった。堺市の「眠育」は大変よい取り組みだが、進めるためには、課題がたくさんあると思うので、この番組を契機にさまざまな視点から取材し深掘りしてもらいたい。あえて注文をつけると、乳幼児と就学児童を分け、二部構成にしたほうがより理解が深まったのでないか。日本の３歳以下の子どもの睡眠時間が世界で最も短いという根拠として、具体的な数字のデータを示してもらいたかった。また１つのデータでそこまで言い切ってもよいのか疑問に思った。就学児童は世界と比較してどうなのかも知りたいと思った。

○　番組を見て、子どもたちの置かれている環境に驚いた。幼児、児童の睡眠の重要性と、子どもたちが十分な睡眠をとりにくい環境に置かれていることを改めて認識した。小学４年生の男の子がどうしても遊びたくて寝るのが遅くなってしまうのは理解できるが、小学５年生の女の子が習い事や、自主学習で睡眠時間が確保できないというのは特殊なケースなのではないかと思った。毎日あのような生活をしているとすればすごいストレスになるのではないか。睡眠障害の危険性のある子どもがたくさんいることにも驚いた。現在の子どもたちの教育を取り巻く環境について教育の専門家の意見も聞きたかった。中学校の「眠育」や、小学校の「はよねるデー」といった取り組みがなぜ始まったのかきっかけが分かればよかった。子どもに対するインタビューもあればよかったのでないか。画面の下に視聴者からの投稿が紹介されていたが、後で番組のサイトでも見られるようにしていただければと思った。

○　睡眠障害の深刻さを訴えながら治癒された例もきちんと紹介しておりバランスが取れていた。「ノークラブデー」や宿題の少ない日など具体策をたくさん取り上げたのはよいと思った。「将来大成する大人はかつて厳しい子ども時代を送り、寝る間も惜しんで勉強し、何かに励んだ人もいたはず」という反論もあるかもしれな

い。しかし、番組からは子どもたちの選択肢をなくしてはいけないという主張も感じられた。もっと習い事などをやりたい子どもは自分の意志で、学校の外で挑戦する時間をつくればいいという、より具体的なメッセージを伝えてもよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

睡眠時間のデータは、アメリカの小児科医のグループが長年にわたり調べている世界１７の国と地域のデータを紹介した。まずはグラフとして出すつもりで用意していたが、出演者の方々と話をする中で、難しい勉強はさておき、「日本の子どもたちは寝る時間を確保するのが難しい」というメッセージをシンプルに伝えてみてはどうかということになった。われわれもかなり悩んだが、根拠となるデータやグラフを出したほうがよかったのでないかと放送後にも議論した。

遅くまで習い事や勉強に追われているケースは特殊な例ではない。３年前、Ｅテレの「ハートネットＴＶ」で子どもの睡眠について取り上げた。普通に頑張っている子どもたちが続々と睡眠障害と診断されている現場に遭遇した。こういった子どもたちはむしろ増えている。原因として、宿題が多くなっていること、塾へ毎日通うのが当たり前である状況がわかったので、今回子どもをとりまく環境を改めて伝えた。

堺市の取り組みがなぜ始まったかについては、３年前に制作した「ハートネットＴＶ　シリーズリハビリ・ケア新時代　脳からの挑戦　第３回「子どもの脳からのＳＯＳ」、それを元に翌年放送した、クローズアップ現代「不登校１２万人のかげで～広がる子どもの睡眠障害～」で福井県の眠育の放送をたまたま見ていた堺市の方々が自分たちの地域でもやらなければならないと感じて始めたそうである。

○　挑戦的な番組で、新しい取り組みだと感じた。ただ、番組をどういう層に見せようとしているのかがわからなかった。がんこちゃんが出てきたが、話す内容はシリアスなので、子ども向けではなく、親が見る番組だと思った。睡眠の問題を社会問題として考えてはどうかという話があったが、住宅構造や部屋数の問題で十分な睡眠がなかなかとれない場合もあるだろうし、受験など大きな課題もある中で、睡眠の問題だけを切りとってもうまく解決策を見出せないのではないか。こういう番組

を続けるのであれば、多角的な視点でやっていただきたい。

○　子どもたちの生活環境は今、非常に不自然になっているのではないかと思う。今回子どもの睡眠をテーマとして取り上げられたことはよいことだと思った。悪戦苦闘しているいろいろな家庭が出ており、リアルでよかった。今の子どもたちは時間に追われて、今という時を未来の準備に使いすぎているのではないか。子どもに見てもらうことも考えるなら、１時間は少し長い。データはサイトに掲載し、放送を２回に分けるなど工夫があってもよかった。

○　小学２年生の娘と一緒に見た。深刻な睡眠障害で病院に通っている子どもの様子を見ると、切実な問題だと思った。娘は１時間の番組の中で、コメンテーターが出てくると飽きてしまったが、同じ位の年の子どもが出ると食いついて見ていたので、子どもの映像が多く出てきたのはよかった。今は、子どもが睡眠不足になっている一方で、母親が毎日何かに追われている状況もあるのではないか。子育て中は他の人と比較されて劣等感や孤独感を抱え、もっとよい母親にならなければと思っている母親が多いと思う。塾に行かせたり、習い事をさせたりするのは子どもを愛しているからだと思うので母親の視点からの放送があっても興味深いと思った。

○　意義深い番組と思っていることを前提として、気がついた点を申し上げたい。一つ目はデータの問題である。寝ると成績がよくなるとか、身長が伸びるという紹介があったが、根拠となるデータが示されなかった。データで示されてはじめて視聴者も納得するのではないか。二つ目は日本の構造問題である。長時間労働など、社会全体の持つ構造問題の一部が子どもに表れているという側面もあると思うので、そういった大きな枠組みの中での議論も展開できるとなおよかったのではないか。最後に、都会と地方では子どもの時間の使い方が全く違うような気がする。数でいえば大都市圏の人が圧倒的に多いと思うが、時間に追われている子どもたちがいる一方で、塾に通いたくても塾がない子どもたちもいることにも番組のどこかで触れてほしかった。

○　親しみやすいスタジオの雰囲気の中で、日常気になりつつも流してしまっている大きな課題を取り上げられたと思う。課題は大きく三つあると思った。まず、睡眠不足が心身の健康に与える影響など医学的な問題、次に、今の社会で子どもたちが置かれている環境、教育に関する環境などの問題、そして、両親が共に働いていて、育児にかけられる時間がそれぞれの家庭によって違うといった問題である。二つ目、三つ目の課題はそれこそが社会課題と言えるテーマなので機会があれば取り上げて、まだまだ深掘りをしたほうがよいと思う。子どもとの電話のやりとりや寝かし

つけているところは、自分の子育ての経験を思い出し、見入ってしまった。恐らく視聴者も自身の経験と重ねながら共に考えるよい機会になったのでないか。

○ スタジオパートにおいて、又吉直樹さんの存在感がもっと出るとよかったと思う。こういう番組では健全、健康であることが大事であるという一つの価値観に流されがちだが、彼からはそうしたことへの異論を引き出してほしかった。

○　社会問題として睡眠の問題を考えると、今回は子どもの睡眠についてのみ考えていたが、睡眠負債の問題と今回の問題はどこか関連しているような気がする。ＮＨＫは睡眠負債について「あさイチ」などいろいろな番組で取り上げているが、子どもの問題もこの番組だけでなくさまざまな番組で取り上げてほしい。場合によっては社会構造まで切り込むような大型の番組にすると、社会的に意義のある番組になりうるのでないかと思う。科学的な視点ではデータの出し方が気になった。しっかりとしたデータを裏で持っているのであれば、気になる人が見られるように番組ホームページで提示すればよいのではないか。この番組でグラフを出さなかったのは正解だったと思う。

○　Ｅテレの教育番組は、子どもの問題に意欲的に取り組んでくれている。子育てを社会化することを一大テーマにしたことは今必要とされているところである。この種の問題ではすぐに「親が悪い、母親が悪い」となるが、２４時間保育もうまく取り上げてくれて、うれしく思った。Ｅテレでは「すくすく子育て」も子育て世代に評価が高いが、現状の３０分では扱いきれないテーマもあり、こうした拡大版で取り上げてくれたことを評価したい。また「すくすく子育て」は主に乳幼児を対象とした番組であり、一方で学童を扱う番組がまだ少ないのではないか。今後の取り組みにも期待したい。

（ＮＨＫ側）

指摘いただいた点は真摯(しんし)に受け止めたい。メッセージ性を強く持たせることを優先するか、データをしっかり示すことに重きを置くか、今後の番組作りにおいても頂いた意見はすごく参考になる。大人の睡眠時間が日本の場合はそもそも少ない。特に働く女性は世界で最も短いといわれている。。社会全体の問題としていろいろな番組で、この問題を多角的に伝えていきたい。

現在、日本では、食べる、寝る、遊ぶ、ことすらままなら

ない子どもたちが増えている。「くうねるあそぶ　こども応援宣言」というプロジェクトは、子育ての問題を家庭だけでなく社会全体で考えていこうという理念から部局横断で立ち上げたものであり、頂いたご意見を参考にしながら、今後もさまざまな番組で継続して伝えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　この２か月はよい番組が多かった。平和を考える時期だったが、中でもよかったのは８月１３日(日)のＮＨＫスペシャル「７３１部隊の真実～エリート医学者と人体実験～」、８月１５日(火)のＮＨＫスペシャル「戦慄の記録　インパール」、９月１０日(日)のＮＨＫスペシャル「スクープドキュメント　沖縄と核」である。ＮＨＫの取材力、調査力が生かされたすばらしい番組で、歴史にも残るようなものだった。視聴者が知りたい情報がきちんと伝えられていたと思う。

○　８月１３日(日)のＮＨＫスペシャル「７３１部隊の真実～エリート医学者と人体実験～」を見た。軍事裁判の音声記録の発掘など、ＮＨＫの取材力が発揮されていた。京都大学や東京大学のエリート医学者が７３１部隊に協力し、細菌兵器を作るための人体実験をしていたことなど、今まで知られていなかった事実を伝えていたのは意義があったと思う。科学者が自分の研究をどのように生かすのか、改めて考えさせられた。元少年隊員の「戦争とは絶対にするものでない」という言葉を教訓として現在の私たちの生活に生かすことを教えてくれたよい番組だと思った。

○　８月は太平洋戦争の実相に迫り、平和の尊さを改めて考えさせられるよい番組がドラマも含め、多かった。ＮＨＫスペシャル「７３１部隊の真実～エリート医学者と人体実験～」を見た。証拠隠滅や関係者へのかん口令が徹底された中、実態について現時点でもいろいろな論議が残るテーマについて、今回はＮＨＫの丹念な取材を通し、戦争の持つ狂気をしっかりと伝えていた。大学と軍事研究について議論されている日本学術会議の様子も取り上げられ、今の時代におけるタイムリー性も感じられた。

○　ＮＨＫスペシャル「７３１部隊の真実～エリート医学者と人体実験～」は裁判資料などいろいろなものが紹介され、興味深く見たが最後に防衛省の研究資金について触れたことには違和感を覚えた。この番組は人道に反して大量破壊兵器を作るために医学者が人体実験をしたことに焦点を当てた番組だったのであって、７３１部

隊の人体実験の話と現代の医学研究の話を安易に結びつけるような印象を与える演出には疑問を感じた。今やっている防衛省の研究は大量破壊兵器と何の関係もないはずである。あくまでも人道に反する行為の当事者となった医学者たちの問題にきちんと焦点を当てるべきだった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「７３１部隊の真実～エリート医学者と人体実験～」では、最後に学術会議について触れたが、その点について私たちも議論した。ＮＨＫの論理でつないだわけではなく、今年の学術会議の中で大学と軍事研究のあり方について議論が起きており、その中で７３１部隊の話が取り上げられた事実に基づいてのことだ。

○　ＮＨＫスペシャル「７３１部隊の真実～エリート医学者と人体実験～」で学術会議の議論が紹介されたが、学術会議の中身がそういうところに触れているので、ＮＨＫが意図的に過去に行われた人体実験と現代の医学研究の問題を結び付けているとは思わなかった。運営費交付金が年々減らされている中で、日本の科学技術立国を担う科学者、特に大学の先生方は苦境にある。その一方で防衛省の研究費は増額を重ねていると聞く。各大学、研究者集団は苦渋の選択を迫られている状況である。７３１とは切り離し、日本の研究者の置かれている現状についてもどこかで取り上げていただきたい。

○　８月の「ＮＨＫスペシャル」は中身の濃い番組が多くてよかった。

８月６日(日)のＮＨＫスペシャル「原爆死～ヒロシマ７２年目の真実～」を見た。５５万人以上のビッグデータを手がかりにし、被爆者の一人一人の記録を追った意義深い番組だった。焼死、圧焼死、やけどなど原爆による直接の原因だけでなく、放射性物質を含んだほこりが口に入ったことによる内部被ばくも死因であるとはっきりと伝えていた。今の福島の原発問題もあるので、国が死因として明確に認めていないこともきちんと紹介されていたのはよかった。一人一人の命が無残に奪われたことをこのままにしておくのでなく、死因を明確にすることで尊い命の重さを改めて伝えていた。

○　ＮＨＫスペシャル「７３１部隊の真実～エリート医学者と人体実験～」、ＮＨＫスペシャル「戦慄の記録　インパール」は毎月再放送をしてもいいくらい多くの人に見てもらいたい番組だった。

○　ＮＨＫスペシャル「戦慄の記録　インパール」は、軍の人間関係を過度に重視する情緒主義、強烈な個人の突出を許容するシステムの問題、相手戦力の過小評価、補給、情報の軽視という軍の体質を指摘しており、映像の力で説得力を持って伝えていた。戦後においても自らをある意味で正当化し、責任をも転嫁する軍上層部の姿とともに、生き残った元日本兵からの絞り出すような発言の中には事実の重みがあり、今の私たちに問いかける「戦慄の記録」そのものであると強く感じた。

（ＮＨＫ側）

戦後７０年を過ぎ、証言者の方が高齢になり、証言を残す最後の機会となることもある。毎年繰り返し同じような内容で放送することも可能だが、新たな資料を発掘し、新しい発見を重ねることで視聴者に今それを見る意味が伝わるようにしていきたい。

○　戦後７２年ということで戦争の悲惨さを語り継ぐこと、伝えることの大切さを改めて感じる。今後とも戦争と平和を考える番組を放送し続けてほしい。

○　８月２０日(日)のＮＨＫスペシャル「戦後ゼロ年　東京ブラックホール１９４５－１９４６」を見た。映像がおもしろく、工夫をされていた。メッセージ性の強い番組がある一方で、視覚的にもひきつけられて説得力がある番組も放送されるのはよいことだ。

○　８月、９月の一連の「ＮＨＫスペシャル」について、戦争と平和に関する番組をたくさん放送してもらった点には感謝している。なかなか取り上げるのが難しい沖縄と核の問題など、多くの新しい事実に触れることができた。

○　８月９日(水)のＮＨＫスペシャル　シリーズ東日本大震災「帰還した町で～原発事故７年目の闘い～」を見た。避難指示が解除されたものの、家屋や田畑は野生動物に荒らされ、室内で放射性物質が検出されるなど、浪江町の住民が不安に思っている事実をしっかり伝えていた。

○　８月２０日(日)の目撃！にっぽん「お父さん　運転続けますか～高齢ドライバーと家族の選択～」は身につまされる思いだった。自分が老いたときに運転免許をいつ返納するのか、自分の親にいつ運転免許を返納させるのか、シミュレーションすることで我が事として捉えることができた。高齢ドライバーの話題は聞いていたが、本人のプライドや生きがい、思い出、気力の低下などとも関連する問題であること

が学べた。事故を起こしてほしくないという家族の愛情が前提になっているからこそ、本当に難しい問題だと思った。

○　８月２４日(木)のＳＯＮＧＳスペシャル「桑田佳祐」(総合 後 10:00～10:50)を見た。私の周りでは連続テレビ小説「ひよっこ」がとても人気で盛り上がっており、終わるのが悲しいという声をよく聞く。番組には、ドラマのメンバーがそれぞれの役で出演しており、ＮＨＫ全体で盛り上げている感じがして、感動した。桑田佳祐さんが主題歌「若い広場」を歌う場面では心が和んだ。

○　９月８日(金)の金曜イチから「なぜだまされる…！？“振り込め詐欺”で見えてきた“メカニズム”」では、人がついついだまされてしまう心理が取り上げられていた。首都圏ネットワーク「ストップ詐欺被害！私はだまされない」では、すでに700回も放送されているが、だます手口はどんどん変化するので、今後もこの問題を取り上げ丁寧な注意喚起をしてほしい。

○　８月２６日(土)のＥＴＶ特集　アンコール「ひとのま　ある一軒家に集う人々」を見た。番組では悩みを抱えコミュニティハウスに集まる人たちと受け入れてきた世話人の姿が描かれていた。“支援してあげる”のではなく、“そばで一緒に考える”姿勢でないと解決できない問題があることが改めてよくわかった。

○　９月２日(土)のＥＴＶ特集「青春は戦争の消耗品ではない　映画作家　大林宣彦の遺言」は、ある意味で本人の強いメッセージが感じられた。おそらく最後になるであろう映画制作に取り組む大林監督に時間をかけて密着し、監督の考えていること、世界観、メッセージを丁寧に、美しい風景とともに拾い上げており、記憶に残る番組だった。戦争そのものをメインテーマとして扱った番組ではないが、平和を願うメッセージがよく伝わってきて感動した。

○　９月２日(土)のＴＶシンポジウム「協同組合の可能性～相互扶助の精神に学ぶ～」を見た。私も常々、協同組合のあり方などについてもう一度考える必要があると思っていたので、時宜を得た番組であった。

○　８月のＮＨＫの戦争と平和を考える番組を見て、感銘を受けた。戦争を知る人がどんどん減る中で資料を発掘し、緻密な取材、映像構成で番組を制作していることにはいつも驚いている。その一つに８月１３日(日)のＢＳ１スペシャル「なぜ日本は焼き尽くされたのか～米空軍幹部が語った“深層”～」(ＢＳ１　後 10:00～10:50、11:00～11:49)がある。印象的だったのは化学兵器を日本が使った場合、日本の都

市を化学兵器で総攻撃するプランを作っていたことである。大量破壊兵器を使うとどんなことが起こりうるのか、学ぶことが多い番組だった。

○　８月２６日(土)に再放送されたＢＳ１スペシャル「戦火のマエストロ・近衛秀麿～ユダヤ人の命を救った音楽家～」(総合 前 2:05～3:44)を見た。一般的には杉原千畝さんが有名だが、実は水面下でユダヤ人を助けていた人がもう一人いたということや、その人が“ＮＨＫ交響楽団”の前身である“新交響楽団”を設立したことは感慨深かった。

○　９月１１日(月)に再放送された、奇跡のレッスン「一瞬で“考え”先を読め！卓球(前編)」を見たが、大変勉強になった。コーチの指導を受けた子どもたちは技術もさることながら、精神的に成長するところがよく伝えられていたように思う。これからのスポーツ選手の育成、子どもの成長を考えるのによい示唆を与えてくれる番組だと思った。「失敗を恐れずにいろいろなことに挑戦せよ」「楽しむことが必要である」「もっと考えよ」というコーチのいろいろな発言が印象的で、スポーツに携わる者だけでなく、経営的な立場の人にとってもよいアドバイスを与えてくれる番組だと思った。

○　９月６日(水)の「久石譲　ｉｎ　パリ“風の谷のナウシカ”から“風立ちぬ”まで宮崎駿監督作品演奏会」(ＢＳプレミアム 後 9:00～10:30)を見た。パリの方たちが日本語の歌を上手に歌っているシーンもあった。アニメ作品を通して、国を超えた交流があるのはすごくすてきだと思った。

○　「女王ヴィクトリア　愛に生きる」を見ている。有名なヴィクトリア女王の戴冠式の絵があるが、その絵にそっくりな女優が主人公を演じていたので、チャンネルを合わせたときに本人かと思った。われわれが持っているイメージと同じような俳優を使うことで、さらにイメージが膨らんだ。「大河ドラマ」などでもごく一般の人が抱いているイメージに近い人を起用することも１つの選択肢として可能性があるのではないかと感じた。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年７月ＮＨＫ中央放送番組審議会

７月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、３１日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２９年度第１四半期・４～６月）について説明があった。続いて、歴史×健康バラエティ　偉人たちの健康診断「歴史に学ぶ健康法」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　大日向雅美（恵泉女学園大学学長）
副委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
鎌田　　實（諏訪中央病院名誉院長）
佐野真理子（主婦連合会参与）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
田中　隆之（読売新聞東京本社執行役員論説委員長）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)創業者）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
仲道　郁代（ピアニスト）
西原浩一郎（金属労協顧問）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース（株）執行役員メディア事業開発担当）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２９年度第１四半期・４～６月）について＞

○　評価の質的指標を１０段階で評価している中で、いくつかの指標で 0.1 から 0.2 ポイントの増減がみられたとの話があった。その数字を大きいとみるのか、あまり変わっていないと考えるのか。変動があった項目に対しては、なぜそうなったのか分析されていると思うが、それがどのように生かされるのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

　この調査は毎回異なる人を対象に行っているが、結果にそれほど大きな変動が見られない。大きな変動がない中での 0.2 ポイントというのは、何らかの影響があったと受け止めるようにしている。説明したのはメディアごとの調査結果だが、番組ごとにも情報を共有し、制作現場と編成で意見交換をしながら、次の番組制作に生かしている。

○　それほど大きな変動はないとのことだが、第１四半期は国内的に大きな災害に見舞われ、政治的な課題や国際的にも大きな問題があった。そんな中、総合テレビで「６．生活に役立つ情報やヒントが得られる」の指標が 0.2 ポイント下がったということは、少し注目したほうがよいかもしれない。「４．社会的な課題について考えさせられる」の指標は、数値としては誤差かもしれないが、第１四半期に大きな情勢があった割には増えていない。また、ニュース番組などゴールデンタイムの数値が他局に比べると伸び悩んでいる。公平・公正を保ちながら時宜にかなったタイムリーな情報を流すことに苦慮されていることと思うが、いずれにしても、総合テレビのこの２つの指標で、数値が若干とはいえ上がらなかったことについては検討し、今後の番組作りに生かして視聴者の期待に応えてほしい。

（ＮＨＫ側）

　私たちもなぜこのような結果になったのか、番組ごとにいろいろと検討をしている。第２四半期以降の番組作りに生かしたい。

＜歴史×健康バラエティ　偉人たちの健康診断「歴史に学ぶ健康法」
（ＢＳプレミアム　６月２８日(水)放送）について＞

○　ＮＨＫにはさまざまな健康番組があり、それぞれよい味を出していると思う。その中でも、加藤清正のような歴史に名を残す偉人たちの人生から現代にも役立つ健康の極意を探るという、今回の番組の切り口はうまいと思った。弓を射る動作をス

ロートレーニングとして紹介する中で、ゆっくりとした運動がどう効果的であるのかを筋電計で示したり、清正が好んで食べたという馬肉が健康によいことを牛肉・豚肉の成分量と比較して示すなど、わかりやすくてよかった。新選組の主治医・松本良順の話題もおもしろかった。ただ、病人が多かった新選組を、豚肉や鶏の卵などたんぱく質の摂取によって立て直したというエピソードは、現代の問題にもっと引き寄せればよりおもしろくなったのではないか。現代の高齢者にも、たんぱく質不足に起因した傾向が見られる。幕末よりもたんぱく質を取りやすい状況にあるにも関わらず、再び同じ問題が起きていることに言及すれば、より示唆に富んだ内容になったと思う。スタジオゲストの３人はそれぞれよい味を出していたが、話を掘り下げる発言ができる人がいれば、一層学ぶことが多かったと思う。ぜひ今後にも期待したい。

○　健康への関心が高まる中、偉人たちの健康について、歴史に沿いながら、医学的な根拠のある推測を交えて紹介していておもしろかった。健康維持に何が大切なのか、時代を超えた共通点があることが興味深かった。当時は解明できなかった病気の原因を現代の医学で推測し、解明しようとしている点が特によかった。ただ、海水浴の効果を提唱した松本良順のエピソードで、タラソテラピーに言及していたことはよかったが、そこでエステサロンの施術のような写真が出たのが気になった。海水浴の効果とエステサロンの施術効果にどんな関係があるのかがわかりにくく違和感を覚えた。

○　とても丁寧に作られていて勉強になる番組でよかったのだが、引き込まれて画面から目を離せなくなるような集中力は起きず、一生懸命見たという感じだ。スタジオが既視感のある演出で、それに飽きてしまっているのだと思う。よくあるパターンを踏襲するのではなく、番組で何を訴えたいのかを踏まえた演出を検討したほうがよいと思った。

（ＮＨＫ側）

歴史番組なのか、健康番組なのかということに難しさを感じている。歴史のおもしろいところに踏み込むと何となく健康がおざなりになり、健康を解明しようとするとただの健康番組になる。スタジオではお笑い的な要素もある。多くの方に見てもらえるような最大公約数を集めて制作したことがご指摘の要因になっている部分はあるかと思う。演出については今後も検討を重ねていきたい。

○　タイトルや冒頭の雰囲気から、偉人たちの健康法を紹介する番組と思って見ていたが違った。さまざまな記録から歴史上の人物の死因を推測していておもしろく、また紹介された健康法も万人に興味深い内容で、ＮＨＫらしいよい番組だと思った。ドラマ並みに丁寧に描かれたシーンもあって見入ってしまった。加藤清正の死因のところでストレスに言及されたが、ストレスと言われてしまうと解決した気がせずすっきりしない。ゲストがその気持ちを代弁してくれたことも、そこからカラオケという現代の解消法の話につながったこともよかった。逆にカラオケがなかった昔の人がどのようにストレス解消をしていたのか、何もない時代のストレス解消法が現代にも役立つのではないか、などとワクワクしながら見ることができた。続編も楽しみだ。

○　歴史と健康は中高年にとって関心の高いテーマであり、２つのキラーコンテンツを併せ持つ番組で興味深く見た。この試みはよかったと思う。欲を言えば、加藤清正の話と新選組の話は全く関連性がなく、時代も 200 年以上違うので、番組でひとくくりに紹介するのは若干無理があり、同じ時代の人たちの話を２つ並べるか、時間を切って３０分で２つに分けて放送したほうがよかったと思う。

○　番組内容を深く読み解こうなどとはせずに気軽に楽しめたが、加藤清正の死の謎解きの話が健康法にどう関連するのか疑問に思った。話としては楽しめたが、途中で話がそれているように感じ、内容時間も長く感じた。スタジオにタレントが数人いる形式の教養型バラエティは既視感があるので、違う演出があってもよいと思う。

○　健康というテーマを、歴史や生活の中のさまざまな関心と結びつけて番組が作られており、健康法だけを学ぶよりもはるかにいろいろな興味が喚起されて、とてもおもしろかった。特に音楽をうまく使った演出だと思った。細やかなカット割りと豊富な情報量によって非常に充実した内容だったが、パートやシーンに合わせてさまざまな音楽や効果音を駆使して演出することで、見やすさが増していたと思う。ただ、若者を意識しているからなのか、細かいカット割りが若干目まぐるしく感じたので、もっと落ち着いた演出にしてもよいかもしれない。

○　もっと歴史的な色合いを強めて制作したほうがおもしろいのでないかと思った。例えば腰痛と言ってもその原因はさまざまで、多くの人に役立つ知識でも、それが当てはまらない少数派もいるのではないか。健康番組を見ると、いつも少数派の人が見たらどうするのかと心配になるのだが、今回の番組にもそういう要素があったように思う。例えば、歩いて旅をしていた時代にはこういう健康問題があってこうして解消していた、というような、過去の事実を知識として提供するような、健康

という視点で歴史を見る内容にすれば、より興味深い番組になると思った。

○　視聴者の歴史への興味、健康への関心という意味では多くのニーズに応えていたと思う。中高年をターゲットに、ユニークな切り口と盛りだくさんの内容で楽しめる内容だった。加藤清正の死因の検証は、推理的な要素があっておもしろかった。食に関する科学的な検証や健康管理の最新情報などさまざまな角度からアプローチしており、ＮＨＫの取材力が番組に生かされていると感じた。専門家の分かりやすい解説もよかったと思う。スタジオゲストはコメント力があると思ったが、歴史や健康に造詣が深い人がいればもっと番組を盛り上げられたと思う。偉人だけに限定しなくてもよいと思うので、いろいろな角度から気楽に楽しめる番組として続けていただきたい。

○　健康バラエティでありながらも歴史的な観点もあって楽しめた。加藤清正は毒殺と言われているが、現在の医学的観点からストレスによるスキルス性胃がんだったのでないかという推理もスリルがあってよかった。一方で、後半の新選組の話は前半とは全く異なる内容で、そのギャップのせいか少し長く感じた。スタジオでのトークも前半に比べてややうまくいっていないような印象を受けた。また、海水浴とタラソテラピーの話があったが、海水浴がレジャーなのか医学的療法なのかがあいまいで分かりにくかったように思う。

○　歴史と健康という、必ず見るような人がいるジャンルを同時に扱っており、興味深く見た。歴史ものとしては、サイドストーリーに光を当てていておもしろかったと思う。一方で健康ものとしては、「健康診断」というタイトルからすると、後半で新選組の主治医の話になってテーマが多少散漫になった印象を受けた。それでも、当時わからなかったことを、現代の医学や科学の知識で解明できることがおもしろく、全体的に楽しく見ることができた。

○　医療番組では「総合診療医ドクターＧ」、歴史番組では「歴史秘話ヒストリア」というすばらしい番組があるが、２つのジャンルを足してもおもしろさが２倍になるわけでないので、番組制作は難しいと感じた。歴史と健康問題を同時に突き詰めてしまうと、歴史上の偉人がこんなミスをしたのはこの病気のせい、ということになりかねない難しさはあると思う。今同じ病気を患っている方がどう感じるかも考えると医療と歴史問題を厳密に突き詰めることは刺激が強く、今回のような柔らかめの演出の方が気楽に見られる番組としてよいと思った。

○　情報量が多くいろいろな内容が紹介されたので、番組の最後まで緊張感を持って

見続けるのが難しかった。もう少し見やすい演出を検討してほしい。

○　「歴女」をはじめ、歴史や健康には若い世代も興味を持っていると思う。幅広い世代で関心の高い２つのキラーコンテンツを抱き合わせたという点で秀逸な取り組みだった。

（ＮＨＫ側）

歴史上の人物の死因について書かれたものは限られているので、番組としては時には死因を解明し、時には現代の医療と結びつけ、時には病の歴史みたいなことも取り上げながらいろいろなテーマを扱うことになると思う。一つ一つがより多くの方に満足していただけるように今後も検討を重ねていきたい。

長く歴史番組に携わってきた経験から、歴史に関しては掘り下げていくポイントや資料の扱い方などが分かっているが、健康については、現代の生活と過去の生活で掘るべきところがたくさんある中で、どこをねらい掘り下げるのか試行錯誤を続けていく必要があると感じている。病気については現在患っている方もいるので十分気をつけながら、一方で大胆に今後の可能性を検討していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　７月２２日(土)のＮＨＫスペシャル「ＡＩに聞いてみた　どうすんのよ！？ニッポン」（総合 後 7:30～8:43、9:00～9:49）を見た。社会問題について議論する従来の番組は、どうしてもよくあるテーマ設定で、政治、行政に解を求めるような内容になりがちだったと思う。今回の番組では、ＡＩを使った新鮮なアプローチでそうした図式から脱却したいという意図を強く感じ、楽しく拝見した。一方で、いろいろな反響があったのではないかと思うが、放送後に番組をどう評価しているのか伺いたい。

（ＮＨＫ側）

日本が抱える課題はいろいろなことが相関しているので、今までのようにある領域ごとに議論しても解決は難しいと考

えている。そうした従来の議論の枠組みを外し、もっと大きな視点で諸問題に光を当てたいと思い、今回の番組を企画した。ＮＨＫが独自に作り上げたＡＩにさまざまなデータを取り込み、相関関係を描き出したが、番組ではその中でも意外なものに着目した。とっぴとも言える提言をあえてそ上に載せ、その関係性を読み解くことで新たな枠組みの議論ができるのでないかというトライアルだった。そのねらいを理解していただけたとすれば番組はある程度成功したと考えている。今後さらに内容を深め、従来とは違った角度から日本の課題を考える場を提供したい。

○　ＮＨＫスペシャル「ＡＩに聞いてみた　どうすんのよ！？ニッポン」は、ビッグデータを使うことでこれまでとは全く違う、想像を超えた提言が出てきて興味深かった。最初の提言「健康になりたければ病院を減らせ」は、“病床数”を減らして健康になった事例として夕張市のことも紹介しており、提言としても“病床数”という正確な言葉を使うべきだったと思う。この提言については、バナナの売り上げのデータが相関していることが何度も話題に上っており、夕張市の事例でもバナナが売れることに関心が向いてしまっていたように思う。しかし番組では伝えられていなかったが、夕張市の事例の背後には、医療費を減らして健康になるという哲学を持って地域医療に臨んだ１人の医師の存在がある。データだけを見て、病床数を減らせば健康になれると言ったり、バナナが売れていることを強調するのではなく、そこには哲学が必要だとくぎを刺せる人が必要で、視聴者が誤解しないように伝えることが大切だと思う。おもしろい切り口なので今後にも期待しているが、その際は、ＡＩがどう人間の役に立つのか、もう少し見えてくるような読み解き方、見せ方をしてもらいたい。

○　ＮＨＫスペシャル「ＡＩに聞いてみた　どうすんのよ！？ニッポン」はとてもおもしろく、挑戦的な番組だったと思う。ＡＩが解析から導き出した提言は私たちの理解を超えたものが５つ示され、かなり刺激的な内容だった。番組では説得力のある解釈、納得できる議論ばかりでなく、理解に苦しむ解釈や説明もあった。だからこそ視聴者みずからが日本が直面する課題について考えることで番組に参加でき、その点にこの番組の意義があると思う。社会的問題への理解を深め、解決への道筋を探ることに対して、どれだけ視聴者が参加できるような形で番組を進めていくのかは大きな課題として検討してもらいたい。また、これまで住宅政策と住宅補助は、社会保障政策としてあまり重視されてこなかった感があるが、ＡＩの解析によって今回の番組でスポットが当てられたことにも番組の可能性を感じた。一方で、因果

関係や理由付けは人間が考えなければいけないということが番組途中で説明されていたが、ＡＩについての基本的なことは冒頭で分かりやすく説明するとより理解が深まったと思う。また、スタジオに４０代１人暮らしの方を集めていたが、もっと意見を聞くなど改善の余地があるのではないか。次回以降テーマを絞り議論を深掘りしていく際に、視聴者とＮＨＫとが双方向で対話ができるような番組づくりを心がけてほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「ＡＩに聞いてみた　どうすんのよ！？ニッポン」を見た。ＡＩによるデータ解析によって、人間では考えられないような提言が示されていたが、解析結果の因果関係を考えるのは私たちだという一番大事なことをもっと強調したほうがよかった。今後もＡＩにデータを蓄積していくと思うが、今回示されたものとこの先提示される内容がどのように変遷していくかにも興味があるので、そうした視点にも期待したい。また、ＡＩについての基本的な情報やどのようなデータを使っているのか、今後どうしていくのかなど、番組の中ですべてを示すことは難しいと思うが、インターネットの活用などにより補足していただけるとありがたい。

○　ＮＨＫスペシャル「ＡＩに聞いてみた　どうすんのよ！？ニッポン」は挑戦的な取り組みだった。ただ、ＡＩによる解析結果自体が相関関係であることはわかっていても、番組を見ていて相関関係か因果関係かが分かりにくいと思った。ＡＩが示しているのは結果だけで、なぜそうなるのかは示していない。一方で社会政策は説明責任を求められるため、ＡＩでは答えを出すことはできないと思っている。相関関係か因果関係かが分かりにくい中でＡＩの方がすごいといった受け止め方をされてしまうと、ＡＩが出した結果に答えを委ねるようになり、よくない影響があるのではないか懸念してしまう。続編があるのなら、ＡＩを使って何を目指しているのかはっきり示してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

番組としては、ＡＩが示す意外な相関関係をどう読み解くのかがすべてなので、今後は、示された数値をどう読み解き、社会のネットワークをどう解き明かすのかに力を入れたい。ご指摘いただいたＡＩの基本的説明については、最初にあまり難しい説明をしても分かりづらいと考え、相関関係と因果関係についての説明をコンパクトにしたためにいろいろな疑問が残ってしまったと思う。また、ＡＩには３０年分のデータを入れてあるのだが、専門家が実際にどういうデータを入れたのかという関心は高いと思う。そうしたニーズにどう応

えるか、ホームページなども視野に入れて検討していきたい。視聴者参加については、課題解決への道筋を議論する中で多くの視聴者に参加していただく場を提供することがこの番組の目的の１つである。今回は生放送でなかったためにできなかったが、今後は視聴者参加や双方向の取り組みも検討したい。ＡＩはツールでしかないので、データをどう読み解き、役立てるのかは私たちに託されている。ご指摘いただいた懸念については、ＡＩに答えを委ねるのでなく、あくまでもツールとして使いこなし、議論の場を活発にするために活用していく考えだ。

○　７月２３日(日)、３０日(日)に２週連続で放送した、ＮＨＫスペシャル「列島誕生　ジオ・ジャパン」は、数千万年から数百万年前の日本列島の生い立ちを４つのキーワードでうまく紹介しており、すごくよい番組だと思った。一方で、アナウンサーにだじゃれを言わせるなど、スタジオの演出には既視感があったので、もう少し工夫していただきたい。

○　６月２１日(水)の「ニュースウオッチ９」は、藤井聡太四段が２８連勝をしたニュースをかなり長時間取り上げており、その分他の報道・解説に割り当てる時間が減っていたと思う。この日以外の放送でも、最近１つ１つのニュースの掘り下げが足りないのではないかと感じている。また、前川喜平前文部科学省事務次官がＮＨＫのインタビューを受けたが放送されないままだと言っている報道も目にした。視聴者にとって必要な情報はタイミングを間違わずに放送してもらいたい。気概を持ってよりよいニュース番組を目指してほしい。

○　６月２６日(月)の「ニュースウオッチ９」は、藤井聡太四段が２９連勝をしたニュースを伝えていたが、時間が長すぎたのでないか。その日は仕事に関連して気になるトピックがあったため、どのように報道されるか構えて見ていたが、藤井四段のニュースばかりが時間をかけて取り上げられ残念だった。

○　「ニュースウオッチ９」を毎日見ている。キャスターの２人が若いこともあるのだろうが、ＶＴＲやリポーターが伝えていることの繰り返しをコメントしていることが多くて深みに欠ける印象がある。

○　「ニュースウオッチ９」の両キャスターは「ニュースチェック１１」を担当しているときは軽いタッチがよかったが、「ニュースウオッチ９」ではより時間帯に

合った役割や演出を期待したい。６月１９日(月)に元国民的アイドルグループのメンバーについてのニュースがあったが、いろいろな事件がある中でかなり時間をかけて取り上げたことに違和感を覚えた。同じ意見を周りからも聞いている。

○　ここ数か月の報道を見ると、本質的な部分と興味本位の部分が混在しているような印象を受ける。今何が起こっているのか、興味本位で伝えるのではなく、一歩も二歩も踏み込んで本質に迫ってもらいたい。そこに公共放送としての役割があると強く思っている。

（ＮＨＫ側）

「ニュースウオッチ９」は、この４月から「ニュース一新」というテーマを掲げ、キャスターを一新した。番組内容も視聴者との距離感をより縮め、若い人たちにも分かりやすく伝える報道にできないかということでスタートした段階だ。解説に力を入れたいと考えているので、解説がもの足りないといったご指摘については、今後さらに強化するよう努めていきたい。

加計学園をめぐる問題で前川氏の発言については２回の記者会見があり、「ＮＨＫニュース７」と「ニュースウオッチ９」でもそれぞれ詳しく掘り下げて伝えた。独自の情報なども含め、幅広い観点から多角的に伝えており、あくまでも報道機関として自主的な判断で放送していることをご理解いただきたい。

東京都議会議員選挙の結果をはじめ、国内情勢でも大きな動きが出てきている。そうした問題も含めてより掘り下げた報道に取り組み、公共放送としての役割を果たしたい。

○　７月２０日(木)のクローズアップ現代＋「知られざる“虐待入院”～全国調査・子どもたちがなぜ～」を見た。虐待から逃げ、病院で治療を受け、元気になっても行くところがない、病院にいなければならない子どもたちがたくさんいることを初めて知り、本当に考えさせられる番組だった。小児科医のグループが初めて全国の医療機関を調査した結果をＮＨＫが番組として取り上げ、深刻な事実を掘り起こし、解決へ向けて視聴者も共に考えることをうながしているようだった。現状を社会的課題ととらえ、より多くの方に知ってもらえるように大々的に報道していただきたい。

○　７月２４日(月)のあさイチ「シリーズ発達障害　“ほかの子と違う？”子育ての悩み」を見た。５月２１日(日)に放送された、ＮＨＫスペシャル「発達障害～解明される未知の世界～」に続いて、実際に発達障害のある子どもを育てている家族の姿をリアルに紹介しており、とても感動した。同じ母親としてすごい覚悟だったと思う。障害の有無にかかわらず、子育てに向き合って悩んでいる母親には胸を打つ内容で、朝から感動した。自分自身の子育てについても見つめ直させるような、よい番組だった。「あさイチ」で放送されたことも世の中のお母さんへのエールになったと思う。コメントもよかったし、番組ホームページでは、悩んでいる母親に向けたペアレント・メンターの紹介もされており、視聴者へのケアが行き届いていてすばらしいと思った。

○　７月８日（土）に最終回が放送された土曜時代ドラマ「みをつくし料理帖」は、主演の黒木華さんをはじめとしたキャスティングと演出、ともにすばらしかった。

○　「ゲームシェイカーズ」という海外ドラマが始まったが、この時間帯の番組は毎回おもしろく、子どもと一緒に楽しく見ている。

○　７月２２日(土)のＥＴＶ特集「亜由未が教えてくれたこと」を見た。５月９日(火)のハートネットＴＶ「亜由未が教えてくれたこと」も見たが、相模原の障害者殺傷事件をきっかけにＮＨＫのディレクターが障害がある自分の家族を撮影しており、それぞれの自然な姿が出ていてよかったと思う。相模原の事件をどう考えるか、社会に課題としてどう残すのかも大きなテーマだと思う。こうした番組も含めて、相模原の事件を忘れないようにする番組を今後も作っていただきたい。

○　７月３０日(日)のバリバラ「相模原障害者殺傷事件から１年」では、相模原の事件を取り上げていた。あの事件はこれからの社会を考えるときに、障害者を分け隔てて考えていくのか、それとも包摂し共生していくのか、重要な問題を投げかけていると思う。その中で、事件に関連して障害のある方の声をきちんと伝えており、すばらしい取り組みだったと思う。制度や障害者施設を取り巻く状況に詳しい憲法学者と相談支援専門員の２人が出演していたのも説得力があってよかった。

○　相模原の障害者殺傷事件の番組について一言述べたい。これまで放送されたＮＨＫの関連番組はほとんどすべて見たと思う。これほどの時間を割いて放送したことに大変感謝しているとともに、全体を通して、あえて核心の問題を避けていると感じた。それは最重度で行動障害のある人たちの生活とそれにかかわる職員の現実である。手を尽くして支援しても笑顔もなく、自傷する人の世話を毎日していると職

員たちは無力感に襲われ、心が折れそうになる。それぐらいに大変な仕事だ。昨年１２月７日(水)に放送されたハートネットＴＶ　シリーズ相模原障害者施設殺傷事件　第２回「言葉はなくとも－重度知的障害のある人たち－」では児童入所施設の実態を映していたが、その後はどの番組も避けていたと感じている。最重度の障害者を視聴者が見たときに障害者への肯定的な感情でなく、哀れみになるリスクがあるからではないかと思う。その中で、７月２５日(火)のクローズアップ現代＋「シリーズ障害者殺傷事件の真実　被告の手紙・遺族の声」は植松被告にきちんと取材しており、また、７月２２日(土)のＥＴＶ特集「亜由未が教えてくれたこと」も現実をよく映していて、特に評価できる番組だったと思う。今後も何らかの形で最重度の障害者の助けになるような番組を期待したい。ただし、相当じっくり丁寧に制作しないと障害者への理解が深まらず逆効果になる可能性もある。ただ見せるのではなく、見せ方にも配慮しながら、引き続き多角的にこの問題を取り上げていただきたい。

○　７月２７日(木)のフランケンシュタインの誘惑　科学史闇の事件簿「強制終了人工知能を予言した男」で、イギリスの天才数学者アラン・チューリングが取り上げられた。人工知能（ＡＩ）を予言したことで、最近再評価されている人物であるが、紆余曲折があり長年評価されてこなかった。その人物の業績や脚光を浴びている部分を手厚く紹介していて感心した。

○　７月２９日(土)の北朝鮮のＩＣＢＭとされるミサイル発射のニュースでは、ミサイルと見られる物体が落下する光景がすぐに動画で紹介され、さらにアメリカの研究者からのコメントも伝えており、迅速な報道に感心した。

○　ヒアリが上陸し拡散している現状については、注意点などそれぞれの番組にふさわしい形で報道されており、重要かつ貴重な情報発信に感謝している。昆虫を触りたがる子を持つ母親に向けた注意点だけでなく、農業従事者など常に土に触れている人たちに向けた対処法も紹介すると、さらに充実した報道になると思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年６月ＮＨＫ中央放送番組審議会

６月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ＮＨＫスペシャル「発達障害～解明される未知の世界～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　大日向雅美（恵泉女学園大学学長）
副委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター）
有森　裕子（元マラソンランナー）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
佐野真理子（主婦連合会参与）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
西原浩一郎（金属労協顧問）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）

（主な発言）

＜ＮＨＫスペシャル「発達障害～解明される未知の世界～」
（総合　５月２１日（日）放送）について＞

○　この問題は身近に感じたことがなく、新鮮に学ぶことができた。発達障害の当事者にとっては、どなられているように聞こえるなど感覚的なことも分かりやすく伝えており、なるほどと思った。一方で、画一的に理解させるのではなく、「五感に起因する例もあればそうでない例もある」とさまざまなケースがあることを伝えていた点も評価できる。二次障害や、うつにつながる可能性もあるが、信頼できる人の存在があればそれを回避できるかもしれないという、対処の方法も含めて提案していた。番組に勇気をもって出演された当事者の方々に感謝を申し上げたい。司会

を務めた「あさイチ」コンビの井ノ原快彦さんと有働由美子アナウンサーの実力もあった。生放送で難しいテーマであっても丁寧に扱うことができるだろうという、二人に対するＮＨＫの信頼が伝わってきた。「発達障害プロジェクト」という組織横断的な取り組みに挑戦するＮＨＫに敬意を表したい。

○　当事者の感覚がどのようなものなのかを映像で見せ、分析的に落ち着いて伝えていた。日ごろそれほど理解していなかった発達障害を特別なものと感じることなく理解できたのが大変よかった。「小中学生の１５人に１人が発達障害の可能性がある」というデータも出していたが、番組で紹介した人たち以外のケース、例えばもっと普通の人に合わせて暮らしている人たちの実情なども分かれば、私たちもいっそう思いやりを持つことができるのではないかと感じた。

○　発達障害を当事者の立場から伝えるという、これまでになかった見方で、とてもよい番組だった。障害のある方々の思いを重視して構成しており、自らを発達障害と公表した方々が登場し、発達障害の特徴を分かりやすく伝えていた。印象的だったのが「顔を見ながら話をするのがつらい」ということばである。私たちは「目を見て話す」と言うが、彼らは「顔」ということばを使っており、違いを感じた。また「小中学生の１５人に１人が発達障害の可能性がある」というデータの根拠を示してほしかった。番組では発達障害に対し「生まれつき」ということばを使っていたが、胎児や幼児の脳が発達しているときに受けた農薬など後天的な影響を指摘している団体もあるので、本当に「生まれつき」と言い切ってよいのか気になった。二次障害については、治療の実態や必要性など、引き続き取材をしてもらいたい。ＮＨＫに「発達障害プロジェクト」ができたことはうれしく思う。これからの番組に期待したい。視聴者から寄せられた 6,700 の意見は、ホームページだけでなく番組内でもう少し紹介すれば、より身近に感じられたのではないか。その点は残念に思った。

（ＮＨＫ側）

「生まれつき」という表現については複数の専門家と相談し決めた。子育てのしかた、特に親のしつけが原因でそうなってしまうのでないかと、親にプレッシャーがかかるような誤解が多く、実はそうではないということを発信するためにそのような表現にした。二次障害の実態などについても、例えば「ハートネットＴＶ」のような当事者に寄り添った視点で作られる番組の中で取り上げられるとよいのではないかと思う。視聴者から寄せられた意見については、生放送でスタジ

オでの話が膨らんでしまった分、紹介できる数が少なくなってしまった。３日後の「あさイチ」で発達障害の特集をした際には、この「ＮＨＫスペシャル」に寄せていただいたメールとファクスの意見をいくつか紹介した。今後もプロジェクトの中で頂いた多くの声を大事にし、番組を作っていきたい。「小中学生の１５人に１人が発達障害の可能性がある」というのは、文部科学省が 2012 年に行った全国調査のデータを基にしている。今のところ最も信頼性が高いといわれており、今回の番組でも扱った。

○　イギリスの「クワイエット・アワー」の事例を紹介していたが、日本で同様の取り組みなどがないのか気になった。知的障害の方々に対してはいろいろな角度からの支援プログラムが行われているが、今回の番組においても、見た後にそういったところにアクセスできるような情報があれば、より実践的なものになると感じた。2020 年を契機とし、障害のある方々との共生社会を実現するには、身体障害者だけではなく、あらゆる障害者について理解する必要がある。そうした感覚を視聴者に持ってもらうという意味で、大変勉強になる番組だった。一方で、知的障害の方についても番組で扱ってほしかった。また、「小中学生の１５人に１人が発達障害の可能性」というデータについては、私も疑問に思った。昔は発達障害ということばはなかったので、いつの時代からどのように言われてきたのか、何をもって発達障害と言っているのかなどの掘り下げも欲しかった。

○　子どもだけでなくさまざまな年代の発達障害の人たちを幅広く取り上げたことが大きな特徴だったと思う。当事者たちはそれぞれのライフステージにおいて、周りの人たちの誤解、理解不足に起因するさまざまな批判や偏見、トラブルにさらされていた。ある面では重大なリスクにも直面し、悩み、懸命に生きている当事者のことを改めて思い知らされた。彼らを支える家族の苦労についても思い至った。生活場面や教育現場での再現映像は、視覚、聴覚などの感覚、認知の世界をうまく映像化していた。発達障害の現実を極めてクリアに示した初めての番組ではないかと思った。この番組は、多くの当事者たちの理解・協力を得て成り立っており、スタジオに出演した発達障害の当事者たちのやりとりによって、視聴者もいっそう現実感を持って受け止めることができたのでないかと思う。社会全体で考えるべきさまざまな課題がきちんと提起されており、社会的意義の高い番組だった。ＮＨＫは「発達障害プロジェクト」として、１年間積極的に発達障害に関する番組を放送していくということだ。視聴率が大きく上がるようなテーマではないと思うが、いかに社会の理解を広げていくのか、ＮＨＫ総体としての取り組みが問われている。引き続

き尽力してほしい。

○　発達障害の当事者の方の感覚を科学的に示したのがとてもよかったと思う。発達障害と診断され、学校になじめない子の親は、どう子どもをサポートすればよいのか、頭を悩ませると思う。発達障害について科学的にきちんと示すことで、そうした家族の精神的負担を和らげることができる面があると思った。番組の後半では、発達障害を抱えた大人についても取り上げていた。数字に強く、経理の仕事を見事にこなしている発達障害の人の姿と、「彼の得意と不得意をきちんと分かったうえで一緒に働くのが一番いい」と言う同僚のことばには励まされた。スタジオの当事者の人たちを見ても、理解してほしい、受け入れてほしいということばが全てなのだろうと思った。こうした番組によって発達障害への理解が深まり、社会全体がやさしくなっていけばよいと思う。スタジオの当事者たちはどこか悲しそうで、つらそうに映っていたが、普段は得意なことを生かしてこう生きている、というような前向きな姿が見られるともっとよかった。

○　発達障害についてよく知らないまま番組を見た。外見からは分からない障害のある方がこんなにも多くいることを伝え、またその人たちの感覚を映像化して見せるということに生放送で取り組んだことに感心した。最初から最後まで未消化に終わったのは、番組で紹介した視聴者の声にもあった、「どこまでを個性と呼び、どこまでを障害と呼ぶべきなのかわからない」という点だ。自閉スペクトラム症、注意力散漫、学習障害など、個々の現象そのものの存在については誰しも知っていると思うが、それを発達障害という名前で認識するようになったのはいつごろからなのか。それを障害と認定するにはどういう制度でどういう人たちが判断するのか。子どもの集中力を育てるためのしつけや教育は、意味があるのかないのか。有効な治療法はあるのか。そういった統計的、医学的な側面をもっと掘り下げてほしいと思った。一方で、障害、あるいは個性と呼ぼうが呼ぶまいが、普通ということばには何の意味もなく、人間が 100 人いれば 100 通りの普通があり、個々人が違うということを前提に社会を作ろうという番組のメッセージは、いついかなるときもメディアが発信し続けるべきテーマだと思う。その意味で大変有意義な番組だった。

○　科学的、認知的な観点から、発達障害といわれている方が実際に見ている・聞こえている世界を映像化したことで、とてもよく理解できた。生放送にしたのもよかったと思う。スタジオにいた当事者の皆さんの顔から、生出演にあたってとても緊張されていたことが伝わってきた。勇気ある決意をし、生放送のカメラの前に出てきたのだろう。それは 1 人でも多くの人に発達障害に向き合ってほしいという当事者の皆さんからのメッセージだと、強く受け止めた。個性と障害、病気との違い

をどう見極めるのかだが、一概には言えないだろう。ある環境ではそれほど問題にならなくても、ある環境では二次障害、うつにまでなってしまうこともある。今後はそういう実態があることを理解すると同時に、社会が当事者をどのように受け入れるかということも大事だと思う。大企業である程度の余裕があるところは人の配置など番組で紹介したような環境を作れるかもしれないが、そうでない企業や職場も多くあると思う。この番組は発達障害についての理解を促すという意味でとてもよかったが、今後は、そうした人たちをどう受け入れ、共存し、お互いを高める社会を作っていくのかについて、もっと掘り下げてもらえるとよいと思った。

○　番組を見て、何も知らなかったと思い知らされた。社会全体で受け止めるべき課題をつまびらかにし、共有しようという大きな意義のある番組であり、ＮＨＫの社会的役割を果たしていたと思う。誰かが取り組まないといけない課題を報道機関として問題提起し、よりよい社会を作るための一助となることはメディアの大きな使命の一つである。いろいろな観点から継続して取り組んでほしい。

○　意欲的な番組だった。こうしたテーマの番組で生放送は珍しく、難しい面もあると思う。司会の井ノ原さん、有働アナウンサーがもともと発達障害についてよく理解しており、またこの分野におけるＮＨＫの取材の蓄積があったからこそできたのだと思う。そうした蓄積がなく急にやろうと思ってもできなかっただろう。大事なポイントは、障害者とその親だけでなく、一般の人にどれだけ興味を持ってもらうかであり、そのためにはもうひとつ工夫がいるかもしれない。個性なのか、障害なのかということについては、社会が差別するから障害になると理解すれば、障害という概念は相対的なものだと言える。その意味で、社会がその特性に対し障壁を高くしているのならば、個性でなく障害として何らかの「支援」の対象にしないといけないだろう。そうしたことも今後の番組で掘り下げていってもらいたい。発達障害の人を理解するためだけではなく、発達障害を鏡にすることで、多数派と呼ばれる“普通の”社会はいったいどのようなコミュニケーションを前提に成り立っているのかが見えてくると思う。そうした視点があると、より皆のためになるのでないかと思う。6,700 件も寄せられたという視聴者からの意見を今後の番組にも生かしてもらいたい。

　そのほか「発達障害プロジェクト」に関する一連の番組では、５月２７日(土)のＥＴＶ特集「“いるんだよ”と伝えたい～横浜・特別支援学級の子どもたち～」もよかった。５月２８日(日)のバリバラ「ティーンズバリバラ～発達障害の悩み～」は中高生が８人出演していた。中高生が出演するのは珍しい。彼らの声をどう受け止めるかは大きな課題だと思う。いずれも意欲的な番組だった。

○　２５年ほど前、当時は自閉症と言われた小学生と接したことがある。親の育て方が原因と言われ、母親は苦しんでいた。そうした経験を振り返り、今の時代にこういう番組ができたことをうれしく、感慨深く見た。ＮＨＫならではの意義ある番組だった。そうであればこそ、委員からは今後への要望などの意見もあったが、どうか。

（ＮＨＫ側）

今回は発達障害に特化し、知的障害については触れなかった。今後どう取り上げるか、考えていきたい。どこまでが個性、どこまでが障害かという問いについては、スタッフの中でも議論になり、複数の専門家にかなり取材をした。アメリカや日本では自閉スペクトラム症の診断基準の一つに「生活に支障があること」という意味合いの項目がある。生活に支障がなければ障害と診断されない。周りがどれだけ理解し、支えてくれているか、その環境により診断も左右される。周りの理解が進めば、障害だという診断にならない人も数多くいると思う。それが、個性が障害にならない、ということになるかと思う。今後さまざまな番組を通し、周囲の人たちの理解を広げることで、個性が障害にならない社会になるように手助けができたらと考えている。

○　この番組は発達障害の方を理解するだけでなく、普通とは何かという、私たちが暮らす社会の前提そのものを洗い出すような大きくて重いテーマを抱えていると思う。「発達障害プロジェクト」も立ち上げたということで、今後もますます期待している。

＜放送番組一般について＞

○　５月２８日(日)のＮＨＫスペシャル「変貌するＰＫＯ　現場からの報告」を見た。南スーダンのＰＫＯに参加した陸上自衛隊の施設部隊帰国のタイミングをとらえたタイムリーな放送だったと思う。昨年７月の首都ジュバにおける政府軍と反政府勢力との武力衝突の際に、宿営地の隊員たちがいかに緊迫した危機的状況に直面したのかが、隊員の証言やスマートフォンの映像、現地での取材などにより、生々しく伝わってきた。ＮＨＫの取材力を発揮した優れた報道番組だったと思う。ＰＫＯに求められる役割が、従来の停戦監視、復興支援から、より積極的な武力行使を伴

う文民保護に大きく変貌してきたことを分かりやすく伝えていた。また各国がその問題にどう向き合っているのかについても分かりやすく伝えていたと思う。日本の南スーダンへのＰＫＯ派遣をめぐっては、現地情勢が深刻化する中、ＰＫＯ参加５原則との整合性が問われる状況にあったことは事実で、その間に防衛省の日報隠しという重要な問題も発覚した。番組では、オランダでは軍が積極的に情報開示をし、ＰＫＯのあり方について国民的な議論がなされていることを伝え、日本でも徹底的に議論する必要性があることを提示していた。そうであればこそ、国民への情報公開がいかに今の日本で問題になっているのかをもっと鮮明に伝え、問題点をより明らかにすべきだったのでないか。ジャーナリズムの観点からもう少し踏み込んでもよかったのでないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「変貌するＰＫＯ　現場からの報告」は、駆けつけ警護の任務が与えられた安全保障関連法の成立で関心が高まる中、継続的に取材してきたことをまとめた番組だ。防衛省は部隊の取材には応じられないということで、南スーダンの現状を伝えるために自衛隊員に直接取材を行った。ＰＫＯも含めた国際貢献のあり方について、幅広い議論を行うための前提となる事実をきちんと提示することに意味があると考えた。オランダの例も引き合いに出し、情報公開の大切さを提示したうえで南スーダンの現状をきちんと伝えることが、国民の判断材料になると考えた。委員からの指摘も踏まえ、今後どのように伝えていくか考えたい。

○　事実を淡々と伝えることも公共放送の役目だが、重要なポイントに関しては、ＮＨＫならではの踏み込んだ視点も示してもらえるとのことで、今後も期待したい。

○　６月４日(日)のＮＨＫスペシャル　私たちのこれから「＃子どもたちの未来」を見た。これまでもＮＨＫが熱心に取り上げてきた子どもの貧困問題についての番組だった。その対策の道を探る観点から、専門家、有識者とともにさまざまな立場の市民が参加し討論していた。印象的なキーワードもあり、感情論もあったが、本音の論議がされており、有意義な番組だったと思う。「私たちのこれから」は、毎回社会のあり方に関わる多様なテーマから重要な問題提起をし、議論を行う有益なシリーズだったが、今回が最終回ということで残念だ。多様な立場の市民が専門家、有識者と同じスタジオで討論するという番組がどんどん少なくなってきていると思う。公共放送としてこうした形の番組は続けてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

「私たちのこれから」は、もともと「日本の、これから」というタイトルで放送していた。この番組は、2004 年の不祥事以降、ＮＨＫに対して厳しい視線がある中で、視聴者とともに踏み込んだ議論をする討論番組として立ち上げた。それがタイトルを変え「私たちのこれから」となった。キャスターを務めてきた三宅民夫アナウンサーが替わるタイミングで一度番組は終わるが、今後は違うキャスターで、未来の課題を考える新しい形の市民討論番組を開発したいと考えている。

○　ＮＨＫスペシャル　私たちのこれから「＃子どもたちの未来」はおもしろかった。過去のデータを基に、大学へ行かない人は生涯収入が少なくなる可能性があると言っていた。今まではそうだったかもしれないが、この先の社会では、早くから働き、手に職をつけたほうがよいこともあるのではないかとも思った。やや単一的な考え方で、もう少し広がりを持たせたほうが、多様性ある社会の実現に向けてより明るくなるのではないかと感じた。ファクトに基づくことは大事だが、過去のファクトが、人口減の中で同じファクトとしてあり続けるのか、将来のことも勘案したほうがよいと思った。

○　６月１１日(日)のＮＨＫスペシャル　ニッポンの家族が非常事態！？　第２集「妻が夫にキレる本当のワケ」は家族でおもしろく見た。オキシトシンやテストステロンといったホルモンの観点から、なぜ妻がキレるのかについて分析しており、斬新な番組だったと思う。ただ、妻がキレる理由は本当に番組で紹介していた問題だけに起因するのだろうか。限られた時間の中で、最新の脳科学や性ホルモンの研究に焦点を当てたこともあるのだろうが、科学的な裏づけとして、それが「キレるワケ」とどのような関係があるのかが、少し分かりづらかったと思う。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「妻が夫にキレる本当のワケ」は多くの夫婦に共感を持って見ていただいた。昨年６月に放送したクローズアップ現代＋「妻が夫にキレるワケ～“２８００人の声”が語る現代夫婦考～」では 2,800 人の既婚の男女に独自調査をしたのだが、そうしたデータと専門家の所見を基にして番組を進行した。オキシトシンなどの分析については最新の科学でかなりはっきり分かってきた分野でもあり、学会で

も主流の説になってきていることを踏まえて番組で扱った。
番組独自に説を展開したわけではない。

○　６月１７日(土)のＮＨＫスペシャル選「ある文民警察官の死～カンボジアＰＫＯ２３年目の告白～」を見た。三つの賞を受賞した番組で、改めて平和の重さを感じた。今の日本のＰＫＯ派遣に２３年前の経験が生かされているのかは分からないが、このタイミングでＮＨＫがこうしたドキュメンタリーを放送した意味は大きいと思う。南スーダンでいま起きている現実も伝えてほしいと思った。

○　６月１８日(日)のＮＨＫスペシャル「睡眠負債が危ない～“ちょっと寝不足”が命を縮める～」を見た。科学的な知見に基づき、分かりやすく説明していた。睡眠不足が体によくないことは昔から言われているが、それを具体的に伝えた意義深い番組だった。生放送で視聴者とのインタラクティブなつながりを意識していた一方で、臨機応変に対応することの難しさも感じられた。視聴者から「自分は夜勤の仕事だがどうしたらよいか」という質問があったが、出演者に若い人が多かったからか、誰もうまく受け止められていなかった。出演者は感じのよい方ばかりでよかったが、工夫の余地もあると思った。

○　ＮＨＫスペシャル「睡眠負債が危ない～“ちょっと寝不足”が命を縮める～」はおもしろく見たが、生放送の必要はあったのか。データ放送の機能でお茶の間とつながりたかったのか。

（ＮＨＫ側）

生放送により可能になるリアルタイムでの視聴者参加を重視した。データ放送や特設サイトを活用したリスクチェックのシーンでは、同時に２７万人もの視聴者に参加いただいたが、番組に出演した専門家もこれだけのデータが集まったことに驚いていた。視聴者から寄せられた質問に対し、その場で答えられるという利点もある。収録し、時間をかけて編集することで、情報性を高める方法もあるが、今回は双方向性を大切にするトライアルという意味で、生放送にした。

○　番組自体には感心したのだが「睡眠負債」ということばは学術的に大丈夫か。私は初めて聞くことばだった。共通した概念があるのかどうか疑問に感じた。

（ＮＨＫ側）

「睡眠負債」はＮＨＫによる造語ではなく、専門家の間で
もすでに使われ始めている概念だ。

○　私も「睡眠負債」ということばを初めて聞いた。「睡眠不足」よりもインパクトがある。仕事をがんばっている人などがよく「睡眠不足だ」と言う風潮があると思うが、「睡眠負債」となるととても重く感じる。きちんと寝て、仕事の効率を上げて働くことは大事だと思うので、よい番組だと思った。

○　６月４日(日)の「どーも、ＮＨＫ」で、各局に配属になった新人アナウンサー１２人を紹介するコーナーがあり、フレッシュな様子を見ることができた。リポートの訓練で、先輩のアナウンサーが「生き生きと伝えることとキャピキャピすることは違う」と新人の女性アナウンサーを指導しており、ＮＨＫにはそういう人がまだいるのかとうれしく思った。ＮＨＫのアナウンサーは昔から落ち着きと品格、美しいことばに定評があるが、最近は一部で民放よりキャピキャピしている方がいるという声も聞こえてきたところだったので、先輩アナウンサーがそのように指導していることに改めて感銘を覚えた。今後もそうした指導を続けていってほしい。

○　６月８日(木)のくらし☆解説「乳製品　原料不足の背景は？」では、乳製品の原料不足の背景を１０分間で的確に取り上げていた。なぜ脱脂粉乳が不足するかというと、国が輸入自由化の対象にし、その保存性の高さから輸入量が多く値段がつきにくいため、国内の酪農家が出荷しないからだ。２年前、バター不足の原因は流通や指定団体などの問題ではないかと喧伝(けんでん)されたこともあったが、そうした誤解は今ではほとんど解けたと思う。さらに番組では、肉用の子牛が高値で売れることから、肉牛を積極的に種付けするため、乳牛の数が減っているという構図についても解説していた。派手さはない番組だが、問題の背景について真正面から解説してくれたことはよかったと思う。

○　６月１０日(土)の旅旅しつれいします。第１回「世界のオモシロ旅人に会いに行こう！浅草の車夫トリオ　人力車で世界一周！」(総合 後 11:25～<11 日（日）>前 0:00)と、１７日(土)の旅旅しつれいします。第２回「旅人数珠つなぎ　タイで一番のオモシロ旅人を探せ」(総合 後 11:25～<18 日（日）>前 0:00)を見た。若者たちが自らの限界をかけて海外でいろいろな旅をしており、すがすがしさを感じた。こんなにも旅の中で自分の思いをストレートに表現しようとする日本人がいることに驚いた。私が若いときとは違う旅のしかた、自分の思いを遂げるための生き方をいろいろと見せてもらった。こうした旅が若者たちの１０年後、２０年後にどんな影響を与え、その時彼らがどんな生活をしているのか、とても気になり、見てみ

たいと思った。

６月１２日(月)のクローズアップ現代＋「“新たな”アスベスト被害～調査報告公営住宅２万戸～」を見た。ＮＨＫ独自の全国的な調査結果の報告で、ＮＨＫらしく、とてもよくまとまっていたと思う。アスベストへの注意喚起を視聴者に促し、被害が終わっていないこと、およそ２３万8,000人がアスベストを吸い込んだ可能性があるという具体的な数字を示していた点はよかった。アスベストについては、平成１７年の「クボタショック」のかなり前から、「静かな時限爆弾」として問題化し、さまざまな措置が求められてきた。当時は小学校、住宅の壁にも使用されており、主にそこで働いていた建築関係の方々のアスベスト被害が中心だった。今回の番組では住んでいただけで被害に遭った事例が紹介されており、住宅のアスベスト被害は2040年ぐらいまで注意が必要だということで、大変な状況であることがとてもよく分かった。２３万8,000人というのは公営住宅だけの数字なので、今後どれだけの被害者が出るのか、とても大きな問題なので、引き続き取材を続けてほしい。

○　「静かな時限爆弾」というのは言い得て妙で、大事な番組を作ってくれたと思う。

（ＮＨＫ側）

今回の調査はまだ立ち上がった段階だが、新たなことが分かればニュース・報道番組などで引き続き伝えていく。

○　６月１６日(金)に放送した「ＬＩＦＥ！～人生に捧げるコント～」(総合 後10:00～10:48)が周囲でも話題になっている。インターネットで提供しているサービス「ＮＨＫ１．５チャンネル」でも関連の動画を見られるようになっており、「誰でも使えるムロツヨシからの結婚お祝いＶＴＲ」など、どれもおもしろい。ＮＨＫの番組でこれほど話題になるのはすごいと思う。次の特集は８月を予定しているそうだが、放送が待ち遠しい。

この春から「Ｌｅｔ’ｓ天才てれびくん」が「天才てれびくんＹＯＵ」にリニューアルし、出演者も替わった。西川貴教さんが出演し、童謡をクイズにして歌うのだが、子どもにすごく受けている。私には懐かしい童謡だが、とても上手に歌っており訴求力があるようだ。家事で忙しい時間に、この番組のおかげで親は楽ができると思う。

○　６月４日(日)と１１日(日)のＢＳ１スペシャル「知られざるトランプワールド～３６０°カメラが探訪する　新大統領を生んだ世界～」（前・後編）（ＢＳ１　４日(日) 前0:00～0:49、１１日(日)後10:00～10:49）を見た。トランプ大統領の交渉

術にどう対応したらよいかなどを考えさせられ、実践的な意味で大変おもしろかった。スマートフォンやタブレットで視聴できる 360 度カメラの映像は、私の端末の問題かもしれないが、画面が途中で止まってしまって見られない場面もあった。この番組がふさわしかったのだろうか。

（ＮＨＫ側）

スマートフォンやタブレットと連動させ、放送と同時にテレビ画面には映っていない映像を手元の端末で 360 度楽しむことができるという、新しい技術への挑戦だった。実際に端末を動かしてみるとなかなか難しく、うまく見られなかったという声も少なからずあった。こういったテーマではなく、自然番組などのほうが分かりやすいのではないかという意見も頂いたが、こうした技術にさまざまな形で挑戦し、放送の新たな可能性につなげていきたいと思う。頂いた指摘は制作担当者にも伝える。

○　５月２７日(土)のスーパープレミアム「世界プリンス・プリンセス物語」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:59）を見た。歴史的、文化的な背景を含め、プリンス・プリンセスが担っている重責が、いろいろな視点でまとめられていておもしろかった。ベルギーのマティルド王妃や、国を背負っているというヘンリー王子のエピソードには感動した。有意義で興味深い番組だったが、ＢＧＭの選定が気になった。また司会の女性アナウンサーは好きな人だが、プライベートな面にいささかこだわった演出が気になった。

○　６月３日(土)の「ヨーロッパ・星付きシェフからの招待状」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 7:30～8:59）は楽しく、元気の出る番組だった。料理の本場ヨーロッパに修行で渡ったものの、「日本人は安くてよく働く労働力だ」としか思われず、給料袋もほかの人は名前が書いてあるのに「日本人」としか書かれなかったというようなところから発奮し、星付きシェフになるという話だった。人生にはいろいろな選択肢があり、それが提示されることも重要だと改めて感じた。

○　加計学園の獣医学部新設をめぐる問題について。視聴者に判断材料を提供することはＮＨＫの大事な役割だと思う。文部科学省の内部文書の存在について、ＮＨＫでは民放各社より先に報じていたと思うが、一部黒塗りされた文書を放送で出していた。いきさつはよく分からないが、結果的にはその翌日に他社が大々的に報道したことで、先を越されたような印象になった。最初の報道では、ＮＨＫの取材力に

対しさすがと感じていただけに格好が悪いように思え、なぜなのかと感じた。

（ＮＨＫ側）

個別の編集判断、取材の過程については答えるのを差し控えるが、指摘のニュースについては、ＮＨＫの独自取材によるものも含め、視聴者の判断材料になるような情報を随時伝えている。今晩１９日(月)のクローズアップ現代＋「波紋広がる“特区選定”～独占入手・加計学園“新文書”～」でもこの問題について取り上げ、独自ニュースも含めて幅広く伝える予定だ。「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」にも特設サイトを設け、視聴者の関心に応えるべく、情報を伝えている。

○　獣医学部新設に関する文書の問題については、「ニュースウオッチ９」の男性キャスターが真剣な顔で「国民の疑問に答えなくてはいけない」と真正面から言っていたことに好感を持った。最初に報じた「ニュースチェック１１」をたまたま見ていた。あの段階で黒塗りにせざるをえないＮＨＫの判断もあったのだろうということも理解するが、翌日の他社のニュースは大きく異なる報道という印象だった。ＮＨＫの記者も総力を挙げて取材してきたと思うが、なぜ他社のスクープという世の中の印象になってしまったのだろうか。ニュースは速ければよいわけではなく、正確さを追求することもＮＨＫの使命だと思うし、いろいろな考えがあることは理解するが、この点について出された各委員の意見も受け止めてもらえたらと思う。

（ＮＨＫ側）

この問題も含め、あらゆるニュースについては、いろいろな角度からできるだけ多くの情報を集め、しっかりと確認している。その上で、真実に迫り必要なものを報道するという姿勢は、どんな場合も変わらない。誰かから何かを言われて内容を変えたり、放送しないということは一切ない。報道機関として自主的に判断し、正確である、真実に迫っていると言える事柄については、きちんと伝えるという姿勢だ。今回の委員の意見はきちんと受け止めるが、そういう姿勢でいることは理解いただきたい。

○　北朝鮮のミサイル問題について。国民の安全に関わる問題なので、直ちに正確に報じなくてはいけないが、ミサイル問題は国家的な脅しという性格を帯びており、国民に恐怖を与えようという意図の下に行われている側面がかなり強い。そんな中、

北朝鮮のミサイル発射についてどれだけの規模で報じるべきか、メディアは常にジレンマを抱えている。ＮＨＫはどれほど悩んでいるのかと疑問に思うほど、民放と比べて報道の時間が極端に長いと思う。また、勇ましい北朝鮮の映像などを繰り返し流している。安全に関わる問題なので報じるのは当然だが、その時間については疑問に思う。元自衛隊の解説者が、ＮＨＫの番組で「正しくおびえることが大事である」と言っていた。６月８日(木)に発射された巡航ミサイルのケースでは、菅官房長官も「日本の安全保障に影響を与えるものではない」と認めていたが、そのときも「ＮＨＫニュース　おはよう日本」では民放と比べても長い時間報じていた。そのあたりの考えを聞きたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫもそのジレンマに悩まされている。ミサイルを発射したという事実がある以上は伝えなければならないが、視聴者の不安を無用に増大させてはならない。われわれがまず考えているのは、ミサイルが日本の領海、領空を飛ぶときに発信されるＪアラートの有無をできるだけ早く伝えることである。海上保安庁、自衛隊などの情報の出し方も踏まえ、適切な報道のしかたについて検討している。報道の時間が長いという指摘だが、６月８日(木)の巡航ミサイルの発射の際は、弾道ミサイルの発射の時と比べ放送量をかなり減らしていた。ケース・バイ・ケースで対応している。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年５月ＮＨＫ中央放送番組審議会

５月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１５日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、放送番組の種別および種別ごとの放送時間（平成２８年１０月～２９年３月分）について説明があった。続いて　「ボキャブライダー　ｏｎ　ＴＶ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　大日向雅美（恵泉女学園大学学長）

委　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター）
有森　裕子（元マラソンランナー）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
大島　まり（東京大学大学院情報学環／生産技術研究所教授）
鎌田　　實（諏訪中央病院名誉院長）
佐野真理子（主婦連合会参与）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)代表取締役会長）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
仲道　郁代（ピアニスト）
西原浩一郎（金属労協顧問）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース（株）執行役員メディア事業開発担当）
増田　雅己（読売新聞東京本社常務取締役論説委員長）

（主な発言）

＜「ボキャブライダー　ｏｎ　ＴＶ」について＞

○　私は英語に対して苦手意識があると同時に、学ばなければいけないという気持ちもすごくある。今回の番組は、そのとっかかりとして気軽に見られるというのが率

直な感想だ。ドラマ仕立てになっており、サラリーマンとカフェのオーナーという設定が私のように英語を覚えたい人にぴったりだと思った。「～の番」を、「ｔｕｒｎ」と表現することを解説するシーンでは、サイコロのイメージを使って視覚的に表現していた点が分かりやすかった。「すすぐ」を「ｒｉｎｃｅ」というのもなるほどと思い、日常でも使ってみたいと思わされた。楽しく英語を覚えられるのがよく、これを機会にがんばりたいと思った。「ＮＨＫゴガク」のアプリも使ってみた。配信されているラジオ番組をすべて聴いてみたが、聴きたいと思ったらすぐに繰り返し聴けるようになっており、徹底していることに感心した。

○　小さな子どもから高齢の方まで楽しめる番組だと思った。ボキャブライダーというキャラクターに子どもはワクワクするだろうし、大人にとってもクスッと笑えるエッセンスが入っている。一つのことを伝えるのに、幅広い世代に満足してもらえるものを作ることは難しいが、ユーモアのあり方がそれをうまくカバーしている点がすごいと思った。ラジオ、アプリとの連動など、さまざまな展開ができるという考え方に感銘を受けた。

○　英語・フランス語・スペイン語など、ＮＨＫのテレビ、ラジオ、テキストも含めこれまでいろいろと学んできた。今回、「ボキャブライダー」という新しいコンセプトの語学番組をおもしろく感じた。それはテレビとラジオとアプリの３つがうまい形で融合し、それぞれのメディアの特徴を利用したプログラムである点だ。テレビは視覚に訴え、ドラマ仕立てになっている。ラジオは、発音も強調した形で音声波のよさを生かした番組になっている。アプリについては、テレビやラジオではできない、「クイズで理解を深める」という役割が明確で、うまく連動している。さまざまなメディアをどう利用するかはＮＨＫの課題でもあるが、語学での活用はおもしろい企画であり、うまい形だと思う。

○　ＮＨＫの語学番組、特に英語については、日常、ビジネス、ニュースなど、視聴者の学習ステージに合わせ多彩で充実していると思う。語学学校、教材が氾濫する中で、個々人の能力レベルに応じ、学ぶ意志さえあれば費用のかからない形で語学学習にアプローチしやすい状況を作っていることは、公共放送の役割の一つではないか。番組は短時間のコメディータッチのドラマ仕立てで、学ぶための構えなしに視聴できる。表現しづらいことばに焦点を当てており、単語力を高めるアプローチの一つとして興味深い。テーマによっては語学的な解説、関連の表現などを取り上げ、構成上の工夫もされていると感じる。ラジオ第２のほうも、集中して学ぶという点でラジオの力を改めて感じたし、アプリは反復学習をするうえで必須のアイテムだろうと思った。

番組で「青二才」ということばを取り上げていたが、若い人はあまり使わないことばだと思う。英語で表現しづらいことばを取り上げるという趣旨は分かるが、日常生活で使えるようなものを中心に、どういったことばをテーマに選択するかは、今後の課題ではないか。2020 年も視野に入れ、外国人旅行者をいかに取り込むかは経済活性化の大きなポイントだ。そういう状況を意識した番組作りはＮＨＫに当面求められるのではないかと思うので、進めていってほしい。日本は英語の学習時間が相当長いにもかかわらず、ほかのアジアの国と比べても語学力が低いと言われている。ＮＨＫはこれまで語学教育に携わり、相当な知見を持っていると思うが、なぜ日本人の英語能力が低位にあるのか、解析し問題提起するような番組も検討してほしい。

○　番組の説明資料に「英語力に差をつけているのは、ズバリ“単語力”」と書いてあるが、そのあたりはＮＨＫが長く語学番組をやってきたからこそ発見できた、日本人が英語を学ぶ上でのポイントなのかもしれない。自信を持ってそれを言えることがＮＨＫならではと感じた。多くの日本人の英語学習は、毎回似たようなところで挫折し、最初に戻る、ということを繰り返しているように思う。短い時間の番組で、紹介する単語は１個であっても、１日１個を覚えれば、忘れるものがあっても１年で 100 個は覚えられるだろう。１０年たっても学習を繰り返すことを考えるとすごくよいアプローチだと思う。ＮＨＫには１５分や２０分の基礎的な番組もあれば、５分でも大人にとって意味のあることを教える番組もあり、幅広いアプローチを持っている点がすばらしい。語学が好きな人は、４月になると今年のＮＨＫはどんな講座があるのかと楽しみに探すと思うが、ＮＨＫと言えば「基礎英語」のイメージで止まっている人がほとんどではないだろうか。こんなにもいろいろな種類のおもしろい番組があるということを、Ｅテレだけではなく、ほかのチャンネルでも見せ、引き込むことができれば、日本人の語学力向上にも貢献できるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

「青二才」ということばについては、私たちも議論した。この番組は、学習の手前の部分で、視聴者にいかに英語に興味を持ってもらい、引き付けるかが主題でもある。英語の苦手な人にとって、英単語はアルファベットが無作為に並んでいるようにも見えるかもしれないが、その並びや単語と単語のつながりには実は意味があるという、そうした解説部分で「へー」と思ってもらいたいというのが基本にある。この回については、「青（ｂｌｕｅ）」と「緑（ｇｒｅｅｎ）」の色の

対比が落としどころになっており、その解説の部分から逆算し「青二才」ということばを使った。委員からの指摘についても課題として認識しており、それは脚本段階でも常々議論になっている。最も身近で、スッと入れるシチュエーションを今後も意識し、一段高いレベルに持っていきたいと考えている。

日本人の英語力に関して何か申し上げる立場にはないが、ＮＨＫは日本人の英語力の向上に対して何らかの貢献ができるのではないかとは思う。英語力向上に明確な決まりごとがあるかというと難しい。おそらく、一般の人が少なくともこの辺りまではたどり着きたいというレベルにおいては、単語力は重要だと思う。そこから先の段階については、単語力ではないのかもしれないが、その手前の部分を担保するのを目的としたプロジェクトが「ボキャブライダー」だ。単語は一朝一夕に覚えられるものではなく、反復して時間をかけて覚えられるよう、アプリでいつでも復習できるようにしている。過去の番組を聴くこともできる。私たちは、ＮＨＫだからできることは何だろうと考えている。ＮＨＫには多くの英語番組があるが、一つのアプローチですべて解決できるとは思わないし、向き不向きもあると思う。複数のアプローチの中で、必要としている人に届けばよいと思っている。

○　コメディータッチの演劇仕立てでとてもおもしろく、４話とも「へー」と思った。きちんと説明している部分が心に残り、それが単語力につながるのかと思った。この番組のような単語の学び方は将来的によいのではと思うが、人それぞれであり、時間がたつにつれ、その結果は出てくるのではないかと思う。番組のターゲットについてはどうなっているのだろうか。夜のカラオケのシーンは、子どもには向かないと思った。どのことばをテーマに持ってくるかが大きな課題であり、それが、視聴者がついていけるかどうかの要素になってくると思う。５分で１話というのは適切な時間かもしれないが、もっと勉強させてほしいと思った。特に４話分続けて見ると、むだな部分も多い気がした。よい単語を選んで番組作りをお願いしたい。

○　広がりのある、使い勝手がよいことばを選ばれていること、「へー」と思わせようとしていることを聞き、得心した。「へー」と思うから印象に残り、そのことばを覚えるのだと思う。

○　昔、ＮＨＫラジオの「基礎英語」を、早朝の放送で眠い目をこすりながら聴いたことを思い出した。マーシャ・クラッカワーさんなど、自分が英語を学ぶ過程でＮＨＫの存在は大きかったと思う。ＮＨＫが日本の語学教育の分野で一定の役割を果たしているのは、その通りだと思う。今回の番組は、朝の５時台の放送なので、昔の私と同様に今の子どもたちは朝に眠い目をこすりながら見るのかと思ったが、次の瞬間にはたと思い至り、今は録画がある、さらにアプリもある、視聴する時間帯は関係なく、今の子どもたちは恵まれていると思った。アプリ、インターネット上で見られる有利さは、放送と違い、時間の制約がないということだろう。もっと知りたい人に向けて、さらなる探求心、勉学心に応えられるような仕組み、アプリの有利さを使った工夫の余地があるのではないかと思った。

○　語学番組として制作意図もよく反映されていると思った。いろいろなメディアをどう使い分けるかが重要だ。その中でテレビはどのような役割を果たすのか、ラジオやスマートフォンとどう組み合わせるのか。ほかの番組にも応用できるような展開ができればよいと思う。

○　始まり方が斬新で、なぜ日本人がいきなり外国人に変身するのかと、ドラマの設定に気をとられ単語に集中するのに時間がかかった。ラジオでＮＨＫの「基礎英語」を聴いても、ポイントが多すぎてどれを覚えればよいのか分からないということが多々あったが、今回の番組では、使いたくなるシチュエーションが容易に想像できる単語をテーマにしており、覚えるにはすごくよいと思った。一方で、５分の番組だが、単語３つぐらいは覚えられるのではと思った。ドラマ部分が長いので、扱う単語が一つではもったいない。あるいは、一つの単語でも、こういう使い方もあると３つぐらいの用例を出してもらえるとよいと思った。

○　笑って楽しんで見ている間に、単語、言い回し、少々のうんちくまで覚えられる、大変よい番組だと思った。ただ番組に登場する人間だけでなく、猫まで外国人に変身するのはいかがなものかとも思った。４月から放送しているが、周囲で「ボキャブライダー」を知っている人はいなかったので、もっとＰＲに気を配ってもよいと思う。テレビの放送時間は再放送も含めいくつかあるが、昼間に放送する、また総合テレビでも週１回程度放送するなど工夫したらよいのではと思った。

○　テレビとラジオとインターネット、アプリの組み合わせは、「ボキャブライダー」に限らずもっといろいろな番組でもできる気がする。ＮＨＫはその力を持っていると思うので、幅広く取り組んでもらえるとよいと思う。番組については、「ネイティブの発音なんて無理」と諦めている人に向けて、こんな風に読んでみたらよく通じ

る、というような発声についての解説もあれば、なおおもしろいと思った。５分の中で、最も説得力があった部分は、ことばのニュアンスの解説部分だ。「ｔｕｒｎ」の説明でサイコロが回るイメージはうまいと思った。ほかのおふざけの部分と比べると、解説の配分はもっと多くてもよいのではないか。「ボキャブライダー」を視聴すれば 2020 年までには外国人との交流が怖くなくなるという展開もすればよいのではと思った。

○　大変おもしろく見たが、４話連続で見るとむだが多いような気もした。５分をもっと役に立つように作ってもらうとありがたい。英語を習得するには繰り返しが大事だ。前の日に学んだことをもう一度おさらいする、ということも番組に上手に入れてもらいたいと思う。アプリを使えば繰り返し学習できるが、高齢者などアプリを使えない人もいる。テレビを見ているだけでも何とかなるという意味で、番組の中で繰り返し学習して身につける工夫も大事ではないかと感じた。

○　アプリについては、聴き直す、学習し直すためだけに位置づけられているのがもったいないと思った。５分の番組に視聴者が出会える確率は限られている。ＮＨＫの教育番組は、勉強する気満々の人が視聴しに来ることが大前提で作られている気がする。今の時代、わざわざ時間を割いて番組を視聴しに来る人がどれだけいるのだろうか。利便性の高いインターネットで視聴者との出会いを作る工夫をし、そこからテレビ、ラジオ、アプリへ誘導するほうが合理的なように思える。ＮＨＫがやらなければいけないのは、ふだんＮＨＫを視聴しない、必要ないと思っている人と出会えるようにすることだ。その点でインターネットの使い方は戦略的に重要であり、「インターネットでも使える」というだけではなく、インターネットやアプリを起点としたアプローチがもっと必要ではないか。

○　テレビと他メディア、アプリとの調和の取り方は、他の番組にも参考になるのではないか、新しい放送のあり方ではないかという意見が出されたことが印象深い。日本人の語学力の向上に関して、ＮＨＫに期待しているという意見も多く、いくつかの提案、要望もあったが、どう捉えているか。

（ＮＨＫ側）

私たちが課題としていることも含め、いろいろな意見を頂きありがたく思う。５分のうち、もう少し単語の解説に時間を割いたほうがよいのではないかという指摘に関しては、今後、ボキャブライダーが２回登場して解説するような構成も作りつつある。役立つ情報を増やす努力はしているが、意見

を受け止め、改めてどうすればよいのかを考えていきたい。初回のほうは、「こんな番組があるのか」と引き付け、視聴のハードルを下げたかったため、解説部分は短めで作る回が多かった。ただ、おふざけだけではもたなくなるのは分かっているので、「あの番組は解説がいい」と言われるよう、ブラッシュアップを目指したい。インターネットやアプリを起点としたアプローチについても、改めて検討したい。語学学習に限らず、いかにインターネットを活用し、ＮＨＫのコンテンツに引き込んでいくのか、今後の大きな課題として検討したいと思う。

すべての意見が身に染みた。番組の存在をまだ知らない方も多くいるので、ＰＲをどうするかというのは重要だ。インターネットで出会うことをいかに作るのかという指摘は貴重だと思った。語学学習は、４、５月に一番熱が高まる傾向にあるが、それをどうやって継続してもらうかが、もう一つの課題だと思う。「ボキャブライダー」でも、週１回、月１回アプリでテストを行い、ビジュアルも学習意欲を盛り上げるような印象になるよう工夫している。「ボキャブライダー」を通して、語学学習の継続的な支援の新しいスタイルを検討していきたい。意見を頂きありがたく思う。

＜放送番組一般について＞

○　４月２２日(土)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　激震“トランプ時代”「第１集　トランプ　混迷のアメリカ」を見た。アメリカの現地報告は綿密であり、トランプ政権下のアメリカ社会で何が起きているのかを丁寧に拾っており、楽しく、興味深く見た。移民の苦境、ウォール街の利益を当て込んだうごめき、そうした動きがよく分かり、大変参考になった。ただし、最初の解説部分についてはやや乱暴である印象を持ったので指摘したい。番組では、北朝鮮周辺の海域への空母派遣、シリアへの空爆を指し、ひとくくりに“アメリカ・ファースト”の文脈で読み取ることができると説明していたが、それは違うのではないか。北朝鮮がアメリカに与えている脅威はリアルにあるという議論ができるにしても、トランプ政権はアメリカに関係ないことには手を出さない、世界の警察官ではないということをもって“アメリカ・ファースト”と言ってきたのに、化学兵器を使ったからという理由で、突然シ

リアのアサド政権を空爆したから世界は驚いたのだ。むしろアメリカ・ファーストからの逸脱、急に持ち出した世界の警察官としての立場、あるいは急に持ち出した人道主義だ。その後に出てきた「ニューヨーク・タイムズ」の幹部が言うところの“一貫性のなさ”を代表するトランプ政権のふるまいとも言え、“アメリカ・ファースト”の文脈で語るのは乱暴なくくり方だった。これからもアメリカ報道は続くと思うので、期待している。

（ＮＨＫ側）

指摘いただいた部分については、私たちも委員と同じような認識だ。番組では舌足らずな部分があったかもしれない。今後のトランプ政権の動きも含め、継続的に取材をする予定なので、舌足らずに終わらないように、十分に伝わるように考え、番組を作っていきたい。

○　４月２９日（土）、昭和の日のＮＨＫスペシャル「私たちと“象徴天皇”～政府の有識者会議“最終報告”を受けて～」は有意義な番組だった。身構えがちで難しいテーマだと思うが、天皇の生前退位に関して特例法がもうすぐ成立するであろう状況の中で、天皇制について考える番組の意義は大きかったと思う。国民が慣れ親しんでいる制度であり、大事なことと思っているが、その割には知らないことも多く、深く考えていない部分もあると思う。世論調査で「天皇の生前退位を認めたほうがよいと思いますか」という質問をすると、大半の人が「認めたほうがよい」と答える。一方で、「摂政を置いてお助けするのはよいと思いますか」と質問をすると大半の人が「よいのではないか」と答える。国民がそれほど深く考えていない面はあると思う。番組でも取り上げていた、女性天皇と女系天皇の違いや意味合い、天皇制の継続に及ぼす影響はこれから引き続き国民が深く考えなければいけないことだ。番組では、女系天皇に賛成派の人にも反対派の人にも意見を述べてもらい、分かりやすく考える材料を提供していた。出演者がことばを選び、緊張感のあるやりとりだったのも興味深かった。皇位継承の安定性など、引き続き番組で取り上げてほしい。

○　４月３０日(日)放送のＮＨＫスペシャル「憲法７０年　“平和国家”はこうして生まれた」、５月６日(土)のＮＨＫスペシャル「日本国憲法　７０年の潮流～その時、人々は～」、５月６日(土)のＥＴＶ特集「暮らしと憲法　第１回　男女平等は実現したのか」を見た。いずれも憲法施行７０年ということで制作したのだと思う。ＮＨＫスペシャル「憲法７０年　“平和国家”はこうして生まれた」では、単に憲法ができたというのではなく、平和ということばをどういう気持ちで憲法に織り

込んだのかがよく伝わった。それも独自の資料発掘だった。ＮＨＫスペシャル「日本国憲法　７０年の潮流～その時、人々は～」とＥＴＶ特集「暮らしと憲法」については、よく議論されるような、憲法がいかにしてできたのかということではなく、７０年間私たちが憲法にどう向き合ってきたのかという、歴史的な視点を感じさせる番組だった。

○　憲法施行７０年ということでＮＨＫは精力的に憲法に関わる番組を多様な観点で放送していた。４月３０日(日)のＮＨＫスペシャル「憲法７０年　“平和国家”はこうして生まれた」は憲法９条に焦点を当て、敗戦直後、天皇の勅語の修正過程を示すこれまで極秘とされていた文章、改正憲法の審議を進めた衆議院小委員会の速記録など新しい資料の発見、また関係者遺族の証言を通し、策定過程がとても分かりやすく明らかにされていた。取材力の光る、丁寧に作り込まれた番組だと感じた。ドラマの手法で当時の関係者の心情をうまく表現し、平和を希求しその理念を憲法に加筆していった人々の姿を、臨場感をもって伝えていた。

○　５月６日（土）のＮＨＫスペシャル「日本国憲法　７０年の潮流～その時、人々は～」は、これまでのＮＨＫの世論調査における憲法改正賛否のデータの推移を追い、そのときどきの国内外の情勢、国民意識の変化、時代的な枠組みをうまく編集していた。改憲運動と護憲運動を中心的に担ってきた当事者の貴重な証言も交え、これまでの憲法改正をめぐる動向を歴史的な視点でうまく整理していた。

○　５月３日(水)の憲法記念日特集「施行７０周年いま憲法を考える」は、与野党の代表の参加の下での論議だった。憲法審査会で論議されているテーマ、論点について、視聴者の理解を深めるための進行上の工夫が凝らされていると感じた。

○　５月６日(土)のＥＴＶ特集「暮らしと憲法　第１回　男女平等は実現したのか」、５月１３日（土）のＥＴＶ特集「暮らしと憲法　第２回　外国人の権利は」についても戦後の歩みの中で憲法がそれぞれのテーマにどのように関わり、到達点がどこにあるのかをきちんと問題提起する見応えある番組だったと思う。今年は安倍首相の改憲を目指す姿勢がより明らかになるなど、憲法をめぐる状況は大きく変化しつつあると思う。ＮＨＫは公共放送として、国民一人一人が憲法にしっかりと向き合い、考え、判断するための情報を、不偏不党の立場で公平公正に分かりやすく発信する大きな役割が期待されていると、改めて実感した。

○ 憲法に関する番組は、多面的な視点から議論していることに意味があると思った。短いニュース番組などでは、どうしても９条に集中してしまう傾向があると思うが、

多面的な議論ができるのはＮＨＫならではだと思う。一つの番組の存在に気づく方はいるかもしれないが、多様な側面から作っているので、ほかにも関連の番組があることが分かれば、もっといろいろと見たいと思う方も出てくると思う。その伝え方は、今後工夫してほしい。憲法のことに限らず、ＮＨＫならではの大型のプロジェクトについては、関連するさまざまな番組の情報がうまく伝わるとよいと思う。

○　５月７日(日)のＮＨＫスペシャル「世紀の発見！日本の巨大恐竜」を子どもと一緒に見た。こういう番組は子どもにとって興味深いようだ。巨大恐竜の全体の骨が出てきたことは大きなニュースであり、タイムリーに番組になったことがうれしかった。科学的にいろいろな分析をし、ＣＧも使用し、どうして今までこのような骨が出てこなかったのかなどを分かりやすく説明していた。すごく楽しい番組だった。

○　５月１４日(日)のＮＨＫスペシャル「和食　ふたりの神様　最後の約束」はとてもよい番組だった。老いを淡々と描き、すごく元気というわけでもないが活躍している、しかしその中でも老いが来るという視点は、今後の高齢化社会で大事ではないかと思った。また５月１３日(土)の京都人の密（ひそ）かな愉（たの）しみ「桜散る」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:59)は、長い時間をかけ、今回の放送に至ったシリーズだった。いずれも落ち着いたよい番組だったと思う。

○　３月２５日(土)のＳＯＮＧＳスペシャル「ディズニー・ミュージカル名曲集」(総合 後 10:30～11:10)を見た。今のミュージカルスターの方たちが集まっている番組だった。衣装、照明、バックの生オーケストラ、フリートークの内容などがよく考えられていた。音楽を映像で扱うときにそのクオリティーをおろそかにすると、特にクラシックなど、芸術分野のものになるとその手を抜いた感じがよく分かってしまう。予算の面、手間暇の面など、その芸術にふさわしい番組作りをこれからも担保してほしいと思う。

○　４月２４日(月）のクローズアップ現代＋「アメリカに監視される日本　～スノーデン“未公開ファイル”の衝撃～」と、２７日(木)の「プライバシーか？　セキュリティーか？　～スノーデン“日本ファイル”の衝撃～」を見た。ＮＨＫの独自取材で、資料的価値もある、よい番組だと思った。

○　４月２９日(土)の小さな旅「乾きの里　潤う時～大分県　国東市～」の再放送を見た。ＮＨＫは、農村の今の状況を、おもしろおかしくではなく、関心を持ってもらえる形でよく紹介している。そのことに感謝するとともに、今後も続けていって

ほしい。国東市は降水量の少ない地域だ。集落のため池を守る「池守」という役割の重荷、生きがい、厳しさを伝えていた。少ない水をみんなでどうやって有効活用するかということで、「池守」には難しさもあるが、誇りを持ってやっているということだった。Ｉターン、Ｕターンの人もいて、そのことが農村の光でもあるし、難しさでもある。過疎地も含め、農村の厳しさ、難しさを描こうと思えばいくらでも描けるし、明るさを描こうと思えば描けるが、バランスを取って描いていた点がよかった。多くの人が都市部に住む中で、農村の実情を取り上げるだけで十分に番組になるし、とても貴重であると改めて思った。ＮＨＫにはそういう番組が多くある。４月１５日(土)のにっぽん紀行「“みんなの本屋”へようこそ～北海道　留萌～」(総合 後 6:05～6:38)では、過疎地域の本屋を地域の人たちで支えていることを、よい形で取り上げていた。「鶴瓶の家族に乾杯」などエンターテインメント番組でも農村や過疎地のよさ、難しさを伝えているが、多少堅い番組も含め、引き続き伝えていってほしい。

○　５月７日(日)のにっぽん紀行「俺たちがつくる高層ビル～東京・渋谷～」(総合 後 6:05～6:38)で渋谷の高層ビルを建てている若者たちを取り上げていた。渋谷を通るとき、建築現場を下からいつも見ていた。番組では若い２０代の人たちが一生懸命にがんばっており、中でも養護施設で育った青年が活躍していて、後輩たちにいろいろなメッセージを伝えていた。私たちに身近なところできめ細かな視点、温かな視点をＮＨＫが注いでくれていることに感謝している。

○　５月８日(月)、朝７時の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」について。未明にはフランスの大統領選の結果が分かる日であり、この日は新聞の休刊日だった。ＮＨＫのニュース番組でどう伝えるのだろうと思い、７時台の「おはよう日本」を見ていたが、最初に取り上げたのは北九州の火事のニュースだった。どちらがニュースとして重要かは判断があるが、新聞休刊日だけにフランス大統領選について知りたかった人も多かったように思う。火事も大変なことだが、順番が違うのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

５月８日(月)にフランス大統領選の開票が始まったのは午前３時だった。総合テレビでは、午前２時５５分から３時１５分までニュースを特設して伝えた。午前４時にもニュースを特設し、北九州のアパート火災の情報とともに伝えた。その後、午前５時、６時台の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」と展開していった。午前７時の「ＮＨＫニュース　おはよう

日本」に関しては、その時点で北九州のアパート火災で６人が死亡、連絡の取れない人が２人いる状況だった。その時点でのニュース性を判断し、北九州のアパート火災をトップに置き、２分ほど伝えた後でフランス大統領選について詳しく伝えた。そのような経緯だ。

○　５月８日(月)の「逆・転・人・生」(総合 後 10:25～11:10)を見た。山で遭難すると一般的には１週間たつと大抵生きていないといわれている中で、１４日間生き抜ぬいた人の過程が分かった。生き抜いただけでなく、その後に結婚し、子どもが２人でき、その光景が見事に“逆転人生”のねらいのようなものをうまく表していて、実話なのに物語を見ているように思わされた。生きるヒントのようなものを与えてくれる、テレビらしい番組だと思った。

○　「逆・転・人・生」では、生きようという気力が奇跡を生んだことがよく分かった。どんな荷物を持っていったのかを点検し、遭難救助の方、医者、また家族が遭難者を捜すときのチラシの作り方を探偵に聞くなどしていた。死から生へと逆転する力強さを感じさせる番組だった。今回は、生と死という対比があるのでとても分かりやすいが、現代社会では何が逆転なのかよく分からないことも多いと思う。逆転を分かりやすく、きちんと説明できるような番組をこれから作ってもらいたい。１４日間もミミズ、アリなどを食べたそうで、本当に壮絶な実話だった。それをドラマのような形で見せ、そのすごさがよく分かった。これからの番組に期待したい。

○　３月の審議会で「ガッテン！」について言及した。２０年も番組を続けてきて、そろそろテーマも枯渇してきているのではないか、論文の取り上げ方など気をつけなければいけないと批判をした。５月１０日(水)に放送した「めざせ健康長寿　大注目の検査はこれだ！」では慢性炎症を取り上げており、多くの人が気づいていながらなかなか明確になっていないテーマを扱っていた。おそらく論文をたくさん読んでもっと話したいことがあったのだろうと思う。たとえば認知症、動脈硬化も慢性炎症が原因ではないかと、いろいろなことが推測されており、いくつかの論文が出ている。しかし番組ではそうした論文には手をつけず、ＣＲＰというどこのドックでもやっているような当たり前の検査のデータを扱い、一般の人は見逃してほとんど注目していなかったことをうまく番組にしていた。２か月前に厳しいことを言ったが、まだそういうねらいがあったのか、まだ大丈夫だと思った。

○　５月１４日(日)に再放送した「初音ミク×鼓童スペシャルライブ～ジャパンコンテンツのミライ～」(総合 前 0:50～1:34) を見た。初音ミクについてその誕生か

ら分かりやすく説明しており、知らなかった世界をやっと理解できた気がした。太鼓をたたく鼓童の人たちは本物の人間だが、その奥にバーチャルの女の子のアイドルである初音ミクが映っていて、そこにたくさんの人が声援を送るのには違和感を覚えた。ただとてつもないエネルギーだったので、これも一つのカルチャーなのかと強烈なインパクトがあった。初音ミクは髪が青緑、足は長く、目がすごく大きく、永遠の１６歳であり、自分たちの理想が形になったアイドルだという男性の気持ちがあるのだろう。日常を生きる中で自分の思いどおりになることは少ないが、その中で初音ミクは一つの癒やしとして存在し、みんなでその音楽を楽しむという新しい世界があることがよく分かった。興味が湧き、のぞいてみたい気持ちになった。

○　５月９日(火)のハートネットＴＶ「亜由未が教えてくれたこと」を見た。昨年７月の相模原市の障害者施設の殺傷事件の犯人が「障害者の家族は不幸」と言ったことについて、この番組を制作したディレクターは、自分の妹は障害者だが家族は不幸ではないと証明したいということで、１か月間の介助の様子を撮り番組にしたものだ。身内の障害者の取材は、通常の番組とは異なる苦労があったのではないかと思う。家族、特にお母さんの強さ、バイタリティーには驚いた。番組の目標は障害者の家族が不幸ではないことの証明であり、それは達成していたように思う。母、父、障害者ではないもう１人の妹から、実際に介助してきてどんな苦労があったのかなどをもっと聞きたかった。その妹は、障害のある亜由未さんに家族がかかりきりになってしまい、とても苦しんだそうだ。そうした切実な思いをもっと聞きたかった。ディレクターは妹を笑わせることが介助の目的のようになっていたが、お母さんは「結果的に笑顔だったことと笑顔を求めることは違う」と言い、お父さんは「普通の人だっていつも笑っているわけじゃない」と言っていた。そういう普通の会話がすごく印象に残った。父母が亜由未さんを介助する時の気持ちに時間をもっと取っていれば、さらによい番組になったのではないか。続編も見てみたい。

（ＮＨＫ側）

放送日は決まっていないが、「ＥＴＶ特集」で前回収まらなかった部分や、その後も含め、放送する予定だ。ご覧いただければと思う。

○　５月１４日(日)のバリバラ「バリバラジャーナル　見え始めた精神医療の実態」で精神科への長期入院の問題を取り上げていた。この問題は深刻な部分がある。批判が来やすいので、番組を守る必要があるのではないかと思った。取り上げたことは大変勇気があると思う。

○　４月２９日(土)のＢＳ１スペシャル「雇用は守れるか～アメリカ　ラストベルトの労働者たち～」(ＢＳ１　後 9:00～9:49)を見た。なるほどそういうことなのかと納得した。鉄鋼労働者の感じがよく伝わった。

○　５月１３日(土)に再放送したＢＳ１スペシャル「欲望の民主主義～世界の景色を変わる時～」(ＢＳ１　後 8:00～9:49 〈一部ニュース中断あり〉)を見た。初回放送は４月２３日(日)で、５月に決戦投票が行われたフランス大統領選の前に放送された番組だった。インタビューを受けているのはヨーロッパの方が中心で、民主主義が何であるのか改めて問い直す意味で興味深く見た。私が見た再放送時には、フランス大統領選の結果が分かっていたので、もし初回放送の時に見ていたらまた違った感じ方だったろうかと、視聴時期が見る側にどういう影響を与えるのかという意味でも興味を持った。アメリカ、あるいはヨーロッパの視点で民主主義を捉える番組が多いが、日本、アジアが、世界の動きに合わせどう変わりつつあるのかも取り上げるとおもしろいのではないか。トランプ政権が 100 日を過ぎ、いろいろと見えてきていることもあると思う。

（ＮＨＫ側）

ＢＳ１スペシャル「欲望の民主主義」は、もともとＢＳ１スペシャル「欲望の資本主義」という保護主義の議論をした番組の延長線上にある。世界の識者の最先端の議論を分かりやすく伝えるように考えている。今のところはアジアにフォーカスした企画は動いていないが、そういったテーマも今後検討したい。

○　５月１３日(土)の体感！グレートネイチャー「目撃！煮えたぎる地底のマグマ～チリ・巨大火山地帯～」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 7:30～8:59)を見た。チリにあれだけの火山があり、噴火もしていることは知らなった。日本も火山国であり、リスキーな状況にある。チリの火山にまで日本人の学者が自分の足で登り、少しでも噴火の予兆が分かればとがんばっている。そういう日本人が世界にいると分かりうれしくなった。

○　４月１６日(日)の山本地方創生大臣の失言、４月２５日(火)の今村復興大臣の失言に関する報道を見比べて気になった点がある。山本地方創生大臣のときは釈明している映像だけで、実際に発言したときの映像はなかった。ＮＨＫだけでなくほかの局もそうで、映像がなかったのだと思う。今村復興大臣のときはパーティーで実際に発言している映像があった。釈明部分の映像だけ使うというのは報道のあり方

としてよいのだろうか。テレビは映像がなければ伝えられないので、難しいところがあると思うが、映像中心の考えがもたらす弊害もあるのではないか。

（ＮＨＫ側）

４月１６日(日)の山本地方創生大臣の発言は地方でのことで、映像がなかった。その後、大臣の発言について批判の声が上がり、本人が釈明した。報道すべきニュースと判断し、本人の釈明、野党の意見なども含めて伝えた。４月２５日(火)の今村復興大臣の発言については、所属する派閥のパーティーでのあいさつでのことで、映像もあったため、その発言と釈明を映像で伝えることができた。

○　この１か月は憲法、トランプ政権、ヨーロッパに関する番組など、よいものが多かった。それぞれこれからも課題の続くテーマだが、大きな時代の変革の時かもしれないので、粘り強く追ってほしい。

○　この１か月は憲法施行７０年もあり、天皇制の問題もあり、難しい月だったと思う。その中でＮＨＫは公共放送としての存在価値を示すようなすばらしい番組が多かったという意見はそのとおりだと思う。アメリカのメディアはトランプ政権と闘っている。ヨーロッパ、アメリカの民主主義を問うのと同時に、日本、アジアにおける民主主義のゆくえにもフォーカスしてほしいという意見もそのとおりだ。ＮＨＫには新たな存在価値が問われると思うので、大いに期待している。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２９年４月ＮＨＫ中央放送番組審議会

４月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１７日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１２人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２８年度第４四半期・１～３月）について説明があった。続いて「人名探究バラエティー　日本人のおなまえっ！」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　大日向雅美（恵泉女学園大学学長）
副委員長　渡部　潤一（国立天文台副台長）
委　　員　有森　裕子（元マラソンランナー）
今井　　忠（ＮＰＯ法人東京都自閉症協会理事長）
佐野真理子（主婦連合会参与）
立野　純二（朝日新聞社論説主幹代理）
出口　治明（ライフネット生命保険(株)代表取締役会長）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
西原浩一郎（金属労協顧問）
比嘉　政浩（全国農業協同組合中央会専務理事）
藤村　厚夫（スマートニュース（株）執行役員メディア事業開発担当）
増田　雅己（読売新聞東京本社常務取締役論説委員長）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２８年度第４四半期・１～３月）について＞

○　インターネットでのＮＨＫの存在感、言い換えるとテレビを見なくなっている方々へのリーチをもっと広げなければならない時期だと思う。残念ながらインターネットに関してはそういう力、勢いがあまり感じられなかったことは重要なポイントだ。ＮＨＫ　ＷＯＲＬＤ　ＯＮＬＩＮＥの訪問者数が低迷している。ＮＨＫ　ＷＯＲＬＤ　ＯＮＬＩＮＥは諸外国に英語で日本の情報を伝えるという役割を担っ

ていると思う。今は海外の方の日本への関心が高まっている。そういう時期にＮＨＫ　ＷＯＲＬＤ　ＯＮＬＩＮＥの訪問者数が低迷しているように見えるのは残念だ。いろいろな取り組み上の課題があるのかもしれないが、日本に対する海外の方の理解を促進し、関心の高まりを喚起することもＮＨＫにとって重要な使命の一つではないか。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫ　ＷＯＲＬＤは、できるだけ多くの方々に見てもらい、日本への理解を深めてほしいということで取り組んでいる。インターネットへの展開は重要な要素だと考えている。ＮＨＫ　ＷＯＲＬＤへの関心を高めてもらうような活動を今年度の重点項目の一つに挙げ、積極的にＳＮＳに発信することをやっていきたい。訪問者数は低迷しているように見えるが、熊本地震などの災害、関心事があると訪問者数が増える傾向もある。ＳＮＳを通じたアプローチの開発など、引き続き普及に努めていく。

○　前回の報告から「タイムシフト視聴」の結果も加味されるようになった。放送全体において大きなトレンドになるような気がする。リアルタイム視聴には、たまたまチャンネルを合わせた視聴者もいるだろう。わざわざ録画する、あえて見ようとするインセンティブがないとタイムシフトにはつながらないと思う。それだけに番組の内容、あるいは予告のしかたが大きく問われるのではないか。タイムシフト視聴が番組の見られ方の指標の一つとなることで、これからおもしろい傾向を作っていくのではと思った。

＜「人名探究バラエティー　日本人のおなまえっ！」

（総合　４月６日(木)放送）について＞

○　自分の名字のはんこを探すのに大変な思いをした時代があり、自分の名前に興味があった。こういう角度からの番組は新鮮というか、「やっとこういう番組が出てきたか」と思わされた。最近は子どもの下の名前でも、読めない、なぜこういう名前が付いたのかと疑問を抱くことがある。漢字の由来も含め、日本人として知りたいことに切り込んだ番組で、新鮮で楽しかった。司会の古舘伊知郎さんから出てくることばが魅力的だった。内容もさることながら出演者のことばの深さも楽しかっ

た。自分で自分の名前を調べようかと思うぐらいの楽しさを感じた。今後も楽しみにしている。

○　名前がテーマということで、由来、地域的な分布など、一律的な見方に陥りやすく、内容が限定されるのではないかと思い込んでいた。古舘さんのトーク力をもってしても４５分間のバラエティーとして成立するのか興味を持って見た。今回は「さいとう」の「さい」の字のバリエーションの多さ、書く難しさを切り口にし、戸籍制度の背景、戸籍電子化の動き、脳科学からのアプローチなどさまざまなエピソードを織り交ぜ、視聴者に飽きさせない工夫を追求した制作スタッフの努力が強く感じられる番組だった。新入社員のときの上司が「さいとう」で、年賀状を出すときに気を遣っていたが、そのような実感できる部分をすくい上げていると感じた。一方で、空回りしたところも一部あったのではないか。放送時間帯から家族で視聴する番組と考えると、女優の写真パネルは品位に欠け、違和感を覚えた。またゲストのお笑いタレントの、名前と持ちネタとを連動させたギャグは過剰な感じで、しつこかった。古舘さんとゲストの変幻自在のトークに負っているところも大きいとは思うが、名前を調査する本質的な努力、多彩な切り口からストーリー性をいかに高めるかが、番組を成り立たたせる前提になると思う。どのように番組が育つか期待したい。

○　変わった名字の方ほど思い入れが強いと感じることがある。「あまりいないんです」と言いながらもうれしそうな感じがする。今回のテーマは「さいとう」さんだったが、今後「さいとう」という名字の方と会う機会があればこの番組のことを話せると思った。番組全体の雰囲気は明るく、難しい部分もテロップで補足し、分かりやすかった。娘は“はんこ”のキャラクターがかわいいと言っていたので、いろいろな年代層に見られやすい番組だったのではと思う。今後も期待したい。

○　家族と一緒に見て、すごくおもしろかった。ただ、この内容で本当に４５分も必要だろうかと思った。ギャグも多く、３０分で十分ではないかという印象を持った。また、民放の番組のようだと感じた。民放が悪いという意味ではなく、公共放送として「こんなにおふざけばかりでよいのか」と感じた。試行錯誤し、いろいろな切り口で、これからどんどんおもしろくなることを期待している。

（ＮＨＫ側）

名前を取材していくと、歴史など、どうしても堅い話題に最後は行き着くので、そこまでの見せ方を工夫し、おふざけととられるようなことにもトライした。ただ、実際にやって

みて、その部分でおもしろがってもらわなくても、名前そのものに興味を持ってもらえれば、十分に楽しんでいただけるという感触もあった。過剰におもしろがり、名前をちゃかすようなことになるとよくないので、それは今後意識すべき点だ。時間配分の問題については、われわれも一つの名前でいかに４５分を構成するかという不安はあった。エピソードのたくさんある名前については、その名前１つをテーマに通す形が主流だが、今後は、一つの番組で二つの名前を取り上げることや、何かの特徴でくくり、いくつもの名字を取り上げること、別の目線、別の角度からのコーナーを入れることなども検討している。

○　名前の選定によっては関心の高い番組となるし、歴史上の物語を解明する取材になると思われるので、丁寧に番組を作っていくことを期待する。心配なのはバラエティーということでおもしろおかしくやりすぎることだ。名前に絡んだ差別、地域の特定など、いろいろな危うさがある。それにどう対応するのかという難しい部分があるので、すごく気になった。また番組で「天皇家の先祖といわれる天照大神をまつる伊勢神宮」というナレーションがあった。天照大神は神話なので、丁寧な説明が必要ではないかと思った。番組で取り上げる名前を「○○サマ」と言っているが、「○○さん」でよいのではないかと思う。余計な心配が多く、あまりゆっくり見られなかった。もっとリラックスして見られる楽しい番組を作ってもらいたい。

○　私は、楽しく、リラックスしながら見ることができた。古舘さんがＮＨＫレギュラー１４年ぶりということで関心をもって見ていた。「大暴れ！？」と番組情報に書いてあったが、それほどでもなく、抑え気味な印象だった。これから古舘さんの味が出てくるのかと思った。民放にもこうしたたぐいのバラエティー番組は数多くあると思うが、どうしてもこの番組を見たいという視聴者の関心を、どこまで継続して得られるのかというところが気になるところだ。見てもらうためにおふざけに走ることになってはいけないと思う。いろいろな切り口の工夫をされるということなので、そのあたりを意識して制作してもらえるとありがたい。

○　名前には、個人によってさまざまな思い入れがある。名前を扱うことに関しては私もどちらかというと緊張感があるほうだ。バラエティーとして取り上げるには難しさがあると思う。ＮＨＫが取り上げる以上は、そうしたセンシティブな部分も取り扱うことがあるのだろうか。切り口の大変難しい題材であると思う。バラエティーとしてもあまりリラックスして見られなかったというのが正直なところだ。

○　完成度が高いという印象を持たなかった。まず、進行が遅いと感じた。はんこ屋へ行き、いかに多くの種類の「さいとう」姓があるかなどは、見て回らなくても多くの人が予想できることだ。お笑いタレントが何度も同じギャグをやっていたが、そんなにおもしろいとも思えず、くどいと感じた。そのギャグが繰り返されたので余計に進行が遅いと思った。今回の最大の見どころは「さいとう」の名前の由来だったと思う。由来は大変おもしろかった。ただ、由来に割かれた時間が全体の中であまりにも短いように思った。そこに至るまで延々と「さいとう」がいかに種類の多い名前か、なぜ字の間違いが多いのかといった点に時間が割かれ、一番おもしろいところが最後に少ししかないような印象を受けた。「さいとう」の複雑な字画を覚えるのが難しいのは、脳科学者の説明がなくてもみんな分かるような気がするし、専門用語も必要ないように思った。古舘さんの起用はそれだけですでに話題になっていることは理解するが、古舘さんの持ち味であるトークが存分に発揮されているとは思えなかった。古舘さんでなくても似たような番組の印象、進行だったように思う。古館さんをもっと存分に使い、能力を発揮してもらいたい。

○　情報バラエティー番組だと思うが、「バラエティー」の部分については、笑いの中に自分は入っていけなかった。それは番組が悪いのではなく、世代がそうさせるのかもしれない。海外で現地のバラエティー番組を見たときの「なんでこんなことで笑うのか」という感覚と近いかもしれない。バラエティーの難しさは、文化を共有していることへの協調圧力のようなものを感じさせることだ。ある世代には親近感があっても、年代によってはその輪に入れない、そうしたいわゆる“ノリ”の部分については、今後工夫が要ると思う。「情報」の部分については、知識的要素がどれだけ詰まっているかという効率をどうしても求めてしまうので、間延びした感じがした。ただ、社会人になったばかりの若い青年は、「めっちゃおもしろかった」と言っていたので、自分の感覚を絶対視するつもりはない。

○　民放のバラエティー番組と比べると、「さいとう」の由来の部分は深く掘ってあり、感心した。名前は人文学、民俗学、歴史学など、特定の学問領域に収まらないような分野だ。伊勢まで行き、きちんとリサーチをし、おもしろいものを掘り出し、アピールしている点で評価する。バラエティーの部分については、世代間のリテラシーの差というか、私も楽しめなかったところがある。古舘さんのトークがもう少し前に出てきたらよいと思った。出演者は６人も必要だろうか。名前の当事者が３人いて、専門家が１人いるのは分かるのだが、ほかの出演者は発言の機会もあまりなかったように思う。バラエティーの作り方にはそういうパターンがあるのかもしれないが、冗長な感じを受けた。古舘さんを前面に出す工夫をするとよいと思った。

（ＮＨＫ側）

今後、内容をどうしていくかについては、古館さんとも話している。この番組でしかたどり着けない名前の由来、知られていなかったことの発見を番組の中心に置くことにしている。ともすると由来とは、堅く、歴史の教科書の１行で終わるようなことでもあるのだが、そこを古舘さんの話術で想像力豊かに、見てきたように話してもらうことをポイントとし、より重視していきたい。委員からの指摘にもあったように、バラエティー的感覚を詰め込みすぎて、その進行に寄ってしまうところがあった。構成上はもう少し緩く、しかし深いところまで伝わるように変えようと思っている。現在収録している回はそうしたことを意識して制作している。名前を放送で取り上げることの危うさに関しては、差別やいじめにつながったりすることのないよう、しっかりと取材し、表現に気をつける。その名前を背負って生きてきた人たちの気持ちもくんで番組を作らないと危うくなるので、重々気をつけたい。複数の専門家の目を通して制作していく。

○　委員からは、高い評価の中にもいくつかの根本的な問題点の指摘もあり、制作者も十分に検討していることが分かった。話題性の豊かな番組になる可能性を持っていると思った。一方で名前に関しては日本人的なセンシティブな問題があると思う。経営計画にある経営指標の中でも、ＮＨＫに対しては、「文化の創造・発展」、「多様性をふまえた編成」、「公平・公正」といった点について高く期待している。視聴者は、民放では得難いものをＮＨＫに期待していると思うし、それだけにより深いものを作っていってもらいたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月２６日(日)のＮＨＫスペシャル　私たちのこれから「＃認知症社会～誰もが安心して暮らすために～」を見た。2025 年には国民の９人に1人、1,300 万人が認知症、または軽度認知障害になるという推計値を示していた。本人はもちろん、家族、企業、地域、社会全体に与えるさまざまな問題の深刻さに警鐘を鳴らし、問題提起をした点で公共放送にふさわしい番組だったと思う。さまざまな専門家の発言には多くの示唆があり、問題を考えるための貴重な視点が明示されていた。海外事例の

紹介、認知機能改善を目指す取り組みの提言、地域の取り組みなど網羅的に取り上げ、スタジオで議論していた。厚生労働省ＯＢの方が出演していたが、現役の責任者は出てこないのかと思った。

４月末にアルツハイマー病の国際会議が京都で開催される関係か、ＮＨＫはこの１か月、認知症関係の番組を多く放送した。「認知症　ともに新しい時代へ」と題して、３月２９日(水)にはドキュメンタリードラマ「母、立ちあがる」(総合 後 10:00～10:49)を、30日(木)は「“脳若返り”の秘策！？おトナリさんとの認知症予防」(総合 後 10:00～10:49)を放送した。前者は主人公の意志の強さ、家族の思いに感動した。後者ではＮＨＫらしく全国規模での取材力を生かした情報発信がしっかりとできていた。認知症に関しＮＨＫは力を入れた番組制作を続けており、そのスタンスを継続してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

元厚生労働省認知症施策推進室の新見芳樹さんは、2015 年にできた認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）の策定に関わった方だ。新オレンジプランは、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域で、自分らしく暮らし続けられる社会の実現を目指すというようなものだが、新見さんであればより具体的な提言ができるのではということで出演いただいた。指摘のように、現役の責任者に出てもらい、具体的な政策についてただすという作りもあることは十分に理解できる。今後も番組は続けていくので、そのつど考えたい。

○　４月２日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　マネー・ワールド　資本主義の未来「“トランプ経済”は世界を変えるのか！？」を見た。トランプ大統領が進めようとしている経済政策をなるべく柔らかく伝えようという意欲的な番組だった。経済政策は伝えるのが難しいが、分かりやすくまとめたよい番組だと思った。出演者の爆笑問題がよい味を出していた。「世界の中心にアメリカがいて、世界中を潤すんだという発想が土台にあったから世界も協力したと思うが、保護主義でグローバルを否定してしまった中で果たしてアメリカに誰がついていくのか」と専門家３人を前に分かりやすいことばでズバッとまとめていた。起用の仕方、ああいうことを言わせる番組の作り方に感心した。

○　私も４月２日(日)のＮＨＫスペシャル「“トランプ経済”は世界を変えるのか！？」を見た。分かりやすく作られていたと思う。このシリーズは資本主義の現

状と先行きについて深く考えさせる番組を続けていて、期待して見た。今回は分かりやすかっただけに、やや表面的なところで終わってしまったような印象もあった。トランプ大統領が世界経済を破滅に導くのか、それとも大化けで成功するのかという二者択一的に扱うのでは不十分だと思う。トランプ大統領の主張する政策は議会との関係で実現の可能性が高くないものも多くあり、そういうことがどう動くのか。また保護主義に関する話題では、日本だけでなく、Ｇ７、中国を含めたＧ２０、ＴＰＰで合意したアメリカを除く１１か国が、アメリカの保護主義にどう対応するべきか、あるいはどう対応しようとしているのか。そういう要素も含め、もっと多層的にトランプ経済政策を扱ってほしかった。次回以降に期待したい。

○　爆笑問題の言ったことが分かりやすかったという意見と、それ故に多面性が消えてしまったのではないかという根本的な問題についての意見がある。番組を作る側として視聴者に何を伝えようとしているのかに私は興味がある。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「シリーズ　マネー・ワールド　資本主義の未来」は去年１０月に放送した。そのときは「世界の成長は続くのか」や「巨大格差　その果てに」といった大くくりなテーマだった。今回は世の中でタイムリーに起こっていることに対して、爆笑問題の２人が、資本主義 250 年という物差しでどう見るのかというのがチャレンジングな部分だった。うまくいったところと、これからも考えなければいけないところがあったと思う。委員の指摘にもあった、多層的で深い部分を伝えることについては、タイムリーな要素を仕掛けとして持ってくる中で、掘り下げの足りないところもあったのかもしれない。番組の仕組み自体は好評なので、今後もいろいろな番組で使えないかと思っている。頂いた意見を今後の参考にする。

○　４月１５日(土)のＮＨＫスペシャル　廃炉への道２０１７「核燃料デブリ　見えてきた“壁”」を見た。初めて原子炉にカメラが入り、その調査映像を鮮明化し、専門家が話し合いをするという、大変興味深い番組だった。シミュレーションをうまく使い、とても分かりやすい説明をしていた。核燃料デブリをどう取り出すかの方針を決める年であり、廃炉に向けた節目の年だが、６年たった今でも何も見えてきていない。廃炉と言い、計画を立てるが、内実は分からないし、何をしてよいのかが分からないことがとてもよく分かった。こうした情報を提供する番組を続けて

ほしい。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」が始まった。宮本信子さんが出演しているが、かつて出演していた「あまちゃん」のような温かい雰囲気も感じた。桑田佳祐さんの主題歌も朝にぴったりで、春の始まりを感じさせる。周囲でも話題になっている。私の世代はＮＨＫの番組を見ているのは半々ぐらいかと思うようになったが、連続テレビ小説に関しては、世代問わず話題になる。「ひよっこ」のように主人公が元気にがんばる姿は、朝見るのにぴったりだと思う。それは世代にかかわらず共通の感想だと思う。毎日楽しみにしている。

○　連続テレビ小説「ひよっこ」では語りの増田明美さんががんばっている。マラソンの解説でしか聞いたことのない声が、このように生かされるのか、声は大事だと感じた。昨日、茨城県で行われたマラソンでは、沿道の応援で「がんばっぺ！」と書いてある紙を大量に見た。「いばらぎじゃなくて、いばらきです」というセリフがすごくよかったという話題も出た。テレビの影響力はすごいと思った。朝の一つの番組だが、この１５分間で取り上げられることで元気になるのだ。単純なことばで元気を与えられるということも感じた。増田さんの声も途切れることなく、がんばってほしいと思う。2020 年に向けて、よい話題がありそうでなかなか出てこない中で、「ひよっこ」を通し、スポーツが世の中を元気にしてきた歴史もあることを伝えてほしい。

○　３月２２日(水)の放送記念日特集「今　テレビはどう見られているか」(総合 後10:00～10:50)を見た。インターネット社会の進展がテレビに与える影響には驚くことばかりであり、考えるべき点がたくさん提示されたよい番組だったと思う。ノルウェーの先進例の紹介は、じっくり見ていないとよく理解できない内容だったが、今後のテレビとインターネットの融合を示しているようで関心を持った。全く違う社会をかいま見た気がした。技術の進展が社会を変えていくことの大きな枠組みは理解できたが、それが視聴者に与える影響、またテレビ局としての問題提起を伝えたほうがよかったのではないかと思う。テレビを見て、同時にスマートフォン、タブレットも見るという女性の事例は、私にはとても理解できない世界だった。三つの機器をうまく操作していても、どれも集中できないのではないかという疑問も湧いた。テレビ局としてそれをどう考えるのかも聞きたかった。世の中ではやっているドラマについても取り上げていたが、その番組を好きだから見るのであって、流行で見るというのは何かに依存している社会ではないかと感じた。結局、視聴者を引きつける番組の中身が大事というところで終わったのでホッとした。放送記念日の特集としては、技術の進歩と番組の中身との関連について課題を提起したよい番組だった

と思う。

（ＮＨＫ側）

放送記念日特集は「ＮＨＫスペシャル」のチームが制作した。若者からは、もはやテレビは「気配」で、「何も音がしていないよりはいい」というような意見まで出てきた。それは世の中の全ての意見ではなく、世代的な隔たりがすごくあるとは思う。今回の特集では、世の中でこういうテレビの見方をする人たちがいるという現状を取り上げた。作り手からすると、番組は最初から最後まで、全体を見てほしい思いがあるが、今やそれを言ってもしかたないところがある。昨年民放で放送され話題になったドラマが加速度的に視聴者を増やしたメカニズムや、大河ドラマ「真田丸」が若い視聴者を獲得した背景でインターネットがどう関係しているのかといった視点で、最後は「インターネットでの反響もコンテンツの力である」というところで話をまとめた。今後も放送記念日特集は日本のメディアを取り巻く状況を取り上げるので、そうした変化も見つつ、番組づくりの参考にできるところを探っていきたい。

○　３月２６日(日)に大相撲春場所で稀勢の里が劇的な優勝を飾った。中継は１０分の延長をしたが、優勝インタビューまでは入らなかった。私はそれほどコアな大相撲ファンではないが、その後が「ニュース」だったので、そこで伝えられなかったのかという思いがある。視聴率を見ても、国民的な関心は相当高かった。こういう際に臨機応変に対応できないのだろうか。感動の場面を一部でも生で見たかったと、多くの方が思ったのではないか。

（ＮＨＫ側）

大相撲春場所の稀勢の里の優勝については、感動のインタビューを生で聞きたかったという意見を多くの方から頂いた。中継を１０分延長したが、次の「ニュース」と「これでわかった！世界のいま」といった後番組への影響を考えつつも、視聴者が何を求めているのかを最優先に考え、編成することがわれわれの基本的な立場だと思う。今回のことを反省点とし、

どのように柔軟な編成ができるのか、その態勢も含め検討する。

○　４月５日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で発達障害児の偏食を取り上げており、大変よかった。放送した週は発達障害啓発週間だった。民放ではイベントのもようを映していたが、ＮＨＫが偏食の問題を企画として取り上げ、啓発週間に参加しているのはよいと思う。リポートでは発達障害児の偏食を、普通の人の感覚でも分かるような映像技術でうまく表現していた。具体的にはイチゴを食べられない人がいて、その感覚を、イチゴを拡大しつぶつぶが目に飛び込んでくるように表現していて、普通の人にも疑似体験できるような映像技術により、その気持ち悪さが分かり、すごくよかった。また、そういう障害があるということだけでなく、こういう工夫をすれば喜んで食べてもらえる、ということまで紹介し、希望を与えるものであったこともよかった。偏食の問題は発達障害児だけでなく、いろいろな子どもにあることだ。発達障害児だけの問題ではなく、ほかにも応用できることを伝えると、いっそうよいと思った。

○　４月１５日(土)のにっぽん紀行「“みんなの本屋”へようこそ～北海道　留萌～」(総合 後 6:05～6:38)を見た。人口流出の続く北海道留萌市では７年前にすべての本屋がなくなった。市民が署名を集め、大手の書店にかけ合い、１軒の本屋を再開、復活させた物語だった。ボランティアを含め、書店の運営にも参加し、市民が懸命に支えていた。人口２万人余りの町で、毎月１万人が本屋を訪れ、復活後は黒字経営を維持しているという。本屋を文化の発信拠点と捉え、子どもたちの未来を作るうえでの本の役割の大きさを市民が深く理解し、プロジェクトを進めてきた経過に感動した。丹念な取材により、１冊の本をめぐる本と人との関係、さまざまなエピソードを細かく丁寧に掘り起こしていた。インターネット通販が拡大し、全国的にも本屋という業態は厳しい状況に置かれているが、本との出会いの大切さをうまく発信した番組だった。「にっぽん紀行」は全国各地の人の「今」とその「思い」をうまくすくい上げ、地方から発信している番組だ。そういう形の取り組みを続けていってほしい。

○　４月１５日(土)の「アニメ　アトム　ザ・ビギニング」(総合 後 11:00～11:27)を見た。私が見ていたアニメとは全く違っていた。鉄腕アトム誕生前の話だ。とても興味が湧いた。「謎の大災害から５年」ということで、お茶の水博士と天馬博士が大学院生としてロボット研究に励んでいる。第１話は楽しかった。次も続けて見たいと思った。夜中の放送で、子どもが見られない時間だがよいのだろうか。工夫してもらいたい。

○　「４時も！シブ５時」内のコーナー「投稿！Ｄｏ画くん」を楽しく見ている。イヌ、ネコなどがかわいく、おもしろい。この前見た回では、熊本地震から１年ということで熊本に関する動画も入れていた。楽しく見ながらも、その中に熊本地震から１年と思わせるものを肩が凝らない範囲で入れることはすばらしいと思う。

○　４月９日(日)のバリバラ「目を覚ませ乙武さん　バリアフリーのために！」を見た。この番組を初めて見たが、なぜ見たかというと、キャッチーなコピーだったからだ。乙武洋匡さんは「五体不満足」を執筆されて以来、障害者の代表のように見られていた方だが、去年スキャンダルがあり、あまり露出しなくなっていた。そういう方をスタジオに呼び、ほかの障害者の方々と本音を語る番組で、とてもよい番組だった。障害者はこういうものと理解しているつもりでも、私の理解は足りなかった部分があるとはっきりと分かった。あまり深刻にならずにバラエティーという手法で楽しく進行しているところにも感心した。ぜひ番組は続けてもらいたいし、多くの人に見てほしいと思う。乙武さんの目を覚まさせるのではなく、われわれの目を覚ます番組になっていると思った。

○ ＮＨＫがこういう形でバラエティーを使うと、ＮＨＫ独自の色が出ると感心した。

（ＮＨＫ側）

障害者の中には、これまで偶像として捉えられていた乙武さんのことを、失敗もする普通の人だと分かってから好きになった人がいる。そうした意外な点をあのような形で放送できてよかった。これから 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、障害のある方が普通に総合テレビにも出るよう、徐々にしていきたいと思っている。「バリバラ」のチームは積極的にそうした企画を放送しているが、今後もそのような姿勢を進めていきたい。応援をありがたく思う。

○　４月２日(日)のドキュメンタリーＷＡＶＥ「激動の家族史を記録する　中国・新たな歴史教育の現場」を大変楽しく見た。時代の変化が激しい中で、子どもに大事なことを何とか伝えたいが、子どもを取り巻く環境が大きく変化しているのでなかなか伝わらない、という親の思いはどの国も一緒だ。文化大革命が中国の家族の中に影を落とす様子を描いており、学ぶところが大いにあった。ＮＨＫの制作者は、「人間は一緒だ」と思わせる部分と、「本当に違う」と思わせる部分の両面を伝えようとしていると思って見ている。違いを大いに見せ、驚かせる番組が多い気がす

るが、違うことばかり強調されると、大変なことが起こっても自分のこととして捉えることができない。「同じだ」と思うことで共感が生まれる。違いはありつつも同じ面があると底流で思わせてもらえるのがよいと思う。今回はそのことを強く思った。

（ＮＨＫ側）

ドキュメンタリーＷＡＶＥ「激動の家族史を記録する　中国・新たな歴史教育の現場」は取材にかなり時間をかけた。先生方の取り組み自体が、中国ではまだ珍しく、そういう中で取り組まれているということだった。中国全体として文化大革命の歴史、伝承がきちんとされていない中での取材で、伝えきれなかった点も多くあり、始まったばかりの取り組みということが前提にある。「ドキュメンタリーＷＡＶＥ」という番組は昨年度で終わったが、「ＢＳ１スペシャル」などで、中国の庶民の人たちの日常の思いをいかに拾っていくか、引き続き取り組んでいきたいと考えている。

○　ああいう歴史教育は日本でもまねをしたらよいと思った。自分の家族、親、親戚に聞いたらよいという提起は日本人も同じだと思う。

○　タレントの友近さんがプロデューサーにふんし、「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の高瀬耕造アナウンサーを厳しく指導するという内容の動画広告をたまたまＳＮＳで見た。内容もうまくできており、よい取り組みだと思った。ＮＨＫをそもそも見ない人たちをどう取り込むかは、最大のテーマだと認識している。ＮＨＫの波の中でいくら宣伝しても届かない方に届ける必要がある。ＳＮＳなどで働きかけ、今まで認識されなかった方々に届ける努力はよい試みだ。広告という手法だけでなく、ＮＨＫの魅力的なコンテンツをインターネット上でいかに多くの方々に届けるか。それをてこにし、ＮＨＫのコンテンツ・番組に来てもらう取り組みを広げることは大きなテーマだろうと思う。ＮＨＫがインターネットによい意味で積極的に取り組めるか、引き続き注目したい。

○　ニュース報道について。南スーダンＰＫＯの「日報」問題では報道他社に先んじ、防衛省幹部の肉声をオンエアし、生々しく伝えていた。よい特ダネだった。森友学園問題も積極的に報道し、ＮＨＫはがんばっていると思った。一方で、東日本大震災復興に関する今村雅弘復興大臣の記者会見での問題発言は、タイムリーに報道しただろうか。私もすべてを見ていないのではっきりと分からないが、問題が知れ

渡った後にＮＨＫは報道していたように見受けられる。報道の飛びつきにむらがあるような印象を持っているが、どうか。

（ＮＨＫ側）

評価いただいた南スーダンＰＫＯの「日報」問題や、森友学園に関する問題など、伝えるべきことはきちんと伝えていると考えている。指摘のあった今村復興大臣の発言の伝え方については、確認したところ、発言のあった当日の４月４日(火)は「ニュースチェック１１」で放送した。今村大臣の記者会見、菅官房長官の「適切な対応を求める」という発言、本人が夕方に謝罪した件も含め、放送した。翌５日(水)には「ニュースウオッチ９」、「ニュースチェック１１」などで民進党、共産党の国会対策委員長の批判も含め伝えた。６日(木)には衆議院本会議で今村大臣の資質をめぐるやりとりがあり、それも伝えている。

○　発言のあった当日は、「ニュースチェック１１」までは放送しなかったということか。

（ＮＨＫ側）

その日はロシアの地下鉄テロ、それを受けた日露電話首脳会談などがあった。そうした緊急のニュースの影響もあり、「ニュースチェック１１」からお伝えした。

○　７月でちょうど１年になるが、相模原の福祉施設で戦後最悪といわれる殺傷事件があった。この事件をわれわれがどう捉えるのかは大事な点だと思う。その割にあまり取り上げられないというか、取り上げ方にもっと工夫が必要だと思う。生産性の低い人間は世の中の足を引っ張っているという言説に対し、どういう対抗軸を出すのかが問われている。今後に期待したい。

（ＮＨＫ側）

相模原の障害者施設での殺傷事件については「首都圏ネットワーク」「クローズアップ現代＋」などでも取り上げている。また、ＮＨＫでは「１９のいのちー障害者殺傷事件ー」という特設サイトを立ち上げている。犠牲者となった障害者の一人一人を個別に丹念に取材し、その方がどういう人間だった

かということを、似顔絵とともに表現し、命の重さを伝えている。サイトには多くのアクセスがあり、建設的な意見が寄せられている。それを放送に生かすこともやっている。今の指摘も踏まえ、これからも地道に取り組んでいく。

○　周囲の人たちと話をしていると今年一番のイベントはフランス大統領選挙だという意見が多い。グローバリゼーションが終わり、各国がエゴをむき出しにする世界に向かっているような潮流がある気がする一方、３月のオランダの総選挙の結果を見ると必ずしもそうとは限らない。マーケットの今年一番の興味は、５月にフランスがどうなるかだと多くの人が言っている。ＮＨＫが持てる力を存分に発揮してもらいたい。結果はどうなるか分からないが、世界の大きな潮流をきちんと説明してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

まさに４月下旬、指摘を頂いたようなテーマで、ＮＨＫスペシャル　激震“トランプ時代”というシリーズを２夜連続で放送する予定だ。２２日(土)は、第１集「トランプ　混迷のアメリカ」で、“アメリカ・ファースト”が世界にどういう影響を与えるのかを伝える。翌２３日(日)は、フランス大統領選挙の１回目の投票日にあたるので、現地から生の情報も入れつつ、第２集「炎上　ヨーロッパ」と題して、まさにおっしゃったような内容を予定している。フランスの大統領が決まるのは５月になる可能性が高いので、そのときもいろいろな取り上げ方ができると思う。

選挙の結果については、特設ニュースや、定時ニュースの枠広げなども含めて、きちんと伝える。

○　森友学園理事長の証人喚問を、ＮＨＫは中継しないだろうという見方がＳＮＳで事前に多く流れていて、ＮＨＫはよい意味で裏切ってくれたと思う。ただ、そういう見方が多く持たれていたということは、重く受け止めたほうがよいだろう。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局